
紅炎があかるすぎる～青瀉大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅炎があかるすぎる〜青潟大学附属シリーズ中学編

【Nコード】

N6789E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

水鳥中学生徒会は現在、ふたりの副会長によって運営されている。その副会長、関崎乙彦と総田幸信は犬猿の仲だった。学校祭を前に互いの自主企画「座談会」と「フォークダンス」を持ち寄り激しく対立する。ふたりを冷静に見つめる、乙彦の親友佐川雅弘。不器用だがひたむきな乙彦を慕う一方、幸信の才知にも惹かれていく。やがて雅弘はひとつの策略を試みる。それぞれの恋心もからみながら学校祭最終日を迎えようとしている……。

おとひっちゃん。そう僕は呼んでいる。

放課後に突入するやいなや、夏の黒く硬い影を廊下になびかせながら、教室から飛び出す影、あれが関崎乙彦こと、おとひっちゃんだった。

夏服の白いワイシャツを、しっかり襟まで閉め、職員室の方に向かっていった。職員室まで来ると少し足音を忍ばせる様子だった。

もう八月の末だというのに、まだ衰えない夏の暑さで、汗がにじむ。僕がここにいるのを気付いてか気付いているんだろっか。

タバコの煙が目の前まで白くたゆたっていた。軽くむせている様子。おとひっちゃんは乱暴にと職員室の引き戸を開け、生徒会顧問の先生がいる机へと向かっていこうとした。

そこで僕は初めて声を掛けた。

「あ、おとひっちゃん？」

僕は学習委員だ。チヨーク入れと教科書を先生から預かっていた。授業が終わると、必ず学習委員が職員室まで、授業道具を持ち運ぶことになっている。

煙が僕の頭の上を流れているのがわかる。たばこくさくなりそうだ。

「雅弘、これから生徒会室に來い」

おとひっちゃんは咳きこみながら、僕にささやいた。

「なにかいいこと、あったみたいだね、おとひっちゃん」

「ちよつとばかり、おもしろいことになりそうなんだ」

「舞い上がっているって感じだもんなあ」

「そう見えるか？」

おとひっちゃんは、学生帽を右に左にと持ち替えてつぶやいた。

「俺、完全に舞い上がっているだろ」

言い残し、おとひっちゃんは社会の先生のもとへ向かった。生徒会顧問だ。

言葉どおり炎がなにか、燃え立っているみたいだった。

心臓から、夏の陽炎のように、わやわやと。

僕は国語の先生に教科書とチョークを渡した後、すぐに生徒会室に向かった。南京錠がまだかかっていた。おとひっちゃんも、時間を食わなかったら、すぐに来るだろう。

二階、図書館の隣。

倉庫とみまちがえそうな細長い部屋がそこだった。

誰もいない生徒会室。

おとひっちゃんにとって、もっとも気楽でいられるところ。

そう、らしい。

生徒会副会長に当選してから、おとひっちゃんは同じ組の連中と遊ぶ時間が減っているようだった。そのせいだろうか。僕を付き合わせ教室ではしゃべることの出来ないようなことを話してくれたものだった。

「まだ、誰も来てないよ」

「まったく、たるんでるしな」

おとひっちゃんは鍵をはずした。

「だいたい生徒会室に鍵がかかっているなんて、ほんととはあっちゃならないことなんだ」

さつと戸を開け放った。むせ狂ったような空気が鼻についた。

「本当は、できるだけ役員が待機していて、他のみんなが気軽に入ることできる、そんなところにしておくべきなんだ」

入り口からは真っ直ぐ見える大きな窓ガラス。跳ね返った光がまぶしすぎた。眼の中を刺しそうだった。痛い。涙が出そうになった。調度品は古めかしく、黒光りしている。先に入ったおとひっちゃんはその逆光を浴びていた。なんだか、影絵芝居の登場人物のようだ。

後光が差している。

窓際から伸びている、長めのテーブルに、平行四辺形の反射光が白く光った。おとひっちゃんはその明るい部分にノートをぽんと置いた。

「なんかさあ、俺、この日のために副会長やってきたんだなあって気、すごいするんだ」

いつになく、おとひっちゃんはよくしゃべった。

「荻野先生から、噂は聞いていたんだけど、今日正式に決定したんだ」

「何がさ」

「今年の学校祭」

そついう時期なんだ。

夏休みが終わったばかりのせいかな、まだぴんとこなかった。

「期間が三日間あるだろ。そのうち最初の二日間は学校行事いろいろな講演会とか、ブラスバンドの発表会とかで、動かせないものばかりだって」

そつだそつだ、去年は三日ともそついう感じだった。

「今年はなんと、第三日目を生徒会の自主計画に任せてもらえるんだ！俺たちの手で動かせるんだ！」

おとひっちゃんは窓から身を乗り出した。僕も側に寄っておとひっちゃんの表情を眺めた。アカシア、ななかまど、花も実もない木々が、緑葉だけつややかに輝かせているのが見えた。ずつと奥にはグラウンド。サッカー部の練習だろうか。こまこまと動き回っている。そのまわりを、円を描くように陸上部の連中がゆったり、走っている。

「弁論大会がいやだっていうんじゃないんだ、俺。ああいう真面目に一生懸命やることって、すげえ好きだよ。でも、先生の手が入るだけ入っているのを、みんな読み上げているだけだろ。本当に言いたいことは全部削られたって、先輩も言っていたんだ。だから、去年は三日目弁論大会だったのを、俺たちにその時間、くださいって

頼んだんだ。ちゃんと理由も言ったよ。そうしたら、荻野先生も話を通してくれたみたいでさ。今日、やっとOKさ」

水鳥中学校祭恒例の弁論大会は、三日目に行われるはずだった。よくぞ撤回できたものだと思う。新企画を立てるまでにこぎつけるには、おとひつちゃん一年がかりの「憤」が種になっていた。あまりにもひどい、ひどすぎるとおとひつちゃんは血を上らせ、学級日誌を三日分使って、抗議していたらしい。同じ組でないから直接見てはいないけれど、友達から詳しく聞いた。

去年の学校祭直後は、おとひつちゃんの熱弁に悩まされたものだった。よく覚えている。

去年も一応、生徒企画のものはないわけじゃなかった。

ただ、内容がひどすぎると言われてもしかたのないものだった。

テレビクイズ番組の真似ならばまだ参加できるからいいけれど、先生たちの脚本を押し付けられた民話演劇にはみな、眠くなる一方だった。それに繋がるブーイング、やじ、途中退場。それに対決を挑む先生たち。終わった後に残るのは、関わったものだけの自己満足だった。僕たちに残るものは、ほとんどなかった。

おとひつちゃんが怒りまくるのも、僕は決してわからないわけじゃない。

「俺がもしやるとしたら、こんなくだらない学校祭なんてやらないもつと、楽しく、祭りの後にも何かが残ることをしたいんだ」

もちろん敬語を使っているだろう。先生達には。

きつと啖呵を切ったんだろうな。おとひつちゃん。

先生達には、おとひつちゃんの発言がイコール、『次期生徒会出馬表明』として受け取られたらしい。

一年が経った。あと一ヶ月でおとひつちゃんの任期も終わる。長かっただろう。

おとひつちゃんは両手をぱしりと、テーブルに下ろした。

「それなりにさ、俺も必死こいてきたつもりだよ、でも、やっぱり、

俺って無力だよなあ。ちつとも変わんないでやんの」「でも、おとひっちゃん、やってきたこと、すごいよ」

「俺がやればやるほど、他の奴は逃げるしさあ。こければすぐ生徒会のせいにされてしまうんだ」

おとひっちゃんは物憂げにグラウンドの群れを目で追った。

「でも、学校祭は俺たちのお祭りだろ。生徒会まかせにしておいていいと思うか？ 学校祭は、一部の奴の義務なんかじゃないんだ。もっともっと、楽しいものはずなんだ」

僕の答えを待たずに強く頷いた。テーブルに戻り、置きっぱなしにしたノートを広げた。僕の前に差し出した。

第一行には、右に跳ね上がった筆圧の強い字が並んでいた。

- - -
- - -
- - -

水鳥中学学校祭 第三日目生徒会自主企画書

二年 生徒会副会長 関崎乙彦

僕は学校祭代三日目自由企画に「教師VS生徒」による本気本音の座談会を提案したい。テーマは後ほど決定する。今までは先生たちの圧力などで押しつぶされてきた意見などがたくさんあるはずである。それを公の場でぶつけあい、あとあとまで残るものになりたい。

- - -
- - -
- - -

「座談会？」

「早い話、先生たちが思っても見なかったようなことを、アドリブで言ってやって、へこまそうって魂胆なんだ」

「ふうん」

「すぐにすごいと言いつ切れなかった。」

「おとひっちゃんの情熱だけがなんだか熱かった。」

「でも、一歩間違ったらけんかにならないかなあ。そんな企画、簡単に通してくれないと思うよ」

「大丈夫、さつきちらつと匂わせてきたんだ。そしたらおめでたいもんでさ。『それはいい、ただの遊びで終わるのではないか』思っていたけどな、そうか、生徒の自主性を活かせる企画になりそうだな』なんて、にこにこしながら言ってたぜ」

「それなら、それでうまくいくんでないの」

「僕は、声が裏返ったような感じで答えた。」

「自分でも少し、無責任っぽく聞こえた。」

「本音なんだから仕方ないのかな。」

「おとひっちゃん、来年もあるんだから、そうあせらなくたって二年のうちに全部やるうなんて思わなくなつていいのに。」

「次期改選も近い。おとひっちゃんには明日がある。」

「なのに、なんだかおとひっちゃんにはせっぱつまつたものがある。」

「来年はないんだ、雅弘」

「おとひっちゃんは口を一字に結んだ。」

「俺はこれが成功したら、生徒会を引退する」

「すつと笑みを隠して、言った。」

「僕は思わず声を上げ、おとひっちゃんを指差してしまった。」

「おとひっちゃん、どういうこと？」

「この時まで、ずつとおとひっちゃんは次期副会長かもしくは生徒会長に立候補するものだと思っていた。毎年そうだけれども、生徒会経験者が二年でやめるなんてことは、普通絶対ない。」

「大抵、現在の副会長あたりから生徒会長が立つ形になるし、会

長にまでならなくともなんらかのポストに残るのは約束だった。

冗談を言っているつもりなのだろうか。

でも、おとひっちゃんの顔にはなんとなく、はにかんだようなやさしい笑顔が浮かんでいた。めったに、他の奴らには見せない、やわらかい表情だ。ずっと小さなころから、僕をかばってくれた時、泣かされていたときにかばってくれた時、

「雅弘、俺はお前の親友だからな」

と言ってくれた時。僕には見慣れた表情だった。

窓辺から来る弱い夏風。頬を撫でさせている。でも不意に部屋の方を向いた。日焼けしてうつすらと染まった顔。目鼻口、硬くつややかに焼かれ、顔に埋められた陶器のように、見えた。ただ硬いだけではなく、ぶつけるとこわれそうなもろさが同居している。時がくれば夏の日焼けも消えるだろう。皮がむける時。落とせば砕け散る破片。その下からおびえたように震える肌が現われるだろう。

おとひっちゃんの本質を、僕は十三年かけて、見つけてきたつもりだった。陳腐な言葉だけど。言ってしまう。

『純情』なんだよな、おとひっちゃん。

「そんなもつたいないよ、せつかくここまできたのにさ、おとひっちゃんすごく苦労していたの、俺は知っているよ。なのになんでさ」
おとひっちゃんは軽く伸びをして僕に顔を突出した。

「俺は生徒会長なんて柄じゃねえよ。もともと上に立ってまとめるなんて、出来ない性格なんだ。俺が生徒会に入った理由って、一にも二にも、学校祭をやりたいだけだしさ。前代末聞の生徒一丸学校祭を作り上げて、華々しく引退するって、最初から決めていたんだ」

「俺にはそんなこと、一言も言わなかったじゃないか」

「言ったら、選挙に落ちるに決まってるだろう。そのくらいの計算は、俺だって働いていたよ」

肩をすくめて、おとひっちゃんはちらりと窓辺に目を向けつばや

いた。

「来年は受験生だしさ」

未練だ。でも、気持ちわかる。

どうしても行きたい学校、あるんだよな、おとひっちゃん。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

おとひっちゃんが黙ると、窓の外、図書館、廊下からさまざまなざわめきがなだれうって聞こえた。合唱団の歌声、家庭科室から足踏みミシンの緩やかな響き、階段を駆け上がってくる派手な足音。

「あいや、佐川と関崎、またホモだちごっこ、してるっつで」

いきなりがらりと開いてのけたのは、水鳥中学生徒会、もうひとりの主だ。そっだゆきのぶ総田幸信。同じく生徒会副会長。

「そういう言い方やめろ」

おとひっちゃんはきつと見据えて怒鳴り返した。

「だってえ、そういう雰囲気だったんだもおん」

顔色変えず、口調だけなまめかしく答えた。

なんだかいやな予感がする。過去の経験からも明らかだ。僕はそろそろ退散することに決め、学生帽に手を伸ばした。

しかし、僕に対しては目ざといおとひっちゃんだった。

「雅弘、ちょっと待ってろ」

かばんを引き寄せたとたん、おとひっちゃんの止めが入った。

言いたいことはわかる。

おとひっちゃんと総田を二人つきりにするな、そう言いたいのだろっつ。

しまった。家の手伝いがあると、最初に言っておけばよかったな。今日は暇なんだと、答えてしまったのは大失敗だ。

しかたないや。水鳥中学生徒会毎度恒例『関崎VS総田』のらみ合いに立ち会わなくてはならないよ。

広げっぱなしのノートを閉じ、おとひっちゃんは総田の第一声を待っていた。

「なにそうにらむんだよ。ったく、おとなげねえの。わあつたよ。さいならするよ」

総田は唇を一瞬への字のに曲げ、背を向けた。

本気で帰る気はなさそうだ。ポーズだポーズ。

戸口で立ち止まり、

「なんか、俺に言いたいことあるんだろ」

数テンポ遅い口調で振り返った。さっきとは一気にけろつとさわやかな笑顔である。百面相総田と、ひそかに僕は呼んでいる。余裕があるように、見える。

「学校祭のことを聞いたのか」

反対におとひっちゃんは重ったるい声で答えた。どすが利いている。

「ああ、学校祭三日目のことだろ」

「総田は、どうするつもりだ」

どすとさわやか声の対比がばらばらだ。かえってそれが怖い。

お互いに自分のテンポを崩そうとしないのだから。

「どうするもこうするも、俺たちがやるしかないだろ。好きなようにやれて言われているんだからさ。やりたいようにやればいいんでないの」

うん、たとえば、と首をひねりながら、総田の足は僕とおとひっちゃんの立っている方に向かった。結局、生徒会室の奥に来たかったんじゃないか。白い光はたらたらとしたたっていた。その光を浴び、総田はまぶしそうに目を細めた。細い隙間から外を眺めやり、

「たとえば、グラウンドを利用するってのは」

「運動会でもやるつもりか」

「そういつのは関崎のお得意だろ。俺、総田幸信はやっぱり、全校生徒の皆様にご奉仕しなくてはならないと思うわけでありまして」

「それとこれとどう関係があるんだ」

「まあそうさな、アイドル歌手のコンサートやるとかさ」

おとひっちゃんの心によぎった言葉を、僕はかなり正確に読み取れる。

一言、狂気の沙汰。

こんなもんじゃないかな。

「からかうのもいいかげんにしろ」

それでもあえて声を抑え目になっているのは、おとひっちゃんも一年でかなり、辛抱強くなつたしるしだ。本人もきつとそう思っているに違いない。僕からしたら、尻尾丸見えなんだけれども。

「冗談でもできるわけないこというな。ここは学校なんだぞ」

「良くご存知で。俺もよく知っているぜ」

ちゃんとおとひっちゃんの出方を計算しているのだろう。

「大体、常識つてものがないんかよ」

素直ないやみじゃない総田のつつこみ。こういうのが一番、おとひっちゃんの苦手なところなのだ。ストレートに文句をいうなら、爆発して怒鳴るなり殴るなりできるだろう。でも総田は決して、そういうわかりやすいことをしない。もし手出ししたら、一発でおとひっちゃんが悪者になるようなシュチュエーションに持っていく。挑発にひっかかることもあれば、うまくやり過ごしてくれたことも逢った。いや、気付かないことも多かったと言い換えた方がいいんだろうか。おとひっちゃんは、都合のいいところで鈍感なところもあったから。

総田の声がいきなり跳ね上がった。

「関崎、お前こそ、同じ年の連中が持つ常識つていうのが、わからないのかよ」

おとひっちゃんの方がぴくりと動いた。何かを言おうと口を「あの形に開けた。それを押しとどめるように、

「お前の考えは、今さっき荻野先生から聞いてきた。なあにが座談会だよ。思いつきり笑っちゃうって。せっかくさ、俺たちにバトンを渡してくれて、好きなようにやれって言ってくれたんだ。その好

意を無駄にしちゃ困るぜ」

腹式呼吸を使っているに違いない。腹の真中をほっほっほと三回膨らませて大笑いしてみせた。芝居がかっている。良く響いた。負けるわけないと思っっているのだろう。さらに続けた。

「まあ、関崎の言う風に座談会とやらをやってみたとするさ」

「とやらってのはなんだ!」

「まあまあ、したら、どうなると思う?」

「なんだと?」

腰に手を当てすつくと立ち上がった。つかつかと近寄り、にらみつけているおとひつちゃんの鼻先に人差し指を突きつけた。一歩たじろいだ様子のおとひつちゃん。

「考えたくないだろうが、去年の焼き直しさ」

ただでさえ大きな目がさらに見開かれている。

「つまり、あんたの発想っていうのは、先生たちと全く変わらないってことさ」

「なんだと、もう一度言ってみろ!」

一年前のおとひつちゃんだったらここで総田の襟首を引っつかんでいただろう。少なくとも、怒鳴り散らしていただろう。でも今聞こえた声は、かろうじて普通にしゃべる響きのままだった。

おとひつちゃん、成長したよな。ひそかに僕は感心した。

おとひつちゃんと総田との中は決している方とはいえない。

去年、生徒会役員選挙で初めて顔を合わせた時から、たぶん誰もが気付いていただろう。僕だって、生徒会室の雰囲気がここまで険悪だとは思わなかった。共通点といえば、唯一、ずばぬけて成績がいいということくらいだろうか。もっとも一年の頃からおとひつちゃんは学年トップを守りつづけていて、それをしつこく追うように総田がひつついているといった構図だ。

服装が一番、見分けやすいんじゃないだろうか。

あくまで標準の学生服そのまんまに着こなしているおとひつちゃん

ん。ただし今は八月なのでワイシャツのみだけでも。それでも三十度を越す暑さの中、乱れぬようにワイシャツの襟を止め、隙間なくベルトを締めている姿にくらべて、総田はまさに「乱れる」という言葉がぴったり来る。

ベルトからして目立つ。蛇腹の黄色いしろものに、太め感たつぶりの学生ズボン。一年前からはやっていた幅だった。足の短い奴がはくと非常にまぬけだけでも、たっぱのある総田はだぶつかないように着こなしている。髪は「天然パーマ」と申告しているので注意されることもないが、僕はこっそり聞き出した。中学入学式前日にすっかりかけてきて、それ以来三ヶ月に一回はきつちりと形を整えてくるのだそう。学校側にはばれていない。秋になれば、裾に竜を刺繍した学生服を羽織り、生徒会室に乗り込んでくるであろう。もちろん服装検査の前には普通のものにするという。先輩からのもらい物だといって、去年さんさん見せびらかされたものだった。

こいつらが本当に同じ、生徒会副会長なのか。

そう思われても仕方ない。

まさに、座談会とコンサートの違いと一緒。

合い通じるものを探せといわれても無理だろう。

「総田、もう一度聞く。どういうことだ。どういう意味だ」

おとひっちゃんの口調は震えている。必死に理性で押さえている様子だ。限界のメーターはそろそろあぶないところまでさしかかっている。知ってか知らずか、総田はふふつと笑いを漏らしながら続けた。

「あんたを抜かして考えるとすればだよ。まず、『普通』といわれる中学生たちが、こんな真面目なイベントに乗ってくるもんかね」
口をひらきかけたおとひっちゃんを今度は平手で封じた。もちろん鼻の前。さわりはしない。ストップのポーズだ。

「たとえば、テーマを『校則』にしたとする。先生たちを真中に十人くらい置いて、代表参加の生徒たちも同じくらいの数にすると。

後の連中は体育館にずらつとならんで、安座して、言いたい時に手を上げて発言するってわけだ。三百人の全校生徒が体育館に集まるってわけだよな。まずは、そいつら全員に目が届くと思うのかよ」「だから、思うことを直接手を上げればいいんじゃないか。みんなに参加意識をもってもらえば」

少しうつむき加減に、視線は総田の方へ向けたまま、おとひつちやんは低く答えた。

「参加意識を、どのくらいの連中が持っていると思うかねえ。それ以前に、『座談会』なんかにどのくらい参加したいと思っている奴いるか？ 大抵はさつさと切り上げて、おんもに行つて、ゲームセンターあたりでうろつろしたいとぶつくさ言っているはずだぜ。または寝まくっているか。尻が痛いなあ、いいかげん終わらねえかなあつて、あくびかみ殺しているだけだぜ」

「だから、そうならないようにするのが生徒会の仕事だろう！」

「さらに言う。俺とかならともかく、他の連中が先生達の言い分をひっくり返せると思うか？ どうせ言いくるめられるに決まっていと、みなあきらめてるぜ。ここでいいことを言つたとしても、あいつらには全く、利益なんてねえんだからさ」

「利益は自分の中にたまつていくものだ。割り切ることなんてできるかよ」

「と、思っているのは、関崎、お前だけじゃねえの。参加意義を強く感じているあんたの気持もわからないけれどな、あんたとおんなじことを、俺たちや他の生徒たちに求められたって溜まったもんじゃねえ。知ってるか？ やつぱり、学校つてつまらん。生徒会？ ひまだなあ。ご苦労さん。学校祭？ さつさとふけようぜ。 ばっかでないの、とこんなもんだ」

身振り手振りも華やかに、総田は言つてのけた。

別に演劇部でもないっていうのに、「不良」と呼ばれるみなさまのポーズを三種類くらい取ってくれた。通称「ヤンキーすわり」で膝を広げてしゃがみ、タバコを吸うように二本指。投げキッスに似

ている。かと思えばポケットに手を突っ込み口をぎゅっとひらいて鼻の穴を見せつけるポーズ。

リアルだ。本当に、そう思う。

口八丁手八丁のパフォーマンスに説得された連中が今までどれだけ多かったことが、つくづく思い知らされる。

出来そうにないおとひっちゃんをあきれたような表情で唇を曲げ、吐き捨てるように。

「そういうのを、『見てきたようなうそを言う』って言うんだ」

舌打ちしながら答えた。

「人間の第六感が優れていると言っても言っただけだしな」

「総田の予知能力がもし完璧だとするならば、じゃあ、生徒って一体何をやりたがってると思うんだ。それをまずは説明してみろよ。

つまりそれがコンサートなのか？ 言っておくけど、学校側は一日を使うことを許してくれたけれども、予算はそんなに使えないんだ。第一、誰か有名人、呼べると思うのか？ いくらなんでも、俺たちに任されているったって。ここでしくじったら、また来年から不毛な先生たちのおしつけ行事に戻ってしまう・・・」

つかえながらもおとひっちゃんは一気に言い放った。

言葉が上手に出てこない。

唇の端で総田がせせら笑っているのがちらりと見えた。

おとひっちゃんが気付かないわけがない。真っ赤になっている。

「そうか。やっぱ、関崎の発想はそこまでか」

夕暮れの色、甘い朱色が光に少しずつ溶けていった。窓に当たる反射光にすると混じっていった。風が温もりを飛ばして、冷ややかに吹いていた。

部屋の湿った空気が冷え、僕とおとひっちゃんたちを囲む光も斜めに薄れている。こういう時は、そろそろ会話を打ち切らなくてはならない。今日は四時までしか残れない。校内放送が、下校の案内を告げている。

「じゃあ、どういう発想だったらいっていうんだ」

「遊び慣れてねえやつって、困るよなあ。教科書以外の外を見るよ」
総田は噛み砕くような口調で説明を始めた。

馬鹿にしている。おとひっちゃんが気付いているかどうかはわからなくとも、小学生に話し掛けるような言い方はまずいんじゃないだろうか。

「だから。なにも。コンサートに必ずしもプロを呼べとは言っていないだろ。世の中にはアマチュアバンドっていう、無料でいろいろ演奏してくれる人たちだっているんだ。そこまできなくともさ、学校の中でバンド組んでいる奴ってたくさんいるだろ。ごろごろいるぞ。何グループから集めて、『水鳥中学アマチュアバンドコンクール』とくれば、ただで、問題ほとんどないイベントができるさ。大成功すると思うな。これこそうちの学校の連中が求めていたイベントだからなあ。みんなで一丸となつて盛り上がるんだ。ただし……そのまま提出したら、あんたさんは発狂するだろうな。後始末を佐川に任せるのはちよいとかわいそうだ」

計算が透けて見えた。

おとひっちゃんの頬が夕日で真っ赤に染まっていた。

「あたりまえだ、誰だってそうに決まってるだろう！ 誰もがバンドをやりたいがつてるわけじゃないだろう！ 俺は別にバンドを嫌っちゃいないが、でもやりたくない奴だっているだろ！ 先生たちだってロック系統を嫌っている人いるって知っているだろ。一部の有志だけで盛り上がるのはもうたくさんなんだ。だから俺は！」

再び腰に手をあて、片手でおとひっちゃんの鼻先に指を刺した。

「交換条件といきましょうか」

「どういうことだ！」

「交換条件さえ飲んでくれれば、俺は喜んで座談会とやらに、協力してやるぜ」

「だから、とやらって言い方はやめろ！」

総田は続けた。

自信を積み上げたという顔で。

「フォークダンスと、ファイヤーストームっていうのは」
おとひっちゃんの目がさらに見開かれた。

「フォークダンス、って、おい」

「マイムマイムだけじゃない、オクラホマミキサー、トロイカ、とにかく男女ペアで踊ることのできる奴を選曲しようや」

男女ペア、という言葉に力が入っていた。ねばっこい。

「おい、まさかだろ」

「ちよいと生きのいい学校ならよくやってることだろ」

大げさかもしれないけれど、おとひっちゃんの様子、明らかに凍り付いていた。思い当たる節がある。おとひっちゃんの場合、「弁慶の泣き所」といえる部分が、丸見えなのだから。僕も、無駄だと知りつつ、こういうしかない。

「おとひっちゃん、落ち着けよ」

見るに忍びないものがあつた。

「よく、そこまで言えるよな、総田。お前だけの感覚で、物を簡単に決めるなよな」

説得力なし。隠すこともできずに、ただおろおろしているんだから。おとひっちゃんのそういうところを、純情と取るのか、それとも不器用と取るのか。難しいところだ。

別に、フォークダンスくらい、たいしたことないのに。

僕だったらそう思う。

手を握るつたつて、せいぜい数秒程度だろうに。

おとひっちゃん、そんなに動揺することないのに。

それに第一。さっきたんとかならず、手を握ることになるなんて、ことないんだからさ。

全くおとひっちゃんは、やったらめつたら、神経質だよなあ。
女子のことについてはさ。

さらにつつこみを続けるんじゃないかと思っていたのだが、どうも收拾がつかなくなってしまったらしい。電池切れといった方がいいんだろうか。総田の様子をうかがうと、ふいつと天上を見上げて、鼻歌を歌っている。言葉を返さずに、なにやら時間稼ぎしているらしい。かかとをつけたままりズムを取りつつ、ふふふふんと軽くはもっている。

僕はしばらく総田の方をじっと見つめた。妙なことを考えているわけじゃない。ただ、なんとなく、ひっかかったただけだ。おとひつちゃんからしたら、きつと

「余裕かましてみせて俺を怒らせようとしてるんだ」

と思っているんだろう。でも、僕からしたら、なんだか自分で何をしたらいいのかわからなくなつて、大至急計算しなおしている風に見えてならなかった。僕が思いつくくらいなんだからおとひつちゃんも、もつと気付けばいいのに。僕よりずっと、頭がいいんだから。

「総田、どうしたんか」

僕は、なにげない表情をつくつて尋ねてみた。

「なんだか、困っているようだけどさ」

はつとしたように総田は僕の方を、まんまるい目で見返した。

「困つてなんかねえよ。たださ、思ったより衝撃がでかかったのかな、って思つたわけだよ。佐川の親友がさ」

「いいかげんにしろ！ 言いたいことがあればはっきり言えよ、雅弘を通したりなんかしないでさ！」

「もつといいよ、おとひつちゃん。あのさ、総田。フォークダンスのことってまだ、先生には通していないんだろ。だったら、これからゆつくり考えればいいよ。もうそろそろ帰らなくちゃならないしさ、俺、閉じ込められたくないから、先に帰るね」

タイミングを計っていたのに気付かれたくない。おとひつちゃんはたぶん気付かないだろうけれど、総田にはわかるだろう。まあいい。僕はかばんの柄を握りなおし、おとひつちゃんに笑顔を向けて

ドアを開けた。総田にも軽く頷いた。

「おい、雅弘、ちよつと待った」

「思い出したんだ、今日父さんに、配達するよう頼まれてたんだ。ちよつと遠いところだから、早めに帰るね」

「今日は暇だつて言つてただらう！」

「うん、そのつもりだったんだ。でも香弥（かみ）の方まで行く用事があつたんだよな。明日雨かもしれないから、今日のうちに片付けておきたいんだ」

はたして、納得しているかどうかなんて僕には知ったことじゃない。

僕の家は書店を経営している。大抵放課後は僕が、自転車で定期刊行物や注文の書籍を配達することが多く、あまり居残りができない。明日までに配達しなくてはならないところがあつたのを、都合よく、たつた今、思い出した。早いうちに片付けておけばいいんだから、嘘を言っているわけじゃない。

「佐川、ちよつとあとで話がある。頼む」

すれ違い際に総田が、耳もとでささやいた。振り向くと、親指を立てて、にやりと笑っていた。頷き返し、僕は一瞬、しまる直前の生徒会室を目に焼き付けた。

おとひっちゃんは、何も言わず、ただ凍りついていた。

僕にはすべてが読めてしまった。

総田の計画におとひっちゃんが乗せられただけの話だった。もし僕が総田の立場だったら、最初からフォークダンスで企画を打ち出すなんていう、単純なことはしないだらう。いきなりだったらおとひっちゃんの拒否反応がどう出るか想像つかなくて、通るものも通らないだらう。そこで、ショック療法を施そうと思う。

最初に

「コンサートをやるか」

と打撃を与え、頭を麻痺させる。

「ふざけるな！」

と激怒するおとひっちゃんをひとりでわめかせておいてから、次に妥協案を出す。

フオークダンスだ。

おとひっちゃんは一度ガンとやられると、二回目からはわりとおとなしく頷くタイプだ。口では文句をぶつぶつ言っていたとしてもあきらめて自分なりのことをして尽くそうとするタイプだ。この一年、何度も試して成功していたのだろう。

そこまでは正しい。僕もたぶん、総田だったらそうするだろう。

しかしながら、まだ甘い。

おとひっちゃんを総田はまだ、知り尽くしちゃいない。

こんな初歩的な間違い、誰が犯すかって。

おとひっちゃんにとって、フオークダンスというのは決して、妥協案になるようなことじゃないのだ。もちろんお金のかかるコンサートなどを行うというのは、「生徒会」の立場として、できるだけ避けたいことだろう。ただ眺めているだけで終わりたくない、思っているからだろう。おとひっちゃんが望んでいるのは、「全校生徒が一丸となつて、企画に参加してくれる」ことであり、それゆえの「座談会」なのだから。もちろん総田の指摘通り「みんな退屈して結局同じこと」というのもその通りだと思ふし、僕も「教師VS生徒」の対決がうまくいくなんて思っちゃいない。

そうなんだ、つまり、生徒会副会長として、コンサートという行事が許せないだけだ。

しかし、フオークダンスとなると、副会長ではなく、関崎乙彦としての激しい抵抗がもろに出てきたんだろう。僕にもその辺の思考回路がどうなっているのか想像つかないけれど、おとひっちゃんとはにかく、女子の顔をまともに見られないところがある。何も悪いことしてないくせにだ。小学校五年生あたりから、妙に女子としゃべることを嫌がりだして、僕をひつつれてはいつも男子同士で遊ん

でいた。決していじめたり、悪口を言うわけじゃない。基本的には自分から手伝ってやったりするし、

「おとひっちゃんはまだ女子としゃべらないけど、やさしいよね」と言われている。

その傾向は続いているのだろう。

おとひっちゃんと同じクラスの奴に聞くと、相変わらず女子とは最低限しか話をせず、何かからかわれるといきなり真っ赤になってしまったりするという。

そんなおとひっちゃんが、「女子と手を握り合う」ようなフォークダンス案をすんなり飲むとは思えない。総田に「自分と同じ感覚で物事を決め付けるな」と言うけれど、それはおとひっちゃんにも言えることだ。おとひっちゃんは、全校生徒がみな、おとひっちゃんのように女子としゃべって真っ赤になるからフォークダンスなんてやだと言っている。しかし、僕は結構面白そうだと思っているし、それ以前に、女子を見て真っ赤になっただけでもない。すべてが僕と同じなんてことはないと思うけど、そういう奴だって、水鳥中学にはいる。

恋愛っぽい要素が少ない行事だったら、総田のことだ、いくらでも思いついただろうに。

種をまいたのは総田だ。さて、僕としてはお手並み拝見といこうか。

関崎副会長VS総田副会長。

学校祭三日目を巡る対決。

学校祭本番よりもそれを楽しませてもらおうかな。

水鳥中学生徒会がここまで風雲巻き起こる状態になったのは、かつてなかったのではないだろうかと思う。僕はあくまでも傍観者だから、おとひっちゃんや総田の動向を観察することにより判断するしかできない。でも、やっぱり、初めに問題ありき。

すべては生徒会長が立たなかったことに諸悪の根源がある。

本来だったら当時二年生現三年生の生徒会役員から立候補するのがすじだろう。

誰もがそう思っていたはずだ。

しかしながら内部事情でいろいろあつたらしく、次の選挙に二年生誰一人立候補しなかった。生徒会は決して仲のよい連中ばかりでなかったのだろう。想像はつくけれども、でも、立候補者が当時一年生現二年生のみという状況は、ちょっと異常だった。

先生達が裏でいろいろ説得して、見所あると思われた一年生を無理やり立候補させた。というのが本当のところだ。おとひっちゃんだって、最初は相当戸惑っていたはずだ。

「雅弘、俺なんで、いきなり生徒会副会長に立候補しなくてはならないんだろうなあ。俺はただ、学校祭があまりにもひどすぎるからって、先生に言ったただけなのになあ、話がいきなり大きくなりすぎてるよ。俺がもし、生徒会に入ったら、陸上もやめなくてはならなくなる」

当時おとひっちゃんは、陸上部で長距離を中心に活動していた。中体連などではしょっちゅう出走して、それなりにいい成績を修めていた。三年間続けるつもりでいただろう。

生徒会に入ってからおとひっちゃんは、無言で陸上部をやめた。「とつてもだけどな、体力がつかないもん。勉強する気力がも

たねえよ」

学年トップの座をなんとしても守りたかったのだと、僕は勝手に想像する。

おとひっちゃんは、同じ学年の奴らにくらべて妙に順位へのこだわりがあつた。もともと成績は小学校時代から群を抜いていた。でもここまです死にやるとは僕も思っていなかった。

現在でもおとひっちゃんは学年通して首席を守り続けている。

生徒会の内部事情を知らない奴ならば、きっと、おとひっちゃんか総田か、そのどちらかが次期生徒会長を務めることになると思ひこんでいるだろう。

僕だって、疑つたことなかったのだから。

信任投票という形になり、いやおうなしに副会長がとばかりを受けた。

共に会長業務を担当するはめになってしまった。

上に立つ二人が仲良しだったら問題はないが、残念ながらそうじゃなかった。

さらに言うならこの二人、おとひっちゃんと総田。

出会つた時からウマが合わなかった。

おとひっちゃんが言うには、総田の存在を知つたのは総合成績順位上位の二番手にいつもくつついている、『総田幸信』という名前のみだったという。部活にも入っていない、自由気ままにふらふらしているようだけれども、やることはきっちりやるし、クラスの信頼も厚いらしい。

さらに言うなら全学年の女子から人気も相当なものがある。彼女になりたがる女子は下級生から上級生にかけて切れたことがないとか。そんな噂もあるくらいだ。

女子受けは非常によい。

おとひっちゃんがどこで反感をかつたのかはわからない。

ただ、お互いに話せば話すほど、性格の不一致に鳥肌が立つばかり。

「俺のどこが悪いんだって言うんだよ！」

口癖のようにおとひっちゃんは、僕につぶやいていた。

「俺のどこが悪くて、みんなは総田のことばかり言うこと聞くんだよ！ 雅弘、いったい何処が悪いんだよ」

僕には大体わかるけれども、答えられない。

……答えるわけ、いかないじゃないか。

……おとひっちゃん、もう少し感情を隠してへらへらした方がいいのにな。

顔には素直に感情が表れるのに、口には出せない。

もっとまずいのは、自分で気付いていない。

つりあいの取れない表情で、まぬけなことを口走る。

男子女子問わず、分け隔てなく話すことのできる幸信は、からかうのが面白くてならなかったらしい。総田は生徒会室で交わされたおとひっちゃんとの会話をすべて、クラスの連中に演技つきで説明したらしい。

嫌な奴、と思う前に、僕も観てみたかったと思う自分がいた。

僕が総田を、おとひっちゃんの色眼鏡なしで知るようになったのは、ちょうど、服装規則改正問題の勃発した頃だったと思う。

一年の半ばといえば、まだおとひっちゃんのことを一番に考えていた次期だった。おとひっちゃんの持つモラルを疑うなんて思ったこともなかった。総田に関するおとひっちゃんの態度で、うまくいってないなとは思っていたけれども、直接話をするまでは、なんとなくとっつきにくさの方が先行していた。

でも、二回、三回と話を交わしていくうちに、総田の持っている芯のようなものが見え隠れしてきた。ただのおちゃらけ野郎ではなく、もっと僕達の本音にちかいところから、水鳥中学生徒会を見据

えているんじゃないか、そう思った。

総田は言った。

「服装検査を厳しくしたって、似合っているとおもっている限り、違反者なんてへらねえぜ。ばかばかしい追いかけっこを続けるよりさ、校則を適当にゆるめてやった方が、かえって先生たちも楽なんじゃねえの」

おとひっちゃんがたまたまいなかった一年生の、秋、生徒会室。

初めて二人つきりで僕は聞いた。

「おとひっちゃんは、先生たちのいうとおり、校則をきっちり守ってもらうべく、生活委員会に協力してもらって、服装検査をやるって、言っているけどなあ。どうしてそんな風に思うのかなあ。別に俺は、校則の格好だって変だと思わないけれど、締め付ける必要なんてないのになあ」

「そうだよ、佐川。俺もそう思う。関崎の考えていることはなんとなく、わかるが、でもなあ。今回先生が文句言い出したことっていうのは、『詰襟のホックを授業中開けたままにするのはやめよう』とか、女子だと『スカーフは短く結ばないようにしよう。背中を風呂敷背負ったみたいな感じで、肩から出すのはやめよう』とか、だろ。悪いけどそれを十センチ刻みの定規で確認してなんになるんだよ。女子は知らねえよ。でも、俺たちが詰襟をはずすのは、ただ咽が苦しいんだよ。まだ九月だったら、暑いだろうしさ。ただそれだけなんだよ。別に俺は、ガ克蘭を許せとかは言わない。最低限のモラルは認めるよ。でもな、どうでもいいことに神経を尖らせる必要はないし、生徒側に理由があれば、話を聞いてもらうところまでは持っていけるんじゃないのか。関崎のように、先生のいうことをそのまんま、頷くよりはずっとな」

教師側からは、

「なぜ詰襟のボタンをはずしたまま授業に出るのか」

という、うるさ型の指摘があった。生徒会側としても、生活委員会

を交えて話し合い、とりあえずは細かいチェックを朝行おうということになった。また女子は女子で、スカートの丈、スカートのリボンの広げ方などに注文がついた。

一時期、非常に厳しい検査が続ぎ、学校内では少し余震が続いた。「確かに、俺もそう思うよ。総田。でもどうしてなんだろうね。おとひつちゃん、規則にそんなうるさいこと言っていないのに、どうしてこちらの方ではおとひつちゃんが、先生側についている腰ぎんちゃくって言われるんだろう」

その頃僕にはわからなかった。当時おとひつちゃんは、校則問題について意味不明な態度を取っていた。仲間内でも不思議がられていた。

服装検査を徹底させるべきだと言い出したのが、関崎副会長だ。要はこんな厳しくなった元凶は関崎のせいだ。

そういう噂がいつしか流れるようになった。

二年、三年の先輩たちは直接おとひつちゃんに喧嘩をふっかけようとしたらしい。決してあいつは口に出さなかったけれども、一方的に傷を負って帰ったところを僕はなんとか見たことがある。

おとひつちゃんが一時期、休んでいた陸上部を正式に辞めるはめになったのは、この事件がきっかけのはずだ。

「理由はわかるんだよなあ……おとひつちゃんの趣味は特殊だから」「見苦しい。きれいにさせるには、校則通りの服装が一番だ。そういつちまったもんなあ。あいつ。ばかじゃねえの」

「確かに、おとひつちゃんにガクランは似合わないと思うよ。真面目な格好がきつちり似合うタイプだから。総田、だと、また話が変わるんだろうけど」

「俺はできれば、首がゆつたりしたまま、教室にいたい。たまったもんじゃねえよ。咽がかぶれて大変なんだ。俺それでも、肌が弱いんだ」

しなしなとお得意の女つぽさをかもし出し、僕は思わず笑った。

おとひっちゃんが一時的だか総田に勝ったように見えた。

先生方としては、おとひっちゃんの真面目一方に見える意見に、満足していたのだと思う。総田のように、校則改正案なんて出されたら、学校の風紀なんてむちゃくちゃになるばかりだ、そう思っていたのだらう。斬新過ぎる。当然のことながら、第一回の『校則改正案』は却下された。一ヶ月くらい、厳しい服装検査の朝が続いた。僕だって、あまり妙なことをしていないのに、一回制帽を忘れただけで思いっきり怒られた。おとひっちゃんにあとで、

「どうして俺に言わなかったんだ。生徒会室にかくしてあるのがあるから、俺が持ってきてやったのに」
ともう一度、怒られた。

しかし、総田はしぶとい奴だった。

僕と話をした二週間後だったろうか。

再び手を入れた『校則改正案』というか『嘆願書』を各クラスの代表ひとりずつに書かせて、直接生徒指導係の先生に手渡し、ふたりつきりで話し合いを持った。

その際には、カセットレコーダーを持ち、会計係の女子も引き連れて、切実に『男子学生服の襟』についての苦痛を訴えたという。

「結局さ、服を着崩すとかそういうのではなくて、ただ、少しでも楽な格好を許してほしいってことを、直接つたえただけなんだけだな」

理由が切実なことをわかってもらえたのだらう。

早速職員会議と生徒総会を経て、「男子制服の襟は、授業中に限り、はずしていてもかまわない」

「女子も、夏に限っては自由な帽子（麦藁帽子含む）をかぶってきてもかまわない」

「ロングコートも華美でなければ認める」
などなど、細かな規則がだいぶ減らされた。

この事件により、総田副会長の株および生徒会執行部の評価は一気に上がった。と同時に、ひとり教師の腰ぎんちゃくと見られた関崎副会長の立場は、校内で冷たい視線にさらされることとなってしまった。これぞ失策、と言われている。たぶん、当時の二年、三年の間でいざこざがあったのは想像に難くない。おとひっちゃんの子が一時期かなり、暗かったのを覚えている。

「俺のどこがいけないんだよ、俺だって別にいい子ぶったわけじゃねえのに。俺は先生だって、容赦しないつもりでいたんだ。雅弘、よく見てみるよ。規則やぶって着こなしている連中の格好。はつきり言って、見栄えすると思うか？ 襟をはずすくらいだったらいい俺も気持ちにはわかるよ。でも、女子のスカーフなんてどこがいいんだ？ リボンだったらもっとそれなりに結んだ方がいいのに。どうしてわざとあんな肩がつっぱった風に見える着方をするんだろう？ 総田は言うよな。俺は先生たちの言いなりになっている馬鹿野郎だって。でも、俺は自分の感性を信じて、きれいだったらきれい、見栄えいいといえば見栄えいい、そう感じるままに訴えているだけなんだ。雅弘、お前ならわかるだろ」

その時は頷いた。それ以外なにができるだろう。

おとひっちゃんは潔癖すぎるんだ。

ただ、糊が利きすぎている、だけなんだ。目先と激情に足をすくわれただけ。やればやるほど、泥沼にはまってしまっただけなんだ。

たとえ、関崎副会長の大失策として学校内で散々ささやかれていたとしても、僕はおとひっちゃんの味方でいてやりたかった。

ふんふんと頷いて聞いた後、僕なりの助言を一言添えた。

「おとひっちゃん。でもその言い訳、今は誰にも言わないほうがいいと思うな。俺はおとひっちゃんのことわかるから、いいけどさ。」

他の奴らはきつと、言い訳としか思ってくれないよ。俺がわかっている方がいいだろ」

「ありがとな、やっぱりお前は、俺の親友だよ」

「校則改正問題」が無事解決した、一年生の冬。

総田と再び僕は話をする機会を得た。もちろんおとひつちゃんのない生徒会室でだった。僕は学習委員だから、直接おとひつちゃん関係でない限り、めったに生徒会室には行かないけれども、総田に呼び出されるのだったらしかない。誰もいない、生徒会室にひっぱりこまれ、僕は総田のパーマについての秘密を聞き出した。前からおかしいと思っていたからだ。天然パーマにしては、癖があまりすぎると。

「そんなことどうして気付いたんだよ」

「いやあ、よくひつかからないなあと思って。パーマ禁止だろ、水鳥中学は。なのに、生徒会副会長のくせにパーマかけてよく怒られないなあって」

「それはな、実はな」

総田は窓をぴっちり閉め、ストーブの中を鉄箸でかき回した。

「入学式前日に、思いっきりきついパーマかけてくれって、床屋でやってもらったんだ。ガキの頃から通っているところだったから、一発で決めてくれてさ。最初のイメージがこうだと思ってくれればあとはなんとかなるもんだって、先輩達にも言われてたしな。ま、今のところはばれてないし、ばれたって、言い訳はいろいろできるしさ。ちゃんと『天然パーマ登録書』は提出してあるからな。ま、ささやかな秘密ってとこさ」

僕をじつと見つめにやりと笑いかけた。

「だが、それを見抜かれたのは、佐川。お前が始めてだ」

「わかるよ。見てたら誰だって」

「いや、佐川って、実は影でものすごい奴なんじゃないかって、思う。お前が気付いていないだけだってな。たぶん、佐川の親友も、

「気付いてないな」

総田の言うことは、なんとなくわかった。

別にお高く止まったわけではないけれど、僕はクラスの連中に比べて、やたらと細かいことに気が付きやすい性格らしい。総田のパーマもそうだし、女子の体型が痩せたり太ったりした様子とかもそうだし、先生の体調が良くないことも早い段階で気が付いたりした。あの先生、具合悪そうだ。入院しそうだよね。そう誰かに話したりしたら、二週間後に入院、退職したという話を耳にした。また、クラスの女子と男子が付き合っているということも、僕は噂になる前から気付いていた。

おとひっちゃんにはなんとなく話したけれども、極端に機嫌が悪くなるのでそれ以上は言わなかった。

別に言ってもかわらないことは、言わないだけだ。

ただ、総田はそういう僕の間接的な、見抜いてくれた数少ない奴の一人だった。

「あんな、佐川。お前本当のこと言っと、関崎を馬鹿にしてるところあるだろ」

「まさか、何言ってるんだよ！俺とおとひっちゃんは小さい頃からの親友だって、聞いているだろ」

「関崎は一方的にそういうな。でも、なんか佐川からするとそんな感じじゃないような気、するんだよなあ」

石炭を足しながら、僕に背を向けたまま総田は続けた。

「俺ってさ、もともと努力と根性って嫌いなんだ。要領よく、うまくすりぬけていけばそれにこしたことはないと思うんだよな」

「それって、ある意味でいやな奴だと思うよ」

「関崎の親友だったらそういうだろうな。佐川」

怒る様子もなく、そのまま総田は僕に話し掛けた。

「そう、軽蔑するようなこというなよ。俺は決して、関崎のことを

馬鹿だとは言わないよ。たぶんそこらへんは、佐川と同じ考えだと思う。俺も一年からずっと、成績二番続きだったからなあ。あいつさえいなければ、学年トップ狙えたのについて思うよ。それは素直にすごいことだと思う」

信じられないくらい真面目な総田の言葉に、僕は戸惑いつつ、黙っていた。

「たださ、なんで「校則規則」関係のどうでもいい、ほおっておいてもいいことにばかり、真面目になれるのかが不思議なだけなんだ。あれも先生の言うことを無視して、つらつとしていればすべてが丸く収まったはずだろ。生徒会なんて、どうせそんな面倒なこと考えなくたって回っていくんだからさ。関崎が、『じゃあ、守らせよう』と言い出したのがすべての発端だぜ。結局俺は、学校の規則を緩めることに成功したけれど、関崎がわめかなければもつとすんなり、敵も作らないで話を持っていくことが可能だったと思うんだ」

「確かに。俺だったら総田と同じこと、してたと思う」

思わず口にしてしまい、僕はちつと舌を鳴らした。関崎乙彦の親友にあるまじき発言だ。

「やらなくてもいいことばかりやってしまつて、自分を四面楚歌に追い込んでいく、どうしてあなるんだろうって俺は思うよ。あんなことばかり続けていたら、本当にやりたいことが見つかるまでに頭がオーバーヒートしてしまう。だろ。だから俺は」

息を次いで、総田は振り返った。火にあたりすぎて、紅潮した頬がまぬけだった。民族系の人形顔していた。作りが濃い。

「いろんな出来事がこれから、生徒会では続くんじゃないかと思う。俺と関崎とだったら、うまくいくわけないってみんな、思っているだろうな。でも、できるだけ俺は、水鳥中学生徒会が盛り上がるようにしたいという、本気だけは持っているよ。その本気をどこにぶちこむかっていうと、場所はほんのちよつとなんだ。本当に重要だつて思うことは、そのちよびつと。それを掴んだら、俺は関崎以上に、突っ走る」

総田の瞳にちらりと光ったものは、たぶんおとひっちゃんと同じものだろう。僕にはなんとなくそんな気がした。よけいなことを言いたくなくて、僕は頷いた。

おとひっちゃんを僕の中で、冷静に分析するようになったのは、このあたりからだと思う。小さな頃から僕をかばってくれたおとひっちゃん。兄貴役と言われていたりした。でも、僕は総田と同じ色眼鏡をかけていることに、初めて気付いた。同じ度数だった。

総田と僕とは、はじめがねでおとひっちゃんを見つめている。

楽しくて、話したくて、僕はおとひっちゃんのいない生徒会室に通うようになった。中学一年の冬からずっと。

九月。

夕闇がやたらと早く下りるようになり、下校時間も微妙に早くなったような気がする。でも居残りはまだ許される季節だった。学校祭が近づき、生徒会室もいろいろ忙しいらしい。おとひっちゃんと僕が、一緒に帰ることも少なくなった。

もともとクラスが違うから、どういう状態なのかはわからない。廊下ですれ違つと、僕が尋ねる間もなく、がむしゃらにまくし立てるのはやめてほしいと思う。今までのおとひっちゃんにはめつたに見られないことだった。

僕はいつも頷き、とまどいつつ、それを聞いていた。

「テーマは、ちょっとありがちなだけだよ。『校則』についてなんだ」

「すごい、ありがちなね。でもおとひっちゃんらしいけど」

「この前の服装問題と絡めてやろうと思っっているんだ。あれ、まだ全校生徒の間に記憶として新しいだろ。結局俺が悪者になつちまつたけれど、もつと話しあえば、俺が本当に何を言いたかつたかがわかつてもらえると思うんだ」

「気持は、すごくわかるよ。おとひっちゃん」

「なぜ、先生たちは服装指導にうるさく言うのか、もちろん理由はあると思うんだ。でも俺たちの方だって言い分、あるはずだ。だから服装が乱れるんだし、それなりの理由があるからこそ、違反が減らないんだと思う。話し合いっていうか、行動に移すだけで全然、先生達に要求しない奴らに、思いつきり言いたいことを言ってもらんだ。本音でだ」

「ふっん、そうなんだ」

僕はよく聞いているふりをして、頷いた。

「でもな、雅弘。結局は先生たち、『校則は守らなくてはいけない

もの』という結論に持っていきたいと思うんだ。それは俺が許さない。もつと本質につつこんでいかないとだめだと思うんだ。本当はさ、俺たち生徒会と先生たちとの間で、一回手ならしの討論会をやれたらいいんだけどなあ。今は三年生の実力テスト中だから、みんな手が離せないって断られたんだ。ちくしょう、たぶんお流れだと思っ」

先生たちからしたらたまったもんじゃないだろう。総田も含めた生徒会メンバーにつるされそうになるのは。おとひっちゃんだけだったなら、まだなんとかなるけれども、きつとひそかに思っているに違いない。先生達が恐れているのはたぶん、ひとりだけだ。

そのことに気付いていないおとひっちゃんはさらに続けた。

「だからせめて、生徒会側からの訴えかけでフォローしていきたいんだ。まずは、各クラスの学級委員を集めて、それぞれの意見を軽く言ってもらって、クラスをそれぞれ盛り立てていってくれればいいんだけどなあ」

おとひっちゃん、明らかに間違ってるよ。僕はいえないけれど思っ

った。

学級委員を、重く見すぎているよ、と。

他の学校ではどうかかわからないけれど、学級委員というのは単に、授業前、授業後の号令をかけて、学級委員会に参加して、合唱コンクールでは男子の学級委員が指揮者になる、そのくらいのことしかない。僕のクラスにいる学級委員も、言っちゃなんだけど『クラスをまとめよう』という意志は全く持っていないだろう。おとひっちゃんだって一年の前期は学級委員だったのだから、その現状はよくわかってはいるはずだ。いや、おとひっちゃんひとりだけは、かなり情熱賭けて走り回っていたのは知っているけれども、あくまでも自分が例外だと思っていないところが、すごい。

「じゃあ、とりあえずまたな。三日目の行事が決まったからまたなんだか忙しくってさ。そうだ、雅弘、今度の中間試験用の予想問題、明日持っていくから、使えよな」

「ありがとう！ おとひっちゃん、助かるよ！」

実は、これが聞きたかっただけで、僕は話に付き合ったのだった。おとひっちゃんの試験山掛け予想は、怖いくらいよく当たる。

ひそかにクラスの一部からは、貴重情報として大切に守られている。

おとひっちゃんはいつも黒いファイルに綴じ込んで、予想問題を持ってきてくれる。僕を含めた少数の友達に限り、という約束だ。

でも、僕とおとひっちゃんとの付き合いを知っている多くの友達は、試験前になると必ずコピーを申し入れてくる。

当然、僕はこっそり見せてやることになる。おとひっちゃんには内緒で。

問題の第三目行事については無事決定した。

フォークダンスとファイヤーストームは、総田副会長と関崎副会長が討議した結果『円満』にまとまった。副会長二人が同意したことにより、無事、教師側の賛成も取り付けることができた。受諾理由としては、『第一部 校則をテーマにした座談会』をメインにするという条件が受け入れられたからだ。またフォークダンスもしょせん、オクラホマミキサー、マイムマイム、トロイカ程度の内容だったら、体育の授業でもやっていることだという、おおらかな意見が大多数を占めたからでもある。火を用いる、ということだけは少々意見が分かれたらしいが、無事、もと山岳部の先生が責任を持ってやってくれると請け負ってくれて、そこのもまとまった。

学校側の最低限の規定と折り合わせ、できるだけ網の目をかいくぐって派手にやることができるよう、生徒会では毎放課後の会議が繰り返された。いつも僕が生徒会室を見上げると、昼間なのに電気がこうこうとついている。きっと、『居残り届け』を出すかなにかして、かなり遅くまでいるのだろう。

「なんだか相変わらずらしいよ」

「なにが？」

「生徒会、おとひっちゃんと総田とのやりあいだし」

学級委員の友達が、ぼそつと教えてくれた。

「でも学級委員だって、いろいろこれから大変なんだろう」

「大変じゃないよ。やれつて言っているのはおとひっちゃんだけで、他の学級委員たちはつまらないって顔してるよ。俺とかだったら、おとひっちゃんがすごくいい奴だってわかってるからさ、少しは手伝おうって気にもなるけれど、三年とか、一年とか。みんなまるつきり無視。かわいそうだよなあ。そうだ、雅弘、知ってるか」

僕は身を乗り出した。

「次期生徒会長、たぶんおとひっちゃんと総田との一騎打ちになるって言われてるけれど、総田の圧勝に終わるんじゃないかって」

「どうしてだよ。おとひっちゃん、真面目だし、いい奴だって」

「おとひっちゃんのことを知っているのは二年生だけだろ。でも、一年にとつてかつこいいっていうのは、総田のような目だって先生にどんどん文句いって歴史を作ってるやつらの方だって、思われるから。それにさ、三年にもおとひっちゃんにらまれてるだろ。例の服装検査。可哀想だよなあ。おとひっちゃん、絶対、あいつ、いい奴なんだって思うんだけどなあ。お前わかるだろ、親友なんだからさ」

小学校一緒だった連中なら、みなおとひっちゃんのことを嫌ったりしないと思う。もちろん好き嫌いはあるだろうが、僕はおとひっちゃんが僕を含めたクラスのみんなに対して、自分の正しいことを懸命に訴え、守ってきてくれたことを知っている。僕が小学校の頃、なかなか仲間に入れなくて困っていたら、いつもおとひっちゃんが誘ってくれたし、手伝ってくれた。だれかれ問わず、困っている人がいたら、助けてやるのが正しいと信じていた。

うちの親も

「関崎さん家のおとひっちゃんは、本当にいい子ね。頭もいいし、面倒見もいいし。雅弘も見習いなさいよ」

という。

もし、小学校の連中がみな、水鳥中学に持ち上がってきたのだったら、おとひっちゃんが生徒会長になるのは当然だと思うだろう。

でも、運悪く総田の存在。

「でもなあ、あれはまずかったよなあ。おとひっちゃん『服装問題』の一件で人気がつくり落としたよ」

「総田の方が目立つしな、人よんであいつのことを、『教授』と言ってるらしいぜ。総田派の連中は」

妙に頷ける。僕は思わず笑ってしまった。

『教授』か。

「言いたいことはわかるような気、するな」

なにか気配がする。学級委員が僕を見て、軽く目配せをした。

「どうかしたんか」

「ほら、おとひっちゃんだ」

僕は笑うのをすぐにやめた。黙って姿を探した。おとひっちゃんは大量のコピー用紙を抱えて、足早に通り過ぎていった。僕達がいるのに気付かない様子だった。当然だろう。ずっと影に隠れていたのだから。

「あれなんだろう。コピー大量にしていたみたいだね。学校祭で使うものかなあ」

「ああ、たぶんあれな。おとひっちゃんが座談会の前に、呼びかけのビラを配るって話していただろ。それだよきつと。全校生徒に配って、学級委員が仕切って、意見をまとめて、生徒会室に持つてくるようにだつてさ」

「うちのクラスもやるのかなあ」

「一応な。でも、みんなの考えていることなんてたかがしれてるだろ。どうせ、制服反対とかそんな話で済むだけだしな。おとひっちゃんのほしがっている話なんて出やしないよ」

おとひっちゃん、どんなこと書いているのかなあ。

僕は、知りたくて尋ねた。

「おとひっちゃんってどういうこと、書いているの」

「たぶん、『今、水鳥生が動かないと、何も代わらない。初めて自分たちの手で動かすチャンスを生かさないでどうする。言いたいことをこの機会にすべて吐き出してしまえ!』とか、そんな感じだったと思う。なんというかさ、おとひっちゃんって、文章たくさん書くよな」

「うん、それはいえてる」

「それも細かい字でさあ。もっというろ書いているはずなんだけどさ、俺は読む気しなかったね」

「言いたいことは大体わかる。これがもし、テスト前の山掛けファイルだったら、話は別だけど」

二人で頷きあった。おとひっちゃんは決して字がうまい方じゃないから、読解するのは骨なのだ。

「なんというか、情熱のみが空回りしてるんだよなあ」

「道端にすぐ、ポイだろうなあ」

さっき通ったおとひっちゃんの髪の毛はぼさぼさに乱れていた。

風が強いせいだろう。台風が近づいていると聞いた。学校祭にはぶつからないから大丈夫だで行っていたけれど。もつとも総田の方が何倍も好天を祈っているに違いない。もし、雨が振ったら即刻、フオークダンスは中止なのだから。

しばらく学級委員としゃべった後、僕はその脚で生徒会室に向かった。

おとひっちゃんを迎えにくつもりだった。無理に一緒に帰ることはないけれども、一応は声だけでも掛けておこうと思った。南京錠はちゃんと外れていて、おとひっちゃんの理想どおり、『誰でも入れる』状態になっていた。あまり声が聞こえない。会議なんてやってなければいい。

「ごめん、おとひっちゃん、いないかな」

半分、戸を開けてのぞくと、会計の女子二人と、総田がゆったり

と缶ジュースを飲んでいた。模造紙とノートが散らばっている。長い机にポスターカラーを使ってなにやら書いている。学校祭用の垂れ幕かなにかに使うのだろうか。まだ字は読解できなかった。窓を開けたままだった。風が吹き抜けている。模造紙の上にはさみや筆箱を置いて、飛ばされないようにしている。ひゆるひゆるごうごう、木々がうなっている。

僕の顔を見て、会計の一人が答えた。

「関崎副会長だったら、コピー持って別の教室に行つたみたいよ。たぶん図書準備室じゃないかな」

「あそこだったら、ひとりでのんびり整理整頓できるもんね」

「ふうん」

僕は時計を見た。それならばかなり時間かかるだろうから、先に帰ろうか。

もったいないなという気も、しないではない。

総田にわざと目を合わせた。

「佐川、半分飲まねえ？」

「いいよ、総田と間接キスなんてしたくないよ」

きっかけがほしかった。僕は机を大回りして、総田の方に向かった。

「こっちで関崎が戻ってくるまで待つてるか？」

「いや、すぐに帰る。でも、大変そうだね。結局、パートを二つに分けてやることになったんだっけ」

「そう。俺はフォークダンス選任で、関崎が座談会。お互い、手を出さないところは手を出さないという、『内部不干涉』という原則を決めたわけさ。だから、俺たちはコピーの手伝いしないでいるってわけ」

「同じ生徒会なのになあ」

総田は軽く頷くと、椅子に坐るようパイプ椅子を指差した。

総田からすれば、僕はおとひっちゃんの親友だ。いわば敵の腹心

だ。

でも全く態度を変えずに、楽しげに接してくれるのはなぜだろう。心密かに僕と総田が、意を同じくしていることを知っているのかもしれない。それとも僕を手なづけて何か、別のことを考えている策士なのだろうか。僕にいい感情を持たせて、利用しようとしているとか。

僕はきつと、ひっかかりそうになっているのだろう。

こうやって総田としゃべることが、僕はちつともいやじゃない。いやと思わせないように操る力が、総田にはある。おとひつちゃんにはないけれど。

「ところでさ、総田。フォークダンスの準備はうまくいっているの」「もちろん、座談会よりは確実にな」

総田は会計の女子ふたりに、Vサインを送ってみせた。

なんとなくだが、この二人もおとひつちゃんとは相性が合わないような気がした。

特に、川上さんという女子には、ちょっと気にかかるところがあつたからだ。

おとひつちゃんがよく

「やたら、総田と川上だけで二人の世界を作ってしまったって、会議にからないことが多い」

と言っていたのを思い出したからだった。

「川上さん、あのさ。最近おとひつちゃん、生徒会ではどういう感じなんだろう。あまりうまく行っていないような気、するんだけど」

即座に、溜まった不満が流れ出てきた。僕に大きく頷いて見せ、もう一人の女子と目を合わせ、

「関崎副会長って、努力の割には実績が伴わない人なのよね」

「どこか抜けてるのよ。あの人」

「言っちゃなんだけど、佐川くん、関崎くんの親友やってて、ものすごく疲れない？」

さすがに、本音をいうわけにはいかない。

「ううん、慣れてるから」

「ああいう性格って、なれるもの？」

川上さんは、ひだスカートのポケットから単語カードを取り出した。

来週、英単語の小テストがあるのを聞いていた。

「あ、それって、来週やる英語の小テストだろ。俺ぜんぜん、手をつけてないや」

「だって、しょうがないじゃない。副会長が下校時刻ぎりぎりまで生徒会室に缶詰にして、勉強する暇ないんだもの。それにさ、ひどいじゃない？　ちよつと合間ができたから、暗記カードをめくっていたのよ。ほんの一分くらいよ。そうしたら頭からきのこ雲立てて怒鳴るのよ。信じられる？　『今は真剣に学校祭のことを考える時間だろ！　自分のことにはばかり集中するな！』ってね」

おとひつちゃんならば、やりかねない。

僕は頷いて話を促した。

「みんなが働いているのに、ひとりだけ勝手なことしていいと思っ
ているのか！　って。冗談じゃないわよね。そりゃ、関崎くんはいい
わよ。学年トップだもんね。黙っていても満点取れるでしょうよ。
でも、私がテストであほな点取ったら、二学期の評定どうなるって
いうのよ。そろそろ内申点が関係してくる時期だからね。生徒会の
仕事で、勉強する暇ありませんでしたって言い訳、通用すると思う
？」

「もしかして、この前の地理のテストも、それで苦労してたの？」

確か川上さんは、地理の補修課題を出されてしまった一人の女子
だったはずだ。

この前、職員室で説教されていたのを覚えていた。

「やだなあ、佐川くん、見てたんだあ」

「ごめん、悪意はないんだ」

「いいよ、別に。でもさ、あたりまえよね。最近の議題や仕事って、

もつと後からやつてもかまわないことばかりなのよ。それをさ、どつから見つけてくるもんだか、次から次へと持ち出してきて、大げさにまな板に載せるのよ。なんで、今の段階で他のクラスに降ろす必要あるのかなあ。出されたら、ほっとくわけじゃないでしょ。ああ、私の二学期の点、学校に貢献した分で、下駄はかせてくれないかなあ。ねえ、教授」

『教授』か。

妙にその響きだけ甘ったるかった。

おとひつちゃん切れる原因のひとつが、なんとなくわかった。

「教授」という響きにはしたたかさがこもっている。いえてる。確かに総田は電磁頭脳を持っている。たとえるならば。

摂政と天皇。

おとひつちゃんを生徒会の象徴としておき、影の実力者として総田を置く。

おとひつちゃんは、孤立無縁だ。

誰からも、信頼を得られていないのだから。すべては総田教授の手のうちに握られている。

「鬼のいぬ間に洗濯してる！」

総田はきつい調子で言い捨てた。すねるように川上さんは口を尖らせた。それを無視して、総田は僕の耳もとにささやいた。

「なんか、佐川って、似てるよな」

「誰に？」

「俺とさ」

「顔が？」

「物の考え方がさ」

女子に聞こえないよう、時折川上さんをにらみつけながら、

「この前関崎と俺がやりあったのを見てただろ。佐川、あの時俺になにか言い足そうだったよな」

「そうだったっけ」

「ちらつと俺の顔を見てさ、お前ばかじゃねえの、って顔してさ」

「まさか、そんなことしないよ」

「いや、いいんだ。怒ってなんかないもんな。おかげで俺も間違いを正すことができたしさ」

帰り際のわけ有り笑顔はそのためだったらしい。

「どこしくじったかが一発でわかった。佐川、要するに、関崎の高く折れそうなプライドを、もっとうまくつついてやれば、うまく納まると思っていたんだろ」

どうしてそんなことまで知っているんだろう。気づかれたのか。

僕は舌打ちした。

「おとひっちゃん、素直だから」

「ほんとだよな」

まさか女子の手を握れないなんて、恥ずかしい理由で反対しているわけじゃないんだろ？ もっと論理だった説明をしてほしいよなお前、学年トップだろう。首席の関崎くんだったら、もっとかみくだいて説明してくれるよな。

さっそく総田は毎日おとひっちゃんを問い詰めたらしい。

おとひっちゃん殺すには刃物はいらぬ。

僕がもし総田だったら、たぶんそうしていた。

意識しないで僕は頷いていた。

「つてわけさ。ほんとにあいつ、死ぬほど純情だよな」

「言いたいことはわかるよ」

「けどさ、ああいう奴にほれ込まれた女子って、疲れるだろうなあ」

総田は目線をそらせてぼそっとつぶやいた。続けた。

「それにしても、な、佐川、やっぱりお前親友として、関崎副会長の『本命』が誰だか聞いているんじゃないのかな」

そこまでかぎだそうとするのだろうか。

僕がそこまでのたかに振舞うと思っていたのだろうか。

思わずむかつときて僕は黙った。話を逸らすため、頭の中を軽く探った。

聞いてみたいことは僕にだって、ちゃんとあるのだから。

きつかけのなかった、あのことを。

「あのさ、総田いいかなあ。俺も聞きたいことあったんだけど」

「なんだよ、話逸らそうとしてどうしたんだよ」

「次期生徒会長に出馬するつもりあるんか？」

総田の視線がはつと僕の方に留まった。

「生徒会長だと？」

「そう、学校祭が終わったら、そろそろ任期切れだろう。去年は生徒会長がいよいよまだだったけれど、今年はそうもいかないと思うんだ。おとひつちゃんも、総田も、いるんだしさ」

僕の口調に何かを感じたのかもしれない。総田は注意深く言葉を継いだ。

「どうしたんだよ。関崎も当然立候補、するだろうしさ。同期撃ちになるのは目に見えているだろ。俺なんか所詮、太刀打ちできませんって」

「俺にはそう見えないよ。自信、ありそうだもん」

僕はゆっくり続けた。

「おとひつちゃんが生徒会長に立候補するっていう保証、どこにある？」

「おい、佐川、何が言いたい？」

「言いたいことなんてないけれど、総田も立候補するつもりだったらちゃんとそう考えておいたほうがいいんじゃないかって、思っただけだよ。本当に、なんとなく感じてだけどさ」

じつと僕の方を見つめたまま、総田はもつと近くに来るよう、手招きした。これ以上男子同士でくっついてどうするっていうんだろう。物好きな奴だ。しかたないから僕も椅子をくっつけた。

「佐川、悪いがもっと分かりやすく言ってくれ。俺、お前が考えていることがわかるようで、わからない」

「わかってるだろ。俺はおとひつちゃんの親友だから。あいつに不利なことをこれ以上、言えないよ」

親友という一言に、僕は力をこめてささやいた。

自分でも何を言いたいのかわかっていたわけではなかった。おとひっちゃんが来期、生徒会から離れようと思っっていることを伝えるべきではないと思っていた。おとひっちゃんの意志がはっきりしているのだっただけなら決して口にはいけないうことだと分かっていた。そうだ、頭の中はちゃんとおとひっちゃんの味方として回転しているのだ。

今言ったことはすべて、僕がコントロールできない言葉として飛び出してきてしまった。総田に言おうとして思いとどまったのは僕が『関崎乙彦の親友』だから。もしおとひっちゃんとただの友だちだったとしたら、僕はためらうことなく総田に告げただろう。

おとひっちゃんは、来期生徒会長に出馬する気、さらさらないよ。となると総田、あんたが次期生徒会長だよ。

何言いたいかなんて、わからないけれど、決まりだよな。

総田に捕まる前に僕はさっさと帰ろうとした。

立ち上がり挨拶して戸を開けたとたんぶつかりそうになった。

いがぐり頭の、あまり見かけない奴だった。

二年生ではなさそうだ。

僕を見て反射的に頭を下げている。たぶん一年生だろう。

「あの、関崎先輩、いますか？」

おとひつちゃんの関係だろうか。胸ポケットのバッチを見ると、『学年』の文字が光っていた。一年学級委員の誰かだろう。僕は首を振った。

「いいや、いないよ。総田副会長ならいるよ」

ふりむいて指を指した。総田もめんどくさそうに頷いた。

「関崎ならばらくもどってこないと思うぞ。その辺で待ってる。でもなんの用だ？」

総田は退屈そうにしている川上さんに目で合図し、お茶を入れさせた。ちゃんとポットが用意されている。

「その辺に座っててよ。お茶入れてあげるから。佐川くんも急ぎじゃないんでしょ。だったら飲んでいきなよ」

「俺の分も当然入れてくれるよな」

「教授が自分で入れればいいのにね」

「からかい調子の会話が続いた。」

やはりこの二人には何かがあるな。

そう思ったものの口には出さなかった。おとひつちゃんも気付いていないことはないと思うのだが。行きなれている僕ですら居心地の悪さを感じるのだから、一年生学級委員の彼はさらにそうだろう。

僕は椅子を引いて坐るよううながした。

「副会長に用事があつたんだろ」

熱いお茶をすすりながら僕は訊ねた。

「はい、学校祭の時に使う、座談会の意見書を出すように言われてる」

「ふうん、おとひっちゃんにか」

聞きなれない言葉だったのだろう。彼はうなずいて首をかしげた。

「他のクラスはあまり出してないみたいだけど、どうなんだろう」

「クラスの人はあまり乗り気じゃないけれど、でも関崎先輩が一生懸命だから、つい」

川上さんはふうん、と頷いて総田と目配せした。

「まじめよねえ。別名、ものずき、っていうのかな」

おとひっちゃんが全学年のクラスを回って懸命に説明していることは聞いていたけれど、十中八九無視だとたかをくくっていた。

「これが初めての返事ってことかしらん」

「まあな、ちよつとフエイントってとこだな」

奥でふうふうとお茶に息を吹きかけている。総田の笑い声が少しだけ苦味ばしっていた。

「まあ、一人くらいならな。物好きもいるわな。おい、それでお前は何組だ？」

「一年二組です」

延ばしかけた手をすぐ膝に置き、握り締め、一年学級委員の彼は答えた。

かたまっていたと言ってよいだろう。

「クラスの反応は、どんな具合だった？」

丸ぶちめがねの一年評議委員は、総田のさばけた口調におびえている様子だった。返事が少したが、こわばっていた。めがねをはずせばなんとなく、おとひっちゃんと重なる雰囲気を保っていた。

クラスで相当、浮いているような気がするな。

真面目人間でおとひっちゃんみたくさ。

「あの、つまり、その、まだあまりわからないのでなにも」

「そう意味のない言い方するなよ。はつきり言え」

なだめるように川上さんが茶々を入れた。

「要するにどうでもいいってことでしょ」

「僕の説明が下手だったからかもしれないんで、はっきり言えないんですが」

「なにそう自分を責めるんだよ。お前のせいじゃないだろ。それとも、関崎副会長になにか言われたのか？」

「いえ、そんな、全く、なくって」

会話は全く意味をなさないものだった。いかげんぶつちぎってやりたくなりそうだった。僕もあまり上手に説明できる方じゃないけれど、こうやって話しているといらしてきそうだった。よく総田もがまんしているものだと思うた。

きつとおとひっちゃんが帰ってきたら、感激するだろうな。

さんざん総田を始めとする連中にばかりにされているんだから、一度くらいいい思いしたっていいじゃないか。

「・・・・・・・・・・やっぱり僕はおとひっちゃんの親友なんだろうなあ。」

「あの子、聞いていいかな」

僕は割り込んだ。

「なんであえておとひっちゃん訪ねてここにきたの」

「関崎先輩には、小学校の陸上部でいろいろお世話になっていましたから」

「ははあ。大体話が読めた。」

おとひっちゃんは小学校の頃も陸上に熱中していた。僕と同じような感じで、後輩たちの面倒を見ていたにちがいない。ある意味、僕と彼とは、同じ立場だったりもするのだろう。好感を持った。

「じゃあ、結構おとひっちゃんのこと知っているんだ」

「関崎先輩は、ひたむきな人でしたから」

強く共感し僕は頷いた。今度は総田が割り込んだ。

「確かに、関崎はある意味すごい奴だよな。それにしてもさ、わり

いな、関崎副会長がいなくてさ。とりあえず『意見書』とやらを置いていってくれよ。俺も一応、副会長だしさ」

こうしちゃいられないでも思っただろう。彼はがさごそとかばんをひらいて、レポート用紙の束を取り出した。総田、そして僕に頭を下げ、立ち去ろうとした。表情にほっとしたものが見受けられた。

背を向けたとたん、総田の声がはたりと変わった。

「ちよいと待った。俺が目を通すまで動くな」

絶対服従のニュアンスがこもっていた。川上さんを通してレポート用紙を受け取り、ぱらりとめくった。じつと用紙の一点に視線を留めていた。

「ええと、一年二組の生徒は……ふうんっと。なかなかやる気まんまんじゃねえか。そんなに燃えてるのか」

「はい、まあ」

「何度も言うけどな、もっとはつきりしろ」

「はい」

「本当なんだな。ならば聞くが、これを読む限りでは、校則に対する考え方がたくさん出てきて、收拾がつかないらしいとあるが、どんな考えか全部口で言ってみろ」

「………ちよつとまとまっていけないんで」

切り込まれ、あわれない一年学級委員はうなだれた。

「言えないわけがないだろう。お前の報告書にはこう書いてあるんだ。『校則についての座談会をやるとクラスに伝えたら、いつばい意見が出て、盛り上がりました。きつと学校祭も盛り上がりと思えます』ってさ。どんな盛り上がりがあつて、生徒はどんなことを求めていたのか。一言も具体例が記入されていないじゃねえか。これじゃあ、いくら一年二組が熱狂したとしても、俺たち生徒会には伝わらないぜ。もっとも、関崎には以心伝心で伝わるのかもしれないけどな」

いやみがこもっている。総田は茶碗の熱いお茶を一口すすり、立

ち上がると大股に近づいてきた。接近して一年生をにらみつけた。

「どうだ、もう一回言ってみろ」

「……また、今度、来た時、それ、持ってきます」

「単に無駄だ」

言い切ってちらりと川上さんへ、側によるよう合図した。僕にもだ。僕は立ち上がっておずおずと総田の隣に立った。一年の彼だけを戸口に立たせた。

「お前もテスト近いんだろ。いいさ。俺がここで書き直してやるよ。つまり一年二組の連中は、校則のことを座談会でやると聞いて、騒いだと。それは本当なんだな」

「……はい」

「制服がやだとか、先生どもがうるさいとか、勝手に持ち物検査するとか、そういう不満が出たんだな」

「……そんなもありました」

「ちゃんとわかってるじゃねえかよ。他に、もつと笑える意見はなかったのか」

一年生は黙りこみ、うなだれた。

笑える意見があったって、何を言えいいのかきつとわからないのだろつ。

なんだか痛々しくて、助け舟を出してやりたかった。

総田には悪いが勝手に僕の判断で、つぶやいた。

「たとえばさ、男女交際とかうるさいだろ。一年の先生ってさ。そういうことに対する不満っていうのは、出なかった？　そういうようなことだよ。分かりやすいネタって」

僕の方をきよとした目で見つめながら、彼の頬はすうつと赤く染まっていった。気持ちが分かる。こいつは絶対におとひっちゃんの後輩なんだ、そう思うとどうしても、何かを言ってやりたくてならなかった。総田はしばらく僕を横目で見ていたが、続けて言った。

「佐川の言うとおり、女のことでも不満なんかないのかよ。好きな奴

なんていないのか？ エロ本回収されたことなんてなかったのか？」

「……あの、それもありました」

蛇の目でにらまれた蛙のよう。

彼はうつむいた。

今にも逃げ出しそうな目だった。

川上さんはふっと髪をかきあげ、しばしの吐息のあと、冷たい口調で。

「一年って、結局いろいろなことだったって、本音はそんなレベルのことしか話していなかったんじゃないの。あせったじゃない。ばかね」

せせら笑いしようとしたが、瞬間、総田ににらまれ黙った。

「さっさと向こう言ってる。やかましい」

「なによ、だってあんただって」

「なれなれしくするな」

やっぱり何かがある。そう邪推したのは僕だけじゃないと思った。

総田はゆっくりと頷くと、一年生に向けてやわらかな笑顔を向けた。

さっきまで激しく詰め寄っていた蛇のまなざしとは一転していた。ぽんぽんと肩を叩き緊張をほぐしてやるかのように。

「よし、わかった。よくここまで言ったな。今日は脅かして悪かった。今度は俺が詳しく、報告書の書き方を説明してやる。おい、びるなよ」

そうは言ってもさっきの今だ。簡単に打ち解けられるわけがない。

凍りつき、動揺寸前の一年学級委員は、

「ありがとうございます！」

でかい声で恐怖を隠すがごとく、一礼した。

かばんに恐る恐る手を伸ばし背を向けて廊下に走り出た。階段を駆け下りる足音、がいきなり乱れた。足を踏み外したらしい地響きが伝わった。

総田。お前って、魔術師だ。

たった十分たらずの間に、錯乱させてしまった。

僕は冷えたお茶を飲み干した。

「あの一年、また来るかなあ」

もう一杯お茶を川上さんに注いでもらい、総田は戸をちらつと見た後、つぶやいた。

「あれだけびびらせておいて、よく言うわよ」

「しかし、関崎の後輩か。面白いことになってきたよな」

僕の方を見て、今度は何か聞き足そうな顔をした。しかたないから僕も答えた。

「いや、俺も知らなかったよ。陸上部のことはほとんど聞いたことなかったから。でも、おとひっちゃんになついているって感じは、確かにしたなあ」

「だろだろ。佐川、やつぱりあいつは、関崎の後輩って感じだよな」
「根性がありそうなところが、なんというかさあ」

心とは裏腹な誉め言葉を使っている。僕と総田が学級委員の一年生についてどう感じているかは、たぶん同じなんじゃないだろうか。気付かれたのか、川上さんが僕に聞こえるか聞こえないかの声でさやいた。

「教授も佐川くんも、しっかり『副会長』を持ち上げちゃってさ。抜け目ないんだから」

「俺は持ち上げてなんかいないよ。本当のことを言っただけだよ」

「そうよね、佐川くんは一応、関崎副会長と親友だもんね」

「いやみつたらしく聞こえたから言い返したかった。でも、できなかった。」

「まあな。良くも悪くも、同じ水鳥生徒会の飯を食っているんだ。個人感情とは別に、奴の能力そのものは認めているさ」

「いつまでたっても成績万年二番を脱することができないからだもんね」

「黙れ。人が気にしていることを。無神経女め」

気にしているような口調には全く聞こえなかった。それは川上さんも同じだろう。無神経女と言われようか平気な顔して鼻歌を歌っていた。

「もう、ライバルを超えて、相手にしてないって感じよね」

「ばあか、自分で考える。俺は答えんぞ」

やっぱり総田と川上さんとの間には、僕が立ち入れない、理解しがたい空気が流れている。そろそろおいとましよう。

「じゃあ、今度こそ帰るから。また来るよ。おとひっちゃんによるしく」

僕が腰を浮かせたたん、総田がすごい勢いで僕の方に近づいてきた。川上さんもびっくりした様子だった。

「悪い、今ここでは話せないことがあるんだ。今晚、お前の家に電話しても大丈夫か」

僕にしか聞こえないように。鼻と鼻を付き合わせたような感じが断るなんてできっこない。

「別にいいけど。でもどうしたんだよ。総田。俺はそっちの趣味ないからね」

「関崎から佐川を奪おうなんてとんでもないホモネタを考えたわけじゃねえよ」

総田は僕の電話番号を、手元にあつたわらばんしに書き取った。

「佐川の家は、長電話、平気か？」

「どうだろう。親は立ち聞きしてるけど、でも聞かれて悪いことなんてないから」

「ならば、今晚の八時。ちょうどにけるから、スタンバイしていてくれ。絶対だ。頼むぞ」

目が飛び出して壊れそうだった。にらむと見つめるの中間点。僕は思わず頷いていた。今まで見たことのない総田の瞳には、何か決意をしたようなものが見え隠れしている。僕にはそれがなんなのか、

見当がつかなかった。

でも、はつきりしているのは。

総田は、なにか、たくらんでいるな。ということ。

そして、おとひっちゃんには絶対に、言えないことであろうというこ

それならそれでOKだ。僕もよっぱどのことがない限り、いう気なんてない。

僕は頷いて、知らん顔したまま生徒会室を出た。ちょうど夕暮れ間際のきつい太陽が廊下のガラス戸にびんびんとぶつかっていた。目が痛くなりそうだった。この時間をずらしたらたぶん、外は闇になる。僕は急ぎばやに生徒玄関へ向かった。できればおとひっちゃん

んが帰ってこないうちに。

青潟駅から歩いて二分程度のところに、『佐川書店』はある。立地条件がいいとか、学校帰りの客が多いとか、いろいろ理由はあるだろうけれどもそれなりに繁盛している。父と母が三人の従業員を雇って、年中無休で働いているのを僕はずっと見てきていた。たまには雑誌の付録の輪ゴムかけや、店の掃除を手伝うこともある。もっとも多いのが、自転車で定期購読雑誌を配達することだ。かなり遠くから注文をするお客さんも多いので、放課後毎日配達に出かける。問題は、季節問わず自転車を使うところだ。夏の炎天下荷物をくくりつけてというのはなかなかハードだ。

両親がいうには、

「小遣いに色つけてやってるんだから」とのことだ。

確かに、僕がもらう小遣いの額はかなり多いらしい。

おとひっちゃんに前、話したところ

「絶対にほかの奴には、雅弘のもらってる額のことなんていうなよ。かなりどころじゃない。高校生だってそんなにもらっている奴いないんだからな」と言われたものだった。

「おとひっちゃんはどのくらいもらってるの？」

「雅弘の半分くらいだけだな。でもそんなに使うわけじゃないから、ほとんど貯金しているんだ。高校進学の時、金かかると思うからな」
おとひっちゃん、やっぱり私立の高校行くつもりなんだ。

僕は思ったけれども黙っていた。

いつものように玄関から入り、配達がないことを確認してから自分の部屋にこもった。返品される寸前の本を五冊ほど部屋に持ってきて、大急ぎで読むのが日課だった。たいていは男子中学生をターゲットとした雑誌だった。一応、人並みに知識は持っている。男女関係の話とか、今はやりのファッションとか、ゲームネタとか。た

ぶん僕は、どの連中ともうまく話をあわせていける才能があるのだと思う。おとひっちゃんのようにかたくな過ぎるところもないし、かといって真面目な人間を馬鹿にしたいとも思わない。

「佐川くんって、妙にバランスが取れているよね」

とは、六年生の時、担任の先生に言われた言葉だった。

「甘ったれているように見えて、実はしっかりしているし、頼っているようにみえて、実は全部自分で片付けているんだよね」

すると親は必ず言い返す。むかつくけれど黙っていた。

「いいえ、うちの雅弘はね、関崎さんちのおとひっちゃんにみんなめんどろみてもらっているんですよ。ほとんどお兄ちゃんみたいな感じでしょかね。いや、どちらかというと親、に近いかしら」

何か言いたげに担任の先生は笑いをこらえていた。どういう意味なのかは見当がつかず、僕もただへらへらしていたものだった。

ひととおり目を通すと、だいたい学校で話題にすることの大まかなことは頭に入った。僕の日課だった。無理して浮かないようにしようとしているのではない。なんとなく、誰とでも楽なきもちでしゃべることができるほうが、気持ちいいだけだ。

よく『人に合わせるために』『情報を仕入れて』『顔色をうかがいながら』『人と付き合う』という奴がいるらしいけれど、それも僕には無縁な感覚だ。普通に話していれば、自然と知っている話が出てくる。それをなんとなく、おもしろいと思いつつ聞いてみると、本当にはまってしまう。だからいつも、僕にはどのグループにも居場所がある。おとひっちゃんとクラスが別になり最初の内はみな心配してくれたけれども、とんでもない。全く問題なしなのだ。

人気テレビアニメ『砂のマレイ2』のストーリー展開も、最近アイドル歌手の『鈴蘭優』に恋愛沙汰が起こった噂なども、最近流行の、トラッド風ネクタイのおしゃれなども、僕にはみな同じに並んでいた。もっというなら、男子と女子の差がどうのこうのという保健体育ネタも、それなりには聞いて知っていた。

話に聞く分にはおもしろいからいいじゃないか。

別におとひっちゃんみたく、意識しなくてもいいじゃないか。

どうしておとひっちゃん、ああも女子を見て、変な態度をとるようになったんだろう。

なによりも変なのは、どうしておとひっちゃん、さっきたんのことを好きなんだろう。

『さっきたん』と、呼びなれた名前が浮かんだとたんめまいがした。

俺の気のせいだったら、いいんだけどなあ。

しやれにならないよ、もしほんとだったら。

勉強している振りして数学の教科書を開いていた。

総田からの電話はまだこなかった。夕飯はすでに食べ終わり、僕はいつものように部屋の中でテレビをつけっぱなしにしていた。このテレビが古いのか、画像が全然まともに入らないので、ほとんどラジオ状態にしていた。別に見たいものがあつたわけではないから、なんとなく時代劇が入っているのをそのままにしていた。

試験勉強用に借りたおとひっちゃんの黒いファイル。

書いてあるとおりの問題を完璧に覚えて試験当日に備えられたら、たぶん誰もがおとひっちゃんと同じ成績になるだろうと思う。それができないのは、やっぱりおとひっちゃんの頭がすごいからだろう。おとひっちゃんの部屋は僕と違って、三人兄弟で分け合っている。八畳間を三等分して、それぞれカーテンで区切っている。ほとんど何をしているかは丸聞こえだといっていた。

その点僕は恵まれている。

一人っ子だから。

六畳間の和室だけでも、ちゃんとひとりで占領できるし、テレビも見られる。母さんはいつも

「雅弘は一人っ子だから淋しくて悪いねえ」

と言っけれども、そんなことはない。少なくともおとひっちゃんみ

たく、お兄さんや弟の面倒を見なくてはならないなんて、ことないから。

おとひっちゃんだって、隠したいものを持っていないわけじゃないだろうし。僕よりは秘密をたくさん持っているだろうと思う。学校では絶対にいえない秘密を、知られていないと思い込みながら、隠している。

電話が鳴った。八時にはまだなっていないっていうのに。

おおざっぱなかけかたはやっぱり奴だろう。

大急ぎで取ろうと階段を下りた。しかし一歩遅かった。母さんが受話器を取って

「はい、佐川書店でございます」

と挨拶していた。最初は店のお客さん向けの口調だけれど、だんだん

「あら、こんにちは。雅弘ですか？　ちょっと待っててくださいね

！」

とくだけてくる。相手がおとひっちゃんだと、

「あら、おとひっちゃんこんにちは。雅弘呼びますね」

になるのだが。

「あら、雅弘、もう降りてきてたの。総田くんから電話」

「わかってる」

ひったくり、母さんを背にすぐ答えた。

「どうも、佐川です」

「どうして最初に出なかったんだよ！　俺苦手なんだよ。人の家にかけるのって」

妙に緊張してしまったらしくいきなりなじられた。

「そう、思わないけれど。それより総田、どうした？」

「側に誰がいるのか？　お前の母さんとか」

後ろを見ると、すでに母さんは店に下りていってしまった。そろそろ締める時間だからだろう。よかった。たまにじいっと様子をうかがうことがなきにしもあらずだが、今日のところは問題ない。

「いないよ。隠さなくっちゃなんないことなのかなあ」

「当たり前だ。お前は、関崎の親友なんだろう」

「そうだよ、でも、それを承知でなぜかけてくるのかなあ」

何度か繰り返された言葉、『関崎の親友』

居心地が悪くなり、まるで僕がこれから悪いことをするような気持ちになってしまふ。大げさに言えば裏切りをしようとしているようだ。

現にこうやって、総田とこっそり電話をしていることが、そのものだ。

そうでない、と言いたくて僕は総田に問い掛けた。

「俺に何か聞きたいことあるならいいけれど、黙っている権利だつてあるんだから、それはわかってるだろう。総田だって」

「でも、関崎には絶対言わないでくれと頼んだら、どうだ。それもしゃべるつもりか」

ちよつとだけ考えた。

もし仮に、おとひつちゃんに対してなにかまずいことを頼まれたりしたら。

でもそんなことはあり得ない。

だって俺はそんなことがあつたつて、無視できるんだから。

「大丈夫だよ、総田。今話すことは、絶対におとひつちゃんに話さない。そのかわり、総田の頼みも聞けない可能性があるってこと、あるけどさ」

約束した。

総田の声は自然にひそやかになった。店の方からレジ締めのかたましい音が鳴り響いている。もっと大きい声で聞きたかった。

「あのなあ、佐川。お前、関崎から座談会についてどのくらい聞いている？」

「聞いているつて、たいしたことないよ。一応は先生と話もついて、各クラスの学級委員から意見を吸い上げようとしているつてこと。」

おとひっちゃん、教室をたずねては一生懸命、説明しているって」
「ふう、ごくろうなこった」

「でも、それくらいは知っているだろ？ さっきだって、プリントをコピーしたの持って、おとひっちゃん駆けずり回っていたの見たし。総田には悪いけど、あいつ、よくやっているとと思うな」

「認める。それはよく、わかる。だがな佐川」

ゆっくりと、声をひそめて総田は言った。

「ほとんどの座談会設定は、俺がやったってこと、知らないだろう」

「え？ 今、何て言った？」

「信じられないだろう」

僕は嘘だ、とつぶやきたいのをこらえた。

「だって、総田は今回、座談会には一切関わらないって言っていただろ」

「誰がそんなこと言った、関崎がか？」

「おとひっちゃんはそんなこと、言っていないけれどさ。でも、二分割にしてやるって話だっただろ。総田はフォークダンスでおとひっちゃんは座談会。きれいに分かれてやるから、手を出さないって」

電話の向こうから破裂したかのように笑いこける声が聞こえた。

レジの音が小さく聞こえた。

「あいつは自分で考えたつもりでいるんだと思うけどさ。パネルディスカッション方式でやろうとか、代表者を各クラス一名ずつ出すとか、それを持ち出したのは全部俺だ。嘘だと思うなら、今度萩野先生に聞いてみるよ。俺は萩野先生と関崎と三人で話し合った時、冗談っぽくしゃべったんだ。どうせ誰も聞いていないだろうと思っただけ。あいつ、黙って聞いていて、それでちゃっかり自分の手柄にしようとしているんだぜ。全く、あきれるよな」

「あ……」

声が出ない。僕は首を振った。絶対に総田からは見えないのが救いだっただけ。

「おとひっちゃん、お前に全然、断りもしないで、そうしたんか」

「そうだ。最初は俺も啞然として言い返そうと思ったさ。まさかな、俺が思いついたものを横取りされるとは思わなかったしな。汚ねえ奴だと思ったさ。でも、冷静に考えてみて、どうも向こうには悪意が全くないんじゃないかねえかって、行き着いてしまつてさ。これは俺が大人になるしかないって、結論に達したつてわけ」

僕が答えられないでいるのに気付いているのだろうか。総田はさらに続けた。

「関崎の考えることって言ったら、生徒と先生とを向かい合わせることだけなんだぜ。それでまともに話し合いが成り立つわけないだろう。好き勝手なこといいまくって、誰も交通整理できないで、それでおしまいさ。それが先生に言いくるめられて、はああと頷いてそれで一件落着。たぶん、関崎の考えていることとは繋がらないままに終わってしまう。もしくは、生徒会側でその悲惨なありさまを治めることができなくて、先生の力を借りざるえなくなる。冗談じゃねえよ」

頭の中に響く声が、急にちくりと差し込んできたようだった。

店の方から、レジ締めをする声が聞こえる。

「売上は本日は……、うち文房具……、雑誌……、コミック……」

母さんが、保存専用のレシートロールを手巻きしなおして、読み上げている最中だ。

総田の畳み掛けるような声に混じって、めまいがした。

「言いたいことはわかるよ。総田。でもさ、じゃあどうして、おとひっちゃんにそれを言わなかったんだよ」

か細く僕は訊ねるしかなかった。

仮に、もしだ。

総田の言う通り、おとひっちゃんが『水鳥中学校学校祭最終日座談会案』を自分の考えでなくすり替えとしてやろうとしたのだったら、僕は絶対に許せないだろう。正義感が強い性格だとか、そういうん

ではない。あのおとひっちゃんが、絶対そういうことするわけないと信じたい。

たかが一年ちょっと付き合いのある総田の判断で、おとひっちゃんを決め付けられなくなかった。確かに不器用だし、勘違い野郎だし、受けが悪いところがあるかもしれないけれども。同じ小学校の連中はみな、僕もふくめて、おとひっちゃんをいい奴だといいきっている。間違ったことを身体づくで否定しようとする、ひたむきな奴だったと。

少なくとも他人のアイデアをすっぱり盗もうとするような、したたかな奴なんかじゃない。それって一種のカンニングだ。

「あのなあ、佐川。俺は決して、関崎を責めているわけじゃねえよ。そこところは誤解するなよ。俺が言いたいのはつまりだな」

僕の語調が震えているのを感じたのだろう、なだめるような感じで総田は続けた。

「そりやあいきなり、座談会案の中に、俺の案がひょっこり出てきた時は仰天したさ。こいつ何考えてるんだ？ 結局は俺とおんなじ考えだったんじゃないかよ、とか思ってたさ。でも、よくよく観察していると、関崎は盗んだという意識がさらっさらなさそうなんだ。

うん、あいつは自分で自分のしたことを正しいと信じきっているんだ。自分の思いついたことを、自然そのまま言っていると、思い込んでいるんだ。俺の方を見ておどおどするんじゃないかと、ちよつと釜をかけたけれども全然、反応なし。そこで初めて気付いたんだな。俺も」

「何に？」

頭の中で言葉にならない、直感がきらきらした。

「関崎の場合は、他の連中が思いついたことが直接頭に刷り込まれてしまうタイプの人間だったこと」

「ええと、俺、総田の言っていること、よくわからない」

「つまりだな、佐川。お前だって覚えあるだろ」

深く息を吸い込み、電話口で僕は頷いた。レジのばちんとはじけ

る音が、今度は響かなかった。

「服装規定事件の時もそうだったけれど、関崎の場合は自分で自分の考え方が、決められない奴なんじゃないかって。ルールがあつてその中で行動するのは平気なんだろう。だから成績だつてあれだけトップ取れるんだろう。制服のきちんとした形がきれいだと思うのもあるだろうが、崩したよさつていうのもまた、一理あるはずだ。しかし関崎の場合、なんらかの理由でひとつの価値観しか、絶対だめなんだ。他人の価値観をそのまんま、鵜呑みにしてしまつて自分の考えにしまつ、そういうおめでたい奴だつてことさ」

「いいかげんにしろよ！総田、それは言い過ぎだぞ！」

「たまたま親友の佐川が側にいると。佐川が賛成してくれるから、関崎も安心して自分の考えを確認できると。もちろんそれは俺だつて同じだ。信頼できる奴が賛成してくれると嬉しいもんだ。でも関崎の場合、またちよつと違うような気がするんだ。なんか、宗教がかつていうっていう感じだろうかなあ」

もつと僕は言い返すべきだったろう。

『関崎乙彦の親友』として。

幼いころからおとひつちゃんを慕つてきた弟分として。
でもどういえばよかったのだろう。

受話器を握り締めながら、レジの閉まる硬い音を聞いていた。

「雅弘、今から銀行に行つてくるからな」

夜間金庫に売上を投函しにいくのだろう。父さん母さんが出かける気配だ。

「うん、わかつた」

両親にも、そして総田にも伝わるように、僕は答えた。

親の前でも僕は『関崎乙彦の親友』として振舞っている。

家の中でひとりつきりだった。総田と受話器で繋がっている間に、僕は数時間前の生徒会室を思い出した。おとひつちゃんの後輩が、総田のかく乱するような質問に戸惑い、パニックになりながら帰っ

ていったことを。あの時僕は、総田を魔術師だと思った。同じように僕も、総田に呪文をかけられているのかもしれない。逆らえない感情が湧き出てきた。総田が何を僕に言わせたいのかがおぼろげに見えてきた。

「わかったよ、総田。言いたいこと、わかる」

ほおつとため息をつく気配がする。勢いで総田はくしゃみをしていた。

「さすが佐川。その点は鋭いよな」

「でも総田は、別におとひっちゃんへ恩を売ろうとは思っていないよな。結局どうしたいのか、俺にはまだわからないよ。もしおとひっちゃんが総田の案を無意識で盗んで、いろいろやっているのがむかつくのならば、それは総田が勝手にやればいいことだろ。俺は生徒会と関係ないんだからさ」

ゆっくり、ボーダー線を引いておこうとしている自分がいた。

「関係ない奴だから、佐川。お前の助けがほしいんだ」

「さっきも言っただろ。おとひっちゃんを裏切るようなことはしたくないから。俺には黙っている自由だってあるんだから。たださ、総田」

このままだと総田の魔術にかかってしまう。僕は思いつくままに言葉をつなげた。

「ただ、総田のやり方は俺から見ると、すごくまいと思うよ。おとひっちゃんが動いて、総田がそれを無意識に指示いくつてやり方、これはなかなか、頭のいいやり方だなって思う。俺だったら、おとひっちゃんにいろいろやり方を暗示して、勝手にやってもらって、成功させようって思う。総田にはそういうやり方が向いているんだなって思う。このまま、水鳥中学生徒会のやり方がかたまっていったら、もつとすごいことができるんじゃないかな」

区切ってから、忘れていた言葉を付け加えた。

「だから、俺、今の水鳥中学生徒会、うまく行っていると思うよ。これ、おとひっちゃんの親友としても、ただの生徒としても、そう

思う」

電話の向こうはしばし黙った。

「総田、聞いているか」

「……聞いている」

「どう思う？ 俺の言うこと」

総田の答えを待った。

あやつられはしない。俺は誰の味方でもないもんな。

繰り返し咽元でつぶやき、待った。

「佐川、負けた」

続く総田の言葉で初めて知った。

この時魔術師になったのは、僕だった。

「頼む、俺に知恵を貸してくれ。俺以上の発想を見つけ出せるのは、水鳥中学を探したって、佐川しかいねえ」

繰り返し

「たのむ、たのむ」

とつぶやく総田の声を聴きながら、僕は意外に冷静な顔をして天井を見上げていた。くすんでいる木目が、一つ目小僧の泳ぎに似ていた。家の中ではひとりきりなのに、誰かに見張られている。にらまれている、そんな気がした。でも怖くなかった。

「じゃあさあ、総田は結局何がしたいんか」

一番大きな釣り目っぽい木目をきつとにらみつけ、僕は尋ねた。

「生徒会長、から逃げ出す方法を考えているんか」

どうしてわかったのか、総田は知りたいに決まっている。

でもあえて言わなかった。説明できない。ただの直感だ。そうこまかすしかない。僕はじりじりと響く雑音を聞きながら、総田の答えを待つことにした。うーん、と小さな唸り声がひとつ、聞こえた。「やっぱり、お前には、見抜かれていたか」

「当たり前だよ。見え見えだよ。おとひっちゃんほどではないけれ

どさ」

「関崎と比べられるくらいだと、俺も落ちたもんだよな。まあ、佐川だったら仕方ねえ」

理由を聞いてこなかった。安心して僕は、自分の予想を総田にぶつけてみることにした。ただの直感だったら、お互い内緒にすればいいことだ。僕の勝手な想像が外れていたら、

「なあに馬鹿言っているんだよ」

と笑われるだけだ。言うことそのものに、害なんてない。

「俺が思うんだけど、総田はどちらかというと、おとひっちゃんを生徒会長に仕立て上げて、自分がリモコンで動かしたいっていうのが本心なんじゃないかなあ。否定できる？できないよな」

「……そうだ、ごもつともだ」

「摂政と関白、って感じだよな」

「そのとおりだ」

「俺からすると、おとひっちゃんは一生懸命にやるけれども報われないってところあるし、総田がいろいろ知恵をつけてやったりするのはなかなかいい方法だと思うんだ。これ、おとひっちゃんには内緒で言うんだけど。さっきの座談会のこと、正直なところ、俺、シヨックだったよ。まさか、総田の案を鵜呑みにして、おとひっちゃんがやるうとするなんてって」

「でも、わかっただろ」

「うん、わかったよ。おとひっちゃんは一度があつとわめき散らすことはあるかもしれないけれど、二度目からはあつさり頷く性格なんだよな。総田は違う小学校だったから知らないと思うけれど、おとひっちゃんの成績がいい理由は、二年生の時がきっかけなんだ」

「教えるよ」

僕は、もったいぶって会話の中に空白を置いた。

「おとひっちゃんよりも頭がいいって言われていた奴が、小学校一年の頃にいたんだ。あの頃のおとひっちゃんと同じくらいだったけれど、なんとなく、賢そうな顔していたから、下駄履かされてたの

かもしれない。でもそいつ、すごくいやな奴だったんだ。俺とか、身体が小さいだろ。よく古いタイヤをぶつけられたりして蹴飛ばされたりしたんだ。おとひっちゃんがそれを見てて、すぐに奴を叩きのめしてくれたんだけど」

「腕力もあったのか、関崎って奴は」

「そうだよ、本気で怒らせたらおとひっちゃん、怖いよ。でもそいつは、おとひっちゃんに『お前俺よりも頭悪いくせに』て言い放ったんだ」

五年以上前のことなのに、鮮やかによみがえってくる。おとひっちゃんのかつとなった表情と、片手で僕をかばって立ちふさがった姿が、天井に映し出されているようだった。僕はずっと天井をにらみながら続けた。

「それまではおとひっちゃんも対して、成績がいいこととか意識しでなかったと思うんだ。そりゃ、頭いいって言われていたけれど、むしろかけつこのほうが得意だったし、そっちの方で有名だった。でも、おとひっちゃん、そいつの言葉聞いて、すぐに殴るのを止めたんだ。俺をすぐに引っ張っていった、『いいか雅弘、俺はあいつよりずっとずっといい成績取って、何にも言わせないようにしてやるからな。お前を蹴り飛ばすようなこと、絶対させないからな』って、言っただ」

「悪いけど、言っていいか」

「いいよ」

総田は咽を鳴らしながら笑いをこらえている様子だった。

「単純きわまりない奴だな、関崎って」

「でも、大体想像つくだろ」

「それ以来、関崎は誰にも暴力沙汰を起こさなかったってわけかよ」「そう。手を出しても成績が悪かったらだめだと、あの時おとひっちゃんそう思ったみたいだね。あれ以来、おとひっちゃんはあつというまにテスト満点の連発しだしたよ。気が付いたら、おとひっちゃん通知表に『よくできました』のところ以外、全くしるしがつか

なくなったもの」

三段階評価の通知表だった。まだ一番かどうかはわからない。ただおとひっちゃんがいづも、満点の答案を返してもらっていることだけは窺い知れた。先生が解答を読み上げるよりも、おとひっちゃんの用紙を見せてもらえればすぐに済むものだから。

総田はなんだか考え込んでいる様子だった。ずっと黙っている。決して、聞き流しているんじゃないだろう。

暇を持て余しているような物音がしないから。

「俺がもしかしたら、と思っていたことが大体本当だということが、佐川の言葉で、証明されたな」

「みんな気付いてもいいのにな。どうして誰も勘付かないんだろうって、思ってたよ」

「天才は辛いよな」

皮肉っぽく言い返された。

「とにかく、総田に俺が言いたいのは、このままだと計画がみんなこなごなになっちゃうよ、ってことなんだ。今回の学校祭最終日企画に、おとひっちゃんがあそこまで燃え上がっているのは、これで最後にしようっていう覚悟の表れだと思うんだ。来年やればいいのに、二年で生徒会を引退しようって真剣に考えているんだ。でも、そうしたら総田、お前が生徒会長になるはめになるだろう？ ま、それでもいいよ。俺、総田の方が『ひとり』で会長になるのなら、別に問題はないと思うな」

「「ひとり」でってところが、みそだな」

僕はゆっくり繰り返し返した。

「そうだよ、『ひとり』つきりでだよ」

天井に向かい、もう一度頷いた。

今がチャンスだ、そう天井の木目たちからささやかれたような気がした。

「総田、本当の計画、教えてくれたら、もっと俺もいい方法考えら

れるよ。俺、おとひっちゃんが生徒会に残った方がいいと、思ってるから。『教授』の密かなるプロジェクト計画を教えてほしいな。たぶん川上さんあたりも一枚かんでいるんだろ」

「なんであの女が出てくるんだよ！」

いきなり慌てた気配あり。やっぱり凶星だった。

「だって、今日も見え見えだったしさ。おとひっちゃんならともかく、ほかのみんなには、総田と川上さんがどういう関係かって、大体わかるんじゃないかな」

あとは総田が白状するのを待つだけだ。

力関係、完全に僕が主導権を握った。

狙ったわけじゃないのだ。ただ、いつのまにか僕の方が有利になっただけ。

おとひっちゃんとも、総田とも、いつつもそうだった。

「……わかった。佐川。俺に何を言わせればいいんだ」

「おとひっちゃんを生徒会長に祭り上げる計画の一部始終」

ようやく聞き出せた「総田教授の密かなるプロジェクト」だった。

総田教授の密かなるプロジェクト 原案

学校祭が終わった後、十月には生徒会総選挙が行われる。

告示は十月初旬をめぐりとして、選挙管理委員会を結成し行われる。

生徒会長一名。副会長二名。会計二名。書記二名。計七名。

しかしながら、現在の水鳥中学生徒会は、生徒会長がいなく、極めて異常な事態となっている。また、生徒会副会長二名、会計二名、書記一名という、これもまたかなり少ない人員となっている。計五人。

本来だったら、全員二年生ということもあり持ち上がりで立候補

してもらい、そのまま信任投票を行ってもらうのが一番よい。

もちろん会長職は、現副会長の総田幸信、関崎乙彦のどちらかで決めてもらうのが一番よいのではないだろうか。できれば総田副会長と関崎副会長との話し合いで一人に絞ってもらい、どちらかが再度、副会長に、もうひとりとは生徒会長に、という形で。

そうすれば、丸く収まるはずだった。

空いたポスト「生徒会副会長一人」と「書記一名」を一年生から募集するか、二年生から再度募集するかのどちらかで、決まるはずだった。

「総田はそう、計画していたわけなんだ。そうだよ、俺もそう思ってた」

「今日までは、俺も同じく」

ちつと舌打ちして、総田は続けた。

「関崎の場合、とにかく上に立ちたがっているところが見え見えだったから、ここは俺が引いて、副会長に降りようと思っていたんだ。もちろん話はまだしていなかったし、できる状態でもないよな。でもまあ、関崎の性格を考えれば大体まとまるであろうと、甘く、見ていたんだなあ、俺」

「そりやそうだよ、俺だって、驚いたよ。でも総田。そんなに生徒会長つて、やりたくないものなんか。面倒なことなのか？」

立候補すれば一発で決まるだろうにな、と思ったが言わなかった。「正直なところ、仕事が面倒だとは、思わねえ。ほとんど去年から生徒会長の仕事してきたもんだろ。関崎との仁義なき戦いを続けてきて、それでまともに動かしていこうとしているんだからさ。でもな、俺が『服装規定問題』なんかで多少なりとも、まともに形を残せたのは、立場が『副』だからだった、とも思っんだ」

「限りなく生徒会長に近い、副会長だもんな」

「ちゃかすな。変な言い方だけど、関崎がいい子の生徒会長役を全部引き受けてくれたから、俺が反対勢力をかこつて、なんとかできたわけなんだ。対照的、って言えば一番近いかもしれない。全校生徒から反発かいまくつて、人気下落ぎみの関崎副会長に対抗して、という構図がいつのまにか、出来てしまったっていうかさ」

「さすがだなあ、総田」

だんだん、総田の本心らしきものが見えてきた。

でもここでもばらすようなことはしない。

僕は話を促すべく、黙った。

「でも仮にだ。俺が生徒会長にまぐれでなつて、関崎がいなくなつて、ということになると、果たして俺は同じこと、できるか？ できないな、ということに気付いてしまったんだ」

「確かに、総田は革命派かもしれない。ナポレオンみたいな感じかな」

「しかも、生徒会長はふたりじゃない、ひとりだ。関崎もいればいたで、それなりに仕事こなしてくれるしき、個人的感情はとにかくやる時はやってくれるよ。でも、仮にあいつがいなくなった場合だと、俺ひとりで先生たちの責めを受ける自信は、ないな」

「王政復古、してしまえそうだもんなあ」

「そう、佐川。俺は今、水鳥中学生徒会に『王様』が必要なんだ」

総田は、気付いた後に立て直した『総田教授の密かなるプロジェクト』をさらに続けた。

今、仮に関崎乙彦が、水鳥中学生徒会を脱退するつもりだとする。学校祭最終日の座談会を花道にして引退できれば未練なしだろう。

しかし、それではたまったものではない。

次期生徒会長として本来ならば、関崎を押し出すつもりでいた総田の考えが覆されてしまう。次期生徒会長のお株が、総田本人に回

つてきてしまう。

それは、全校生徒の大多数にとっては、かなり望ましいことと思われるだろう。たいしたことではない。『服装規定問題』で失点した関崎副会長よりも、制服の襟をはずせるように緩和した総田副会長を評価する声の方が高いに決まっているからだ。百歩譲って、関崎と同じ小学校出身者が多少反発したとしても、一年、三年の評価はかなり高いのだから、まかりまちがっても不信任ということはないだろう。

さて、それではどうすれば関崎乙彦を次期生徒会長に残しておくだろうか？

関崎の、おだてに乗りやすい性格を利用して、生徒会メンバー同でほめまくり、おだてまくる。さすがに犬猿の仲である総田副会長が、しらじらしいおせじを言うのはまずい。たまたま今回は学校祭最終日座談会というからみも存在する。関崎が命をかけてやり遂げようとしていることだ。

まずは、成功させよう。

表面上は大成功の座談会として幕を下ろそう。

直後、関崎は自己満足に浸りきっていることだろう。

どう成功させるかは、これから総田を始めとする一同が考える。

大成功で気をよくしている関崎に、誰か第三者から、

「実は総田を始めとする連中のおかげなのだ」

ということを、ささやかせる。相手は佐川か、もしくは別の相手か（できれば女子がベスト）、決めていない。とにかく関崎ひとりの手でやり遂げたわけではない、総田副会長の手によって助けられたことを伝える。

できれば、それは生徒会関係者とは別の方から伝えてもらうのが望ましい。

思い知って関崎乙彦は荒れるだろう。

よりにもって、あの不真面目野郎に手玉に取られたと気付いた時はたして関崎乙彦は生徒会に未練なく、やめることが可能だろうか？

プライドはずたずただ。かといって総田に文句を言うことはできない。いや、言うかもしれないけれども、「生徒会の人間が、学校祭成功に力を尽くさないと思っていたのか？」と言い返せばぎゃふんと黙るだろう。

総田への対抗意識がこれで高まり、未練が倍增するのは、目に見えている。

そして、『来年こそは、絶対に』という気持ちが芽生えるのも時間の問題。

自ら立候補するだろう。

総田が動かなければ、信任投票に持つていけるだろう。

多少失点の多い関崎副会長だけれども、全校生徒はよっぽどのことがないかぎり、不信任投票などしないだろう。あっさり決まる。

「やりたいことをやっているのが、俺には一番いいような気がするんだ。佐川。俺はもともと、ナンバー2の人間なんだよなあ。トップで圧力を受けつつけるよか、縛られないで好き勝手にやらせてもらえる副会長ってところ、俺が一番好きなんだ」

総田の言葉を大体まとめると、こういう形にまとまるのだろう。

僕は頭の中にメモしていき、自分の中で『総田教授の密かなるプロジェクト』計画書を書き上げた。

予想していた通りだった。

総田はやっぱり、おとひっちゃんを防波堤にして、秋以降の生徒会を運営していこうとたくらんでいた、というわけだった。はたし

ておとひっちゃんが、総田の計画に気付いているのかわからないけれども、僕は気付いていない方に一票入れている。そして、たぶん総田の読み通りに話を進めれば、その通りになるだろうということも、断言できそうだ。

おとひっちゃん、そういうところは単純だからなあ。

おだててほしい人に、おだててもらえれば、素直に言うこときいてくれるもんなあ。さすがだよ、総田。

何か言おうと思ったとたん、裏口から物音がさこそとした。どうやら両親が夜間金庫からもどってきたらしい。まずい、これ以上しゃべっていると母さんから問い詰められそうだ。

「総田、ごめん。今の話はおとひちゃんには絶対に言わないよ。ただ、今はうちの親が帰ってきてこれ以上続きを話せない。おとひっちゃんとは親同士も仲いいから、俺もあまり、これ以上いえないからさあ。うわつつらのことだけで終わらせたく、ないからさ」

僕は、いかにも総田に加担したさそうな口ぶりを装って、電話を切ろうとした。

「分かった。最後に一言だけ確認させる」

「いいよ、手短に」

「俺の計画は、はたして水鳥中学生徒会にとってプラスになると思えるか？ 俺の判断は、俺ひとりの身勝手な考えだと思うか？ 保身だと思えるか？」

難しい質問だった。

でも、僕は考えることなく、即座に答えた。

「俺は総田の考えが正しいと、思ってるよ。おとひっちゃんの親友だから、絶対にそう、信じている。だから、これから総田にいろんなことを参考に助言できたらいいなあと思っている。明日、もう一度夜に、電話するよ」

「助言？」

「そう、誰に頼めばおとひっちゃんは、うんと頷いて、生徒会に残

ろうと思うかどうか」

僕はゆっくりと最後の部分を強めに言った。

総田もなにやらぴんときたらしい。含み笑いする様子だった。

「明日の夜、だな。わかった」

電話は切れた。

僕は関崎乙彦の親友として、総田の言葉を受け入れてしまった。

確かに、会長就任後の計画はあまりにもひどすぎる。

でも僕は、おとひっちゃんが生徒会長としてトップにたった姿を見たかった。誰よりも、不器用だけれどひたむきなおとひっちゃんには、水鳥中学生徒会の会長としての名誉が、一番ふさわしいような気がしてならなかった。たとえ、失策を繰り返し顰蹙もんだった関崎副会長だったとしても、僕はおとひっちゃんの、本当に一途で懸命なところを知っている。僕が泣かされていた時に、すぐ立ちふさがってくれたおとひっちゃんを知っている。

生徒会を副会長のまま、引退させるなんて、絶対にいやだった。

たとえ、おとひっちゃんを一時的に裏切ることになったとしても、

僕は僕の意志で関崎乙彦生徒会長を、誕生させたかった。

おとひっちゃん、ごめん。

でもそれは、おとひっちゃんにとって一番いいことなんだ。

朝、迎えにいくとおとひっちゃんはいなかった。とつくに学校へ行っただという。きっと生徒会室で総田とふたり、また顔を突き合わせているんだろう。いつもだったら僕はおとひっちゃんの家で声を掛け、一緒に学校へ急ぐのだけれども。まあ、当然か。学校祭最終日だけではなく、初日、二日目の準備だって生徒会にはあるんだから。

おとひっちゃんに今朝の僕を見られないで本当によかった。僕だって多少、良心の呵責ってものは、ないわけじゃない。

意識として『関崎乙彦の親友』面した僕がいるのに、前の日に総田へ話した言葉は、どう考えても裏切り行為と思われるかも、しかない。少なくともおとひっちゃんが知ったら、何されるかわからない。何発ぶん殴られるか想像がつかない。絶交されるかもしれない。それはよくわかっていた。でも、総田ともっとしゃべってみたい、総田の本音をうまく探ってみたいとわくわくする僕の本音を無視することなんて、できやしない。おとひっちゃんには見せたことのない、僕の一面を、総田に見せた時。

動揺を、僕はなぜか気持ちよく受け取った。

くせになりそうだ。

でもまだまだ、これからだ。

総田、まだお前の『教授の密かなるプロジェクト』は甘いと思うよ。

俺だったらもっとうまくやってみせる。

でも、おとひっちゃんを生徒会長にさせたいから、俺は協力するだけなんだ。

俺は絶対に、『関崎乙彦の親友』なんだから。

昨夜話したことを思い出しながら、僕は二年三組の教室に入った。

「あれ、佐川、今日おとひっちゃんと一緒にじゃねえの」

「うん、例のあれで先に行つたみたいなんだ」

いつもお神酒徳利のようにくつついている僕とおとひっちゃん。ひとりでいるのはめずらしかつたんだろう。かばんを置いて、僕はすばやく黒いバインダーを取り出し、仲間数人を手招きした。

「ほら、おとひっちゃんの予想ファイル。どうせ、写すだろ」

「佐川、お前つて本当にいい奴だよなあ」

男子三人が小声でささやきながら、大学ノートを開き僕の机にたむろする。目的はひとつ。予想問題を丸写しするということ。本当はコピー機を使いたい。でも、一枚五十円もするなんて、馬鹿高すぎる。しかたないから、みな手書きだ。

「今日中に返してくればいいからさ」

僕は学習委員の義務、『先生のお荷物運び』をするために教室を出た。

今日は社会だ。地理だ。ドアの高さくらいある東北地方の地図をひとりて運ぶ。廊下におとひっちゃん、総田がいないことを確認して僕は太急ぎ、職員室に向かった。

ちょうど生徒玄関が八時二十分で締められ、職員玄関から遅刻した連中が入ってきたところだった。職員室の目の前で、遅刻者に『違反カード』を一枚切っている五人は、生活委員のみなさまがた。校則違反をしないきちんとした制服姿で、必死に書き込んでいる。恨まれる仕事だ。

僕は前に、学生帽を忘れてしまった時に一枚だけ、切られたことがある。

対象者は主に、結んだネクタイの両端が二十センチ以下の長さの者。

前髪が眉に全部かかっている者。

スカートの丈が膝下十センチ以上、もしくは以下の場合。

人間関係をうまくやりたい僕としては、絶対になりたくない委員のひとつだ。

でも、やっぱり向いている人っていうのはいるわけで。

僕は急いで社会の先生から地図を預かり、よろけながら廊下に出た。一仕事終わったという風に引き上げる生活委員の一人を呼び止めた。

「さっきたん、今日、またたくさんカード、切った？」

振り返った『さっきたん』は、僕を見つめておとなしめに微笑んだ。

みずのなつき
水野五月。

小学校の頃から『さっきたん』と呼んでいた。

ふたつに分けたするんとした髪が両肩にたれていた。額を大きく出していた。絶対に校則からはずれない髪型だけれども、さっきたんにはなじんでいる。ちよつとはつかねずみ風の顔立ち。こういう女子だけだったら、きっと校則もうるさく言われないですむんだろう。水鳥中学の女子における校則は、さっきたんに似合う格好をそのまま上げただけのような気がする。

世の中はいろんな顔があるんだから、似合わない女子が校則違反したってしかたない。僕は他の女子を見るたびそう思う

当然、制服も二十五センチくらいスカートを余らせて結んでいる。僕も男子の中では前から二番目くらいの背丈だけれども、さっきたんはさらに小さい。僕がさっきたんと呼ぶのは、小学校が同じというのもあるけれども、なんだか小さい共通点にほっとするからだと思う。

「佐川くん、どうしたの？ 重そう」

「次の時間、社会だからさあ。東北地方の地図だって」

「ひとりで持つの？ 端っこ、もしよければ私持つわ」

話し方もやわらかい。二組の女子はわりとさばけた感じの連中がほとんどだけれど、さっきたんだけはか細く、ささやくように話す。

それでいて全然クラスで浮かないのは、やっぱり性格のおかげだろう。

「大丈夫だよ。丈が長いだけで、重くはないんだ」

男子の意地だ。僕は笑いながら断った。続けた。

「それにしてもいつも俺、思うんだけど、さっきたんって一年の時からずっと生活委員やってるだろ。やだろ、本当のこと言うとき」

「そんなことないけれど、冬は寒いからちょっといや」

「それに、クラスの奴が違反したとかいっては、『違反カード』切らなくちゃいけないしさあ。大変だよな。俺だったら、絶対できない。万年学習委員でよかったって、思うよ」

「佐川くんは学習委員が似合ってると思うわ」

理由を言わずにさっきたんは僕をちらっとみて、すぐ目をそらした。

「今日は先生がいたからそういうわけにもいかなかったんだけど、いつもは私、切らないの。だって、四組では違反カードを一人一人張り出してるんだもの。五枚たまると家に電話が入ることになっているから。四組だけなんだけど」

二年四組といえば、おとひっちゃんがいるクラスだ。

服装規定問題で、大御所関崎副会長のいるクラスゆえ、よけい厳しくなっているのかもしれない。僕はその辺聞いていないけれども。担任によっても異なるからその辺はよくわからない。三組がわりと、校則関係についてゆるめなのは、さっきたんが前もって「抜き打ち服装検査」などの情報をクラスに流してくれるおかげだろう。

「四組って、やたらといやな噂が流れてくるよなあ、やっぱりおとひっちゃんのせいかな」

ついぽろっと、こぼれた。

「関崎くん？」

「うん、副会長のいるクラスだからなおさらなのかな」

さっきたんは軽く首を傾げ、すぐに小さく振った。

「違反カードのことは、関崎くん関係ないみたい。あまりクラスのことに関わり、出さないって、四組の人言ってるし、それに」

ちらりとまわりを確認した後、僕にしか聞こえないささやき声で「ちゃんと、前もってチェックとかある時は、ちゃんと言ってくれるんですって。関崎くんを目のかたきにしているのは、ほんの少しだけだと思うの」

さっきさんは僕とおとひつちゃんが、親友だってことを知っている。

なにせ、小学校五、六年一緒の組だった。

「そうだよな。おとひつちゃん、いい奴なんだけどな」

二年教室までしばらく階段を昇りながら、なんとなく小学校の頃の話をした。さっきさんは僕を「佐川くん」おとひつちゃんを「関崎くん」と呼ぶ。同じ組の女子で、呼び捨てにしない人は珍しい。

僕は言葉を選んで、思い切って言ってみた。

「ここだけの話なんだけど、おとひつちゃんがさ。今度の学校祭で座談会やるうとしてるんだけど、なかなかうまく行かないみたいで落ち込んでるんだ」

「あの、関崎くんが？」

「あのままだと、まいってしまいそうです。俺、生徒会の中はよくわからないんだけど、次の生徒会選挙には出ないとまで言っているんだ」

この事実、僕はまだ、同じ組の男子に一言も話していない。

総田と、今、さっきさんにだけだ。

さっきさんはいぶかしげに僕の顔を見つめ、尋ねてきた。

「関崎くんが生徒会に残らないなら、生徒会長は誰がなるの？」

やっぱり、かかってきた。

僕は確信した。

さっきさんは、おとひつちゃんが生徒会長になるもんだと、決め込んでいたってことだよ。きっと、同じ小学校の連中はみな同じように思っているだろうけれど。

おとひっちゃん。やっぱりそうなんだよ。

水野五月さんは生徒会長を関崎乙彦だと思っているんだよ。

「それなら、誰が生徒会長になるの？」

さっきたんはもういちど、繰り返し返した。

「たぶん、総田あたりかな」

「関崎くんの方がいいのに」

なんとなく口にした、という感じだった。僕を気遣ってつけたしたのりではない。

力を抜いたままつぶやいた。

「三組の男子も、おとひっちゃんいい奴だって言ってるんだけど、でもな。あいつ、敵作りやすいっていうか、もう作っちゃってる」「そうなの」

階段の踊り場でいったん立ち止まり、僕は続けた。

「違う小学校から来た連中は、おとひっちゃんが副会長やっているところか、せいぜいテストの順位発表でトップに上がっているところしか知らないからなあ。せめてさ、陸上やめなければなあ。さっきたん、ちなみにおとひっちゃんのどこが、受けいいと思う？」

わざと訊ねてみたかった。でもさっきたんは何も考えない風に答えてくれた。

「関崎くんは、うそを言わない人だってこと、わかっているから。」

佐川くんがいつも信頼しているってことは、そういう人だからってことでしょう」

「そうだね。僕も、自分でも、そう思う」

確かに、嘘を言わない、裏切らない。僕はさっきたんがそこまでおとひっちゃんのことを観察しているとは思わなかった。

でも、「佐川くんが」という口調になにかひっかかる。

「うまくいえないけれど、一生懸命だったことはわかるの。あのね、佐川くん、これって変に思われるかもしれないけれど」

「変に思わないよ」

さつきたんは声を潜めて、ちよつとうつむき加減にささやいた。もつと近くに寄って聞き取らなくてはならない。

「今度の学校祭、最終日のこと。生活委員会でも話として出ているんだけど、みなフォークダンスの方を楽しみにしているみたいなの。座談会の方は全然、何も話題にならなくて。なんとなくだけど、委員会に關係している人たちはみな、『フォークダンス』が一番楽しいと思ひ込んでいるところがあるみたい」

「そうだね、うちの組はどうかかわらないけれどさ」

「でも、例えば……フォークダンスを踊りたくない、という人だつて、学校の中には必ずいるはずだと思ふの。無理やり引きずり込まれてしまう人もいるんじゃないかと思ふの」

さつきたんのおちよぼ口から『フォークダンス』という単語が飛び出すのが意外で、僕はもつと身をかがめて覗き込んだ。はにかむようにさつきたんは続けた

「どつういう形ですのかわからないけれど、男子と女子で手をつなぐことになりそうだって聞いているわ。でも、中には手を繋かれるのがいやつて人もいるだろうし、触ると菌がつくとかいわれて小指の先が触れる程度にする人だつて、必ずいるはずよ。普段でさえば菌みたいない扱いをされている人は、フォークダンスでさらに、いっぱい、傷つかなくちゃいけないくたつちやうんじやないかしら」

変に思つていない証拠に僕は、頷きながら軽く笑いかけてみた。うまくたまつたものではなかつただろう。行かない。にやけているみたいに写つたかもしれない。

「うん、そうだね。総田はそこまで考えていないと思ふ。言つたとしても、想像がつかない奴かもしれないよ。わかってくれるのは、おとひつちやんだと思ふ」

「そう。関崎くんは、小学校の頃から、弱い立場にいる人のことが分かると思ふの。ほら、六年の時に、女子の間で仲間はずれこつこがはやつたことがあつたでしょ」

「うんあつたあつた。でもあれはおとひつちやんまづかつたな」

「その時に関崎くんはものすごい勢いで女子を怒ったでしょ」

六年の頃。いきなり教壇で女子全員を怒鳴りつけたことがあった。全く関わっていないさっきたんを始めとする女子はたまったものでなかっただろう。幸い、さっきたんは全く根に持っていないようだけれども、一時期状況がさらに悪化してしまったことがあった。クラス的女子といざこざが増えたのは、たぶん、そのあたりだ。

「おとひっちゃん、会長になってしまえばいいのにな」

気が付くと、もう廊下には誰も人どおりがなかった。まずい。そろそろ先生が教室に入ってくる。しかも、さっきたんとふたりきりだ。

別に変なことなんてしてない。見られたってどうってことない。でも、さっきたんはいやだろう。きつとからかわれる。

「まずいよ、これからホームルームが始まるとこだ」

「ほんと、佐川くん、ごめんなさい。やはり端っこ、一緒に持ちます」

さすがにふらふらしているところを見かねたんだろう。僕が遠慮するのを、やさしい声でふりきって、地図の端っこを一緒に持ってくれた。

五組、四組はまだ教室の戸が開いていた。僕とさっきたんがふたりに地図を運んでいく姿はきつと、見えたのだろう。四組の教室におとひっちゃんが戻っているか、ちらつと見たら思わず目が合った。えらく疲れた風だった。川の字式にずらつと並んでいて、先生のまんな前だった。近眼の人が優等生か、もしくは一番うるさくて目をつけられる奴の席。おとひっちゃんはたまにめがねをかけていることがあるからな。自分で希望したいとは思えない席だった。

はつと笑顔で何か言おうとしたらしい。

でも続くさっきたんの姿に、また別のことを感じたらしい。すぐに目をそらして、筆箱を開こうとしていた。

予想通りだと僕は思った。

おとひっちゃんは非常に、しぐさがわかりやすいんだ。

おとひっちゃんは何を言いたいのかが、口で言わなくても、すぐにわかるんだ。

どうして総田はそんなことに気付かないんだろう。

秋の木の葉が、一枚二枚とちらつきはじめた。枯葉色を中心にすえた窓際の景色は、晴れた空、透き通った雰囲気だった。風が吹いてきたせいかもしれない。時折、枯葉が立ち上がった風に見えて、思わず指差したりした。

東北地方の地図を開いて、一番背の高い奴に頼んで、黒板の上に吊り下げてもらった。こういう時、ちびはいやだ。

「雅弘、さっきどうしたんだよ」

学級委員の友達につつかれた。わかってる。さっきたんと一緒に教室へ入ってきたことを突っ込もうとしているんだ。僕は何も考えずに返事した。

「ああ、さっきたんと一緒に来たってこと？」

「全く雅弘ってばなあ、ガキの癖にそういうところは大人なんだよな。ちび同士、いいカップルに見えるけどなあ」

確かに、僕より背の低いのは女子だとさっきたんくらいだ。

他の男子だったらわざと

「まさかだろ、あんな女の何処がいいんだ」

と悪口を言うのかもしれない。でも僕にはそんな必要がない。

「普通にしゃべっているのがそんなにおかしいか？」

「雅弘って、意識してねえのか」

「全然。だってさ」

僕はそっぴいながら、他の男子には気付かれないようにささやいた。

「知ってるだろ。おとひつちゃんのこと」

同じ小学校出身だからこそ、言えることだ。

本当に仲のいい連中だから、お互い協定を結んで、知らん振りをしているのだから。奴は頷いた。

「そうか、忘れてた。そうだよな。おとひっちゃんは今、目覚めてるんだよなあ」

「さっきもさ、四組の前を通ってきたんだけど、おとひっちゃん、かなり意識してたみたいなんだよ。まずかったかなあと、今ごろになって俺、反省してる」

「本当に、あいつは純だよな。でもわかるような気はする。おとひっちゃんはあまりうるさい女子好きでなさそうだしな」

学級委員はふと、僕に指でさっきたんを指差して尋ねた。

「向こうはどうなんだろうな」

「わからない。女子の考えていること、俺には想像つかないよ」

「なんかなあ、俺の勝手な想像なんだけだな」

口籠もりながら、あいまいなことを、学級委員は口にした。

「もしかしたら水野さん、お前のことを・・・」

「冗談はやめろよ、頼むから。おとひっちゃんの前では絶対に言わないよ」

ひそめた声で僕も言い返した。

「身の危険、感じているだろ」

「当たり前だよ！ 噂にでもなったら、一大事だ！」

他の小学校から来た連中は違うのかもしれないけれども、僕たちはなんとなく、誰々が何々のことを好きだという言葉を言わないようにしてきた。僕のように女子とただの「友達」としか思わない奴がほとんどだった。

だから、平気で一緒におしゃべりもできるし、さっきたんと一緒に廊下でおとひっちゃんねたを振ることもできる。

ただ、他の小学校から来た奴からすると、それはちょっとおかしく見えるらしい。噂では女子と付き合っているという話もちらりと聞くし、なんとなく見ていてわかることもある。

前の日に総田と川上さんがしゃべっている時に、ふつと感じた、べたつとした雰囲気といえいいんだろうか。

なにか、僕は真似したくないような、女子との雰囲気。

どうして誰も総田と川上さんとのことを噂しないんだろうか。

たぶん、お互い隠しているんだろう。

ただ生徒会の中では、僕以上におとひっちゃんの方がいらしているに違いない。おとひっちゃん自身はただ、「総田と川上のしゃべり方がむかつく」と思っている程度かもしれない。でも、なんとなく僕からしたら、それ以上の感情のゆれがありそうな気がした。もちろんおとひっちゃんにいう気はない。総田に匂わせることができるだけで十分だ。

だけど、僕がいつも不思議に思うのは、どうして総田はおとひっちゃんの片思いに気付かないのかってことだった。僕からしたら、わかりやすすぎるおとひっちゃんの行動だ。下手したら全校生徒に関崎乙彦の好きな相手が誰だか一発ではれてもおかしくないと思うのだけれども。もちろん、同じ小学校の連中はすでにお見通した。

五年生の夏あたりから、おとひっちゃんはあまり女子としゃべらなくなった。それまでは普通だったのにだ。決して喧嘩を売るとか、怒鳴るとかそういうのではなく、僕のように自然な会話が全くできなくなってしまうただけのことだった。用があれば、僕にそれとなく話し、そこから伝えるような形だった。その頃から、なんか変だなとは思っていた。

やっぱりこれだ、と思ったのは秋あたりだった。

当時、字のきれいなさっきたんがクラスの『学級通信』を清書する係だった。うちの小学校では、ガリ版に鉄筆で一文字一文字、文字を書き込んでいき、それをわら半紙に印刷して、配るやり方を取っていた。原稿を集めてから手写するのが、さっきたんの役目だった。インクがにじんで手が汚くなる、そんな学級通信をくばっていたさっきたんは、僕の隣に座っていたおとひっちゃんに、何気なく渡していた。

「関崎くん、どうぞ」だったろうか。とにかく、あまり崩れた言葉ではなかった。いつものやわらかい笑顔だったように記憶している。何かに熱中していたおとひっちゃんは、ふっと顔を上げた。思わずさっきさんの顔を正面で見てしまったようだった。ただそれだけだった。頷いた、ほんとにそれだけだった。

さっきさんが後ろに進んだとたん、おとひっちゃんの視線がふらふらとさまよいだし、瞬きを突然し出した。歯を食いしばったように口元堅く結び、頬骨のあたりが色濃くなってきた。今思えば「真っ赤になった」という状態だったのだろう。

とにかく、おとひっちゃんの今まで見たことのない状態に僕はびっくり仰天した。

「おとひっちゃん、どうしたん？」

学級通信に何かまずいことが書いてあったのかとすぐに目を通してたけれども思い当たる節はなかった。

「なんでもねえよ」

おとひっちゃんはすぐにバインダーに、学級通信を挟み込んだ。

丁寧に、二つ折にしていたたんだところが、なんとなく、おとひっちゃんらしくなかった。

ばくもそうだけど、たいていの男子は配られたプリントなどを、そんな丁寧にきっちりたたむなんてこと、普通しない。おとひっちゃんも、その時までではそうだった。なのにだ。それからというもの、おとひっちゃんは「学級通信」に関してのみ、両端をきちんと合わせてたたんで、しまいこむようになった。隣の席ですつと観察していた僕が見たんだから、間違いない。

絶対にさっきさんと、なにかあるな。

僕は思ったことをすぐに口に出さず、様子を見る性格だ。

だから、誰にも言わなかった。かわりにずつとおとひっちゃんとさっきさんの様子を観察しつづけることに決めた。たまたま僕に用があつてさっきさんと話をしている時とか、給食の時間におぼんで運んでくれた時、おとひっちゃんがどういう顔をして受け取るかと

か。結構機会はたくさんめぐってきていた。

だんだん周りでも、男子と女子が付き合いだしているという噂が出てくるようになったけれど、おとひっちゃんのことを言う奴はいなかった。さっきたんと同じだった。ただ、僕だけが気付いていたにすぎなかった。

たまたまおとひっちゃんが居ない時に、誰かが他のクラスで付き合っているらしい奴の名前を挙げた。僕から見たら、あまりそういう感じに見えなかったので、

「おとひっちゃんにくらべたら全然、そんな感じないよ。きっと、ただ仲がよかったよ」

と、ぼろつと口にしてしまった。あれはまずかった。失敗だった。

「おとひっちゃんにくらべたらって、おい、雅弘、おとひっちゃんにそんな女子いるのかよ」

早速、旅館の一室で問い詰められ、僕はあいまいに白状してしまった。

もっとも、みんな知っているとばかり思っていたので、みんなの驚きの方が僕には意外だった。どうして、みんな、目が節穴なんだろう。

でも僕がばらしたなんてことになったら、おとひっちゃんが何をするかわからない。一度も殴られたことはないけれど、怒ったら怖いことはよくわかっている。だから、必死にフォローに回った。

「でもさ、おとひっちゃんはきつと、付き合うとかそういうことする気ないと思うし、もしばれたらかえって立ち直れないと思うよ。」

だから俺は、おとひっちゃんにそのこと、言いたくないんだ。相談なんだけど、このこと、俺たちの秘密にしようよ」

今思えば、よくみんな、頷いてくれたものだと思う。

「そうだなあ。おとひっちゃんだもんな。わかった。雅弘に免じて内緒にしとこうぜ」

おとひっちゃんはそのことを、現在まで全く気付いていないはずだ。

同じ小学校の男子一部が、自分の片思いを見抜いているなんてことを、想像すらしていないはずだ。

社会の授業が終り、別の男子が僕の代わりに地図を丸めて職員室に持っていった。僕の背が低すぎて手が届かなかったのを、授業が始まる前から見ていたのだろう。助かったけれどもなんだか、しゃくだ。

次の授業は苦手な英語だった。いつも僕は、おとひっちゃんから教科書の訳文を丸写しさせてもらっている。一週間分はすでにもらっている、特に予習する必要もない。ただ、音読させられるのが面倒だ。発音がよくないと、アクセントが違うとかいろいろつかれるんだろうな。当てられるかどうかはわからないけれど、心配なのでカタカナで、発音の振り仮名を振っておいた。

「雅弘、おい、雅弘」

呼ばれて顔を上げると、いつのまにかおとひっちゃんが側に立っていた。四組からどうしたんだろう。教科書か辞書か忘れ物でもしたのだろうか。

「あれ、おとひっちゃんどうした？ 教科書かなんか忘れたんか？」

「そんなんじゃないよ。ただ、なんとなく」

疲れているんだろう。おとひっちゃんは、同じ小学校から来た男子数人にも声をかけていた。

「それにしてもおとひっちゃん疲れ果てている顔しているなあ。今日も早かったって、おばさん言ってたよ」

「うちだとなんだか落ち着かないからさ、生徒会室で書類作ってた」
「ひとりで？」

「そう、総田側のフォーケダンスがどういう方に向かっているのかはわからないけれど、お互い口出しするのめいやだろうしさ。でも、だいぶ一年生側からはやる気のある意見が上がってきつつあるし、俺のやっていることもまんざらじゃないかな、と思う」

昨日の、陸上部の後輩のことだろうか。僕は昨日おとひっちゃん

を訪ねてやってきた彼について、話すべきかまよった。おとひつちやんはどんどん勝手に話を進めていった。

「三年生はやっぱりなかなか厳しい反応が多いようだけど、どうせ来年は卒業してしまうんだ、それはそれで割り切って、今の一二年を中心に勝負していこうと思うんだ。まず、各クラスの学級委員を代表にして、パネルディスカッション形式にする。で、代表の意見を生徒会側から提示して、先生側の「正論」をぶつけてもらうんだ。そのあとで、学級委員それぞれの意見を、手上げて発言しまくってもらい、ある程度盛り上がってきたところで今度は、全校生徒側から発言してもらうんだ」

語りつづけるおとひつちやんを、僕は半分無視していた。でも顔は聞いている風に見えたのだろう。機嫌よさそうに見えたけれども、なにかひつかかるものを感じられて、僕はまだまだ用心していた。なんか、あつたのかな、いつもだったらわざわざ教室まで来たりしないのにな。

おとひつちやんにしちやめずらしいよな。

ここまで考えて、ぴんときた。

「あのさ、おとひつちやん」

僕は他の連中に聞かれないよう、何気なく小さな声で声を掛けた。
「ん？どうした？」

「この前、言ってたことさ。おとひつちやん生徒会引退するって」

「あれは絶対誰にも言うなよ！ 雅弘にしか話してないんだからな」

「わかってるよ。誰が言うかって。たださあ、みんなはおとひつちやんが生徒会長になるもんだって決め付けてるよ。ショック受けると思うな」

「まさか、どうせ俺より総田を選ぶに決まってるさ。俺は人気ないからな」

「だってさあ、今朝も俺、さっきたんと」

僕はきわめてさらりとつぶやいたつもりだった。

ついぼろりともらした、という風に。

さっきたん、という言葉を口にしたつもりだった。
予想通りだった。

おとひっちゃんのまなざしが瞬間、さっきたんの方を見つめ、すぐにそらした。僕の顔を少しにらむように、唇を軽くかんで。

「なんか、話してたな」

「あ、やっぱり見てたんだ？　なんだかおとひっちゃん俺に話した
そんな顔してたけれど、声かけなかったからさ、変だなあと
思ってたんだけど」

やっぱりそうだ。僕は努めて冷静な振りをして続けた。

「さっきたん、おとひっちゃんが生徒会長になるもんだって
思い込んでいるみたいだよ。おとひっちゃん、五年生の時から一生懸命で
ひたむきで、嘘つかない性格だからって、言ってたよ。総田の方は
どうかかわからないけれど、俺たち小学校が同じだから、どうしても
おとひっちゃんの方を応援したくなるんだと思うんだ」。

おとひっちゃんは不意に僕の顔をじっと見つめた。

「俺、とつてもだけどいえなかったよ。おとひっちゃんが、生徒会に
残る気がないなんてさ」

とまどいがなにか、別の形になってしまったかのようにだった。
いきなりだったから驚いた。瞬きすらしなかった。

「本当に、誰にも言つてないな。雅弘」

嘘をつくのは方便だ。

「もちろんだよ」

「それならいいんだ」

おとひっちゃんは軽く僕の頭をたたいて出て行った。

全く目的なしの三組訪問だった。

他の奴もちよつと意外だったらしく僕に尋ねた。

「おい、雅弘、おとひっちゃんどうしたんだろう？」

「さあ、何か気になることでもあったのかなあ」

僕は、自分にだけ分かるように、さっきたんを目で追いながら返
事をした。さっきたんは女子同士で固まってなぜか、『アルプス一

万尺』の手遊びをしていた。なぜだかやたらと最近、うちのクラスではやっている。うるさくはないけれど、「あるぷすいちまんじやーく、こやりのうーえで」と歌う声を耳にすると、つい小学校時代にタイムスリップした気持ちになる。

それにしてもだ。どうしてみんな気付かないんだろう。

総田もおとひっちゃんの弱点を探して責めているのはいいけれど、どうして特定の女子名を出したりしないんだろう。僕だったらめらうことなくそうするだろう。それこそおとひっちゃんのアキレス腱だ。

水野五月。

英語の時間中僕は、当てられたところを音読し終わったあと、ずっと考えていた。どうして、僕にははつきりと見えるものが、総田にも、おとひっちゃんにも、他の奴らにもわからないのだろうか。もし僕がおとひっちゃんを説得するとしたら、まずはさっきんに協力を依頼して、計画を練るだろう。さっき、三組学級委員の奴に変なことを言われたけれど、確かに僕とさっきんとはよくしゃべることが多い。それに、さっきんはおとひっちゃんが生徒会長にふさわしい奴だと、思っている。確認済みだ。

もちろん、「関崎乙彦の想い人は水野五月である」などという事実を教えたりはしない。ただ

「おとひっちゃんをなんとか、生徒会長にしてやりたいんだ。でも、総田を応援する奴が一年、三年に多くて不利みたいでさ。やる気失っているみたいなんだ。さっきん、悪いんだけど、二年の生活委員を代表しておとひっちゃんに、「座談会」の協力を申し入れてくれないかなあ。たぶん他の奴だと、裏があるかと思って、おとひっちゃん受け入れないかもしれないからさ」

二年連続生活委員のさっきんは、それなりに発言権を持っているだろう。週番の仕事をきちんとこなし、制服も違反なしに似合う着こなしをしている女子だから、先生たちにも受けはいいだろう。

また、生活委員会も今回の『生徒会主催座談会』と『フォークダンス』には口を出してもいいポジションのはずだ。

さっきさんには、主に二年の生活委員から意見を集めてもらい、協力するスタンスを取ってもらおう。

そして。ここから。

重要な点はこれだ。

「やっぱり、さっきさんとは小学校いつしよだし、五、六年一緒だったし、おとひっちゃんも少しは気持ちを許すんじゃないかと思うんだ。できれば、細かい資料とかそういうものちよくちよく運んでもらえないかな。きつと、みんなが協力してくれてるって分かったら、おとひっちゃんの気持ちも変わると思うんだ。自分をこれだけ必要としてくれるとわかったら、きつと、意地になっちゃったおとひっちゃんも、もう一度生徒会に残ろうって気持ちになると思うんだ」

さっきさんにそう言っている場面を頭の中に思い浮かべた。

僕の顔ははつきりと、『関崎乙彦の親友』面しているだろう。

さっきさんは僕を見て、いつものように、おとなしめに笑うだろう。

「いいわ、佐川くん」

完璧だ。

ひとりでシュミレーションにひたって、たぶん僕はにやけていたのだろう。隣の席にいた学習委員に思いっきりつねられた。

授業はたんたんと進み、学習委員の義務である荷物運びもそれにこなし、給食も終り、あつという間に放課後だった。五時間目で終わる水曜日は、すぐに家に帰ることができるけれども、反面、店の手伝いもしなくてはならないのが難点だ。部活をやっとけばよかったと思うのはこういう時だ。それほどやりたいのがなかったし、それよりクラスの連中と遊んだりする方がいいと思ったから、何もしていなかった。

もっとも最近は、おとひっちゃんにつきあつて生徒会室に入り浸ることが増えたけれども。今日は行こうかどうかどうしようか迷った。

昨日は総田と、内密の電話をしてしまったしな。

もしおとひっちゃんと総田のふたりが顔を合わせているところに立ち会つて、俺か総田かどちらかが口を滑らせたら大変なことになるしな。

君子は危うきに近寄らず。今日はおとなしく帰ろうつと。

生徒玄関で靴を履き替えていると、三組女子側のすのこ台にさつきたんがやってきた。右手に週番用の腕章を持っている。帰りもちやんと職員室廊下で整列して、挨拶するのが常だった。本当に大変だと思う。

「週番大変だよね、さつきたん」

けさに続いて、今日はやたらとしゃべっている。

三組の連中がたまたまいなかったので、変にかんぐられることもない。僕はさつきたんがにつこり頷いて、先の丸い黒い靴に履きかえるのを待っていた。なんとなく、一緒に帰りたい雰囲気だった。もっとも、他の女子だったとしても僕は同じようにしていただろう。たまたまさつきたんとはかえる方向が一緒だったし、英語の授業中に練った例の案をなんとなく、試してみたくなったというのもある。

「そういえば、帰り際に、関崎くんを見たわ」

「あいつ疲れ果ててただろ」

玄関をふたり一緒に出て、砂利道をゆっくりと歩いた。遠くのグラウンドでは野球部の連中がウォーミングアップ運動を声出しながら行っていた。そろそろ秋大会が近いからだろう。陸上部の連中もまた、グラウンドをゆっくりと走っていた。長袖シャツはいいけれど、学生服を羽織るのはなんだか暑苦しい。僕も襟を開けてのどを楽にした。学生帽はとくに、かばんの中にほおりこんである。

でもさっきさんと歩く時は、少しでも背を高く見せたい。かぶってみた方がいいかもな。

かろうじてにぎりひとつぶんの差しかない僕の背丈が情けない。保健体育で習った通り、高校に入る頃には背が伸びるんだろうか。僕はかばんを開けて、学生帽をかぶりなおした。

ちよつと重たくてうつとおしいけれど、とりあえずはさっきさんよりにぎりこぶしみつつぶんくらい、背が高くなった。

さっきさんは不思議そうに僕を見ていた。続けた。

「あれだけがばつっているのに、認められなかったらいやね。でも、佐川くんが言っているほど、辛くはなさそうだったわ」

「そうかなあ。たぶんあいつ隠しているんだよ」

「うつん、廊下で関崎くんが、私に聞いてきたの。生活委員会の中で、学校祭座談会の話は盛り上がっているかどうかって。その時は心配そうだったんだけど」

さっきさんは口籠もりながら、しばらくうつむいたまま校門まで歩きつづけた。気になる。あの、女子に話し掛けるのが極稀なおとひっちゃんか、なぜさっきさんに、そして何を話し掛けたのか、想像がつかない。

「私、今朝、佐川くんから聞いていたから」

「まさかあのこと話してなんかないよな！」

僕としたことが、あせって声が荒くなってしまった。びくつとした風にさっきさんは一歩立ち止まった。

「うっん、そんなこと、私しない。佐川くん、内緒のことを教えてくれたってこと、私だって、わかるから」

さっきさんの声はきれいな細い糸のようだ。次に続く言葉は生まれて初めて聞く、凜とした響きのものだった。他の女子のように語尾を延ばさず、あいまいな言い方でもない。僕の目をしっかりと見つめたままだった。

こんなさっきさんを僕はいまだかつて見たことがない。びくつとさせられたのはこっちの方だった。

「関崎くんに話したの。私は、関崎くんが一生懸命努力しているところを、五、六年の頃から知っているから大丈夫だって。他の男子だって、みんな関崎くんのいいところを知っているし、応援しているって。女子も」

ここで口ごもった。そりやそうだ。僕も女子がおとひっちゃんをどう思っているかなんて想像つかなかった。

「話すのは苦手だと思ってるかもしれないけれど、味方になりたいって思っている女子はたくさんいるわって」

絶句。しばらく、言葉が見つからない。

僕はさっきさんの言葉を頭に繰り返しながら、必死に質問を搜した。

なんとか見つかった。

「つまり、さっきさん、おとひっちゃんに、味方だって言ってくれたんか」

俺が頼むまえにか？

英語の授業中考えた計画を、さっきさん、一人で勝手にやってくれたんか？

でもなぜだよ？

どうしてそこまで勝手にやっちゃうんだよ。

「佐川くんが必死に、そうしてくれる人、探しているって気がしたの。私、余計なこと、してしまったかな」

いままでまさかそういうことはないだろうと、考えないようにしていたことだったのに、僕の頭の中ではすると答えが出てきてしまった。

ちつとも照れないで、いつも通りのやわらかい笑顔で側にいるさつきたん。自分でどういうことを言っているのか、わかっているんだろうか。たぶん、わかっていないに決まっている。でなかったら、こんなこと冷静に受け止められるわけがなかった。

「そんなことないよ。おとひっちゃん、よろこんでくれただろ？」

ごまかし笑いをしながら僕は心でつぶやいた。

まさか、やっぱり。さつきたんは、俺が。

まずいよ、おとひっちゃんに気付かれたら、えらいことになるよ。予定外だよ、そんなこと。

僕がもつと鈍感な奴だったらよかったのかもしれない。話している感じだと、さつきたん本人も自分が何を言ったのかよく理解していないみたいだった。勝手に僕が告白されたもんだと勘違いしているだけなのかもしれない。

でも、このことはかなり前からのことだった。

あくまでも僕の直感のみ、でだけど。

途中の横断歩道前で手を振ってわかれた後、僕はしばらく空を見上げて数回口をぱくぱくさせた。何かしゃべりたかった。薄くだいたいがかかった、さめた空に向かって、どうしてか聞いてみたくならなかった。

いつもだったら、帰り道一緒に歩くおとひっちゃんに、僕の感じたことや、頭をひねったことなんかをずっとしゃべりつづけるのだろう。幼稚園の頃からそうしてきた。おとひっちゃんもないがしろにしないで、

「そうだよな、うん、わかる。雅弘の言うこともわかるけどさ」と、自分の考えを懸命に語ってくれた。

そうだねそうだね、おとひっちゃんの言うとおりだよな。

いつからそういえなくなってしまったんだろう。

おとひっちゃんはずっとひたむきなままだ。

ずっと僕を親友だと信じて、本音をぶつけ、受け止めてくれる。
でも、この僕はどんなだろう？

総田とおとひっちゃんの秘密をひとつ、暴露して裏工作活動をやらかそうかと、思ったりしている。さらに、おとひっちゃんには内緒で、『関崎乙彦は水野五月のことを思っている』ことを他の連中にばらしている。その気持ちを利用して、さっきたんにひとつ、頼みごとをしようとまで思っていた。

結局、僕が意図しないうちに、さっきたんは勝手にやってほしいことをやってくれた。きわめつけだ。全く。

おとひっちゃんはさっきたんが僕の方に気持ち傾けているらしい、なんてこと、想像すらしていないにちがいない。いや、絶対そうだ。同じ小学校で、同じ二年三組だからよく話をするだけだ、と思っっているだろう。

おとひっちゃんは知らない。さっきたんが自分から話しかける男子ってというのはほんのわずかだったことを。そのうちの一人が僕だった。一緒に廊下を歩いて平気そうな顔をするのも、僕だけだった。一対一でしゃべっていて、最も楽しそうな表情を見せる男子も、僕だけだったようだ。僕は一度も、他の連中とさっきたんのツーショットを見たことがなかった。

総田と約束していた通り、夜八時きっかりに僕は電話をかけた。

別のクラスだったのにどうして電話番号を知っているのは簡単だ。生徒会室の壁にちゃんと、連絡網が貼り付けてられていた。こっそり、全員分を手帳にメモしておくのは簡単だ。おとひっちゃんには気付かれないように。

よくあることだ。

僕はしょっちゅう、いろんな人の電話番号を集めて、よく友達に聞かれた時教えたりしている。

「佐川はたぶん、水鳥中学で一番情報網が広いんじゃないか」とは、よく言われるのも、このせいだ。

店では相変わらずレジ閉めの声が聞こえる。さっさと下りていつて電話を掛けた。まだ母さんはいない。

手短に終わらせなくちゃ、何を言われるかわからない。

ワンコールした後、すぐに奴の声が出た。

「総田ですが」

「俺だよ、佐川です」

待ち受けていたんだろう。硬い声はすぐにやわらいだ。

「時間、きっちりしてるよな、佐川」

「もちろんだよ。俺の方から昨日切ったんだから。でも今、親がいるからあまり長く話できない、だから、手短」

僕はポケットに潜ませた紙きれを取り出した。

英単語を暗記しているふりをして、さっきまでずっと、メモで整理していた。

「おい、いきなりなんだよ」

「一度しか言わないからさ」

早口で、総田の言葉を遮った。

「今日、生徒会室でおとひっちゃんと会ったんだろ。それで反応はどうだった？ 少し、俺なりにできること、しておいたけれど」

どういうことをしたか、言ったかなんて、決して言わない。いう気もなかった。

「俺の方が聞きたいことだ。佐川、いつたい関崎に何を言ったんだ？ 昨日の今日だろ？ 一体、何をたくらんだ？」

「やっぱり、変な雰囲気だったんだね」

「あれが変でないなんて、思つかよ」

総田の芝居がかった語り口調に、僕は笑いをこらえながら聞いていた。

生で様子を見てみたかった。

「関崎ときたら、生徒会室に入ってくるなり、すっかり機嫌よさそうにしてさ、俺にフォークダンスの流れについて、たずねてくるんだぜ。あの関崎がだぞ！　今、俺も火気関係の問題で先生と最後の詰めをやっているんだけど、ちよつと、書類関係とか、時間の調整とかでいろいろうまくいかなかったりしているんだ。先生がいろいろ細かいからさ。ところが、関崎ときたら何したと思う？　俺が書いている書類を勝手に見てさ、さらさらって一筆書いた後、楽しそうに鼻歌歌ってコピーしにいつちまった。あのあとは、俺がその紙を持って、先生に出しにいったって一件落着になったけどさ」

「おとひつちゃん、何を書いたんかなあ」

鼻歌歌いつつ総田に何か、手伝いをしたらしい。

「ちよつと問題になっていたのが、生徒会側の火に関する扱いのことだったんだ。せつかくだから、ファイヤーストームやりたいだろ？　でも中学生には危険だからって声が多くて、結構危なかったんだ。だからどうやって話を通すかで、かなりもめててさ。そうだな、俺としては、先生とコネのある三年の先輩に頼んで、いろいろ袖の下計画をたくらんでいたりしたんだけどな」

袖の下。賄賂。その辺はさすが総田教授の発想だった。

でもなあ、何もわざと話を裏の方にひっぱっていかなくたってやりかたあるだろうに。

総田は続けた。

「関崎が書き残した案がさ、『生徒会でホースを用意し、さらにペットボトル、およびバケツを全クラス分あつめて水を用意し、ファイヤーストームの間中、水を絶やさないようにします。また、火の側には生徒会役員が全員待機します。当日は水鳥東消防局の方に直接お願いして、フォークダンス前に一言、挨拶をお願いするというのはどうでしょうか』俺からすると、何考えているんだ、くそまじめに、と思うよ。でも、変なもんだな。先生たち、その案を見て、全員あっさりOKだよ。『まあ、そこまでしなくたっていいかもなあ』は、は、はっは、って感じ」

さすが、おとひっちゃん、先生受けする案は見事だよ。

おとひっちゃんではなれば、思いつかないよな。

「おとひっちゃんなら考えそうなことだね」

少しだけ気持ち became になった。鼻歌を歌いながら生徒会室を去ったおとひっちゃんの姿を想像するとめまいがしそうだった。そんな軽いのりのおとひっちゃんを見たことがない。

おそろべし、水野五月さま。

「なあ、佐川。お前、いったい何をたくらんだんだ？俺がお前に話を打ち明けたのは昨日だよなあ」

総田は少しずつ、さぐりをいれるようにゆっくりと間を空けて質問を打ち出してきた。

「そうだよ、昨日聞いたから、俺のできることを少しだけやってみただけだよ。もしうまく行っていないようだったら、総田にも協力してもらうつもりでいたけど、もう大丈夫だよな」

さっきたんのことを言うべきかどうか、ちょっとだけ僕は迷っていた。でも、おとひっちゃんをここまで、舞い上がらせてしまい総田にもいい影響を与えていたところを見ると、もうこれ以上はいいだろうと思った。付け加えて早く電話を切ろう、決めた。

「でさ、総田。しばらくおとひっちゃんの様子を見ていてほしいんだ。昨日総田の計画していた案は、しばらく投げておいたほうがいなくて思う。確かにおとひっちゃんは、一度ショックを受けるとお前の言うこと聞いてくれるかもしれないけど、そういうのが必ずしも、生徒会にとっていいとは思えないんだ。副会長という形でもいいから、総田は生徒会に残りたいんだろ」

弱点と思われるところを突いて見た。

「言っな、佐川も」

「もつと川上さんと付き合いたいんだろ」

「だからなんでそういう話題になるんだって！余計だぞ。あの女とどう関係があるんだよ！」

やっぱり総田は、川上さんのことになるやたら向きになる。おとひっちゃんは、さっきたんだし、総田は川上さんだし、なんだか副会長ふたりとも、同じことを考えているような気がしてならなかった。

似たもの同士だよ。

「どっちにしろ、僕が言いたいのは、お互い来期は仲良くやっていく方が、うまくいくんじゃないかなあ。仮にだよ。おとひっちゃんが生徒会長を引き受けてくれたとしたら、総田は副会長、立場としては逆転しちゃうよね」

「心ならずも」

「もちろん総田はそんなこと、絶対しないと思うけれど、おとひっちゃんは舞い上がると思うんだ。今みたいにさ。総田がうまくいきそうにない、って思ったところをすぐに手助けしてくれると思うんだ。学年トップの頭脳は伊達じゃないから」

「どうせ悪かったな。俺は万年二番だ」

ひがんでるひがんでる。僕は笑いたくなるのをのど奥に押し付けて続けた。

「どうせ利用するんだったら、総田、とことん利用すればいいじゃないか。ね、総田って俺から見たら、魔術師だって思う時がある。昨日、おとひっちゃんの後輩をからかってパニックさせたりさ、あれはうまいよ。俺、あれはおとひっちゃんに出来ないと思うもん」

ほめてほめてほめつくそう。黙り込んだ総田の様子を、受話器の穴から感じ取るうとして僕は耳をぎゅっと当てた。

「お世辞言っていると思うてるかなあ。そんなことないよ。俺、素直に思ったことを言っているだけだよ。それだったら、総田は得意技に磨きをかけておいて、先生受けする問題についてはおとひっちゃんに任せてしまえばそれでいいんじゃないかなあ。俺だったら、たぶん、そうするよ。だって、そっちの方が楽だもん」

僕の言葉に嘘はない。誉め言葉をうまく引っ張り出しているのもまた確か。僕はいつもそうだった。誉め芸がうまいというのだろう

か。けなすよりも、むしろ相手のいいところをみつけて、しゃべり尽くす。そっちの方が気持ちいいし、相手も機嫌よくなっていい。おとひっちゃんとか付き合ううちにマスターしたこともあった。

「佐川。どうしてそこまで、わかるんだ」

搾り出すように、総田の声が耳に響いた。

がさがさと、声に疲れがにじんでいる。

「わかんない。ただ、なんとなく、俺の中でそう感じたから」

「もうひとつ。どうして、俺に協力しようって思うんだ。『関崎の親友』だっていうのに」

しつこいくらい繰り返された『関崎の親友』と言う言葉。

「俺から見たら、水鳥中学生徒会が一番いい形って、おとひっちゃんが生徒会長、総田が副会長で仕事を分担してやっていく方法だと思っただよね。俺が総田の親友だったとしても、たぶん同じことを言ってたよ」

僕は用意しておいたせりふを読み終えた。

総田はまだしゃべり足りないようだったが、両親が夜間金庫から帰ってきたのでさっさと切った。

なにはともあれ、総田におとひっちゃんの秘密をばらさないでよかったとつくづく思った。やっぱり、それだけは最後の一線として守りたい。でも、これ以上話題が広がっていったとしたらたぶん、僕は口走ってしまっただろう。

別に、俺が言わなくなたって、総田もそろそろ気付くよな。

自分に言い聞かせた。

きっと総田は、おとひっちゃんが舞い上がっている理由をうすうす感じているはずだ。たまたまさっきさんの姿を目撃しなかったから、気付かないだけであって、これから先さっきさんがさらに行動をエスカレートしていったら、もう隠しようはない。それは僕が、さっきさんに対してどう接していくか、にもかかっている。

さっきさんが僕へ、『同じ小学校出身の佐川くん』という感情を大切に抱えてくれているのは、伝わってくる。本音をいうと、嬉しい。さっきさんは性格もいいし、親切だし、女子の友達としてはたまらなくいい人だと思う。

好きとか嫌いとか恋だとか愛だとか、と問われると困る。

全く、そんな感情なんてないのだから。

もちろん僕だって男子女子の間に、いろいろ複雑怪奇なものがあるのは知っているつもりだ。おとひっちゃんを見ていればよくわかる。でも、僕には全く、そういう気持ちが湧いてこない。小学校時代の単なる仲良し同士として、一緒におしゃべりできるだけで楽しい。それだけだ。

まあ、僕の方としてはそうとしか、言いようがない。

もし告白されたりしたら？ やっぱりそう言うしかないだろう。付き合おうなんて思わないから、と。

問題は全く別のところにある。

『佐川雅弘が関崎乙彦の親友』であるということを、知らない奴はほとんどいないだろう。僕もおとひっちゃんもよく認めていることだ。

もちろんさっきさんはよく知っているはずだ。

もし、おとひっちゃんが、この事実『水野五月の片思いしている相手は佐川雅弘である』ことを知ったら、どういう反応を示すだろう？

おとひっちゃんと付き合いの長い僕には大体想像がつく。

荒れるなんてもんじゃすまない。

学年トップから滑り落ちるくらいの衝撃だろう。

さっきさんへの思いは、僕の目が腐っていない限り、四年間ずっと続いているはずだ。総田の言ったとおり、さっきさんの一言ですっかり舞い上がり、天敵に対してうまくいくようなお手伝いまでやらかしてしまう始末なんだから。

だけど、実は僕のことを、ということに気付いたとしたならば、
ダメージは想像つかない。

僕が望んでいなくても『女子』がきっかけで友情がこなごなになるなんて、しやれにならない結末、絶対に避けたい。

次の日も、そのまた次の日も、おとひっちゃんの機嫌はすこぶる良好なままだった。

総田が啞然呆然としつつも、おとひっちゃんの好意ある『フォーダンス企画』へのアドバイスをありがたく受け取っているらしいということも聞いた。誤字脱字および会計関係の書類なども、川上さんが苦労しているところをさらさらっと手直して、黙って渡してくれたという。

別に、小学校の頃から知っているおとひっちゃんの、ふつうな部分を見せているだけじゃないかと、僕は思っけれども。

そういう顔を生徒会室で全く見せられなかったということは、相当、おとひっちゃんも心がすさみまくっていたに違いない。

もちろんその陰には水野五月女神様がいらっしやることも確かだった。

僕が仕組むことのできる、唯一の方法だ。

さっきたんが週番で職員玄関に立っている時を見計らい、

「今日も大変だね、さっきたん」

と、声を掛け、一緒に教室へ戻る。必然、噂になりそうだけど、かえって意識すると思う壺だから堂々としている。

さっきたんも立派なものだ。決して、僕と話した内容を他の女子にはばらさないようだった。

別に話したことってそんなにすごいことではない。

「さっきたん、女子の友達同士ってどうなのかなあ。やっぱり友達のことを心配したりするだろう？俺もばかみたいだなって思うけど、やっぱりおとひっちゃんのが、心配なんだ」

あえてさらに、でもため息をつきながらつぶやいてみた。

「佐川さんと関崎くん、本当に仲がいいものね」

「だから、何とかして、あいつを生徒会長にしてやりたいんだ。こんな、失策続きの副会長っていう汚名を、晴らしてやりたいんだ。あいつがやめるなんて言ったら、絶対にその『汚名』は晴らせないんだからさ」

「そう。そうよね。私もそう思うわ」

一週間に三回程度、ちょこつとだけしゃべるにとどめた。

あまりたくさんやらかすと、さっきたんも馬鹿じゃないから気付く可能性が高い。僕が大切な親友のことで悩んでいることを、さっきたんに伝えればそれでいい。ずっと悩みつづけていて、いい方法が見つからずという風に振る舞い、さっきたんの顔を曇らせる。

不思議なことにさっきたんは、かならず僕の望んだ通りの行動を取ってくれた。

「佐川くんが内緒にしているから、選挙のことは話さなかったけれど」

と前置きをつけて、さっきたんは話してくれた。

「さっきも、関崎くんとすれ違ったの。なんだか、少しずつだけど元気を取り戻しているようす。私の顔を見て、ちょっとだけ笑ってくれたわ。最近はそんなことなく、目をそらされていたんだけど、やっぱり女子の反響が悪いつていうのを気にしていたのね」

おとひっちゃんがなぜいままでさっきたんから目をそらしてきたか。

その理由は簡単だ。

さっきたんの顔を見ると自分が真っ赤になってしまい、意味不明なことを口走りそうになるからに決まっている。

「生活委員会でも、学校祭の制服規定問題をもう一度考え直して、生徒会に意見書を提出しようかって話が持ち上がっているの。二年生の男子には、私たちと同じ小学校の人が多いから、気持ちも伝わるのね」

「さっきたん、その意見、誰が言い出したんか」

「私。ううん、手を挙げていったわけじゃないの。合間のおしゃべ

りで、なんとなく、女子と男子が盛り上がって、関崎くんを助けてあげようってことになったの」

残念ながら生活委員会がどういう雰囲気だったのかはわからない。ただはつきりしていることは。

さっきたんが僕の望むことをみんな、読み取って実行し、想像以上の効果をあげてくれたってことだけだ。

そんなこんなで一週間がたち、二年実力テスト、および担任の先生との面談、その他いろいろなが続いた。

水鳥中学の場合、クラスの活動発表などはほとんどない。授業でこしらえた鉄の状差し、マガジンラック、女子は手芸品、クッキーなどを売るにとどまっていた。

うちの母さんをはじめとするPTAの人たちが、教室利用ということで食堂をこしらえてくれた。チケットは前もって配られている。おなかやすいた時は、学校で注文したドーナツのセット三個で100円ものなどを、チケットで購入するようになっていた

唯一部活で参加させてもらえるのが音楽部の連中だろう。全校生徒が体育館に詰め込まれて、延々と一時間半、演奏を聴かされる。音楽が好きならそれでもいいけれど、僕はすでに寝るだけだった。

二日目に弁論大会。

去年までは三日目のメインイベントだった。

もちろんそれをずらすためにおとひつちゃんと総田を代表とする生徒会が力を尽くしたのはいうまでもない。

各クラス一名ずつ『僕の主張』『私の主張』という名目で作文を読み上げる。クラスで一応は取り捨て選択を行うべく、学級で発表してもらっただけでも、結局決めるのは担任の先生だ。先生達を攻撃するようなものではなく、あくまでも『自分』の内面を優先した内容を選ぶ傾向がある。ま、それにおとひつちゃんはむかついたってことだ。自分の意志ではなく、先生たちの意志で弁論の原稿を作って、いったいなんになるんだと書いたのが一年前のことだった。

生徒会は初日、二日目の行事にほとんどタッチしていないいらした。った。

教室からの移動指示を出したりする程度じゃないだろうか。始まりと終りの挨拶くらいだ。最初は総田、終りの挨拶はおとひっちゃんにすることに決めていたらしい。

僕は行事を成り行き任せに眺めていた。

たまにさっきたんへそれとなく話かけたりする程度だった。

おとひっちゃんと話す機会も一週間くらいは全くなかった。そう言うとなんだか驚く。僕とおとひっちゃんとはいつもお神酒徳利のようにくっついていたことを知っているからだろう。

忙しい時に顔を出されて、下手におとひっちゃんに怒鳴られるのは勘弁してほしい。

また、総田との間にまた挟まれて、顔色伺いあうのも疲れるからやめたい。

どこの部活にも顔を出してなくて、かといってエスケープするほど度胸もなく、ただみんなと仲良くしゃべっていたい、そんな連中が二年三組の教室にたむろっていた。五名くらいがぼんやりと日差しの薄れ行く中、机をかためてトランプをはじめていた。ばばぬきらしい。

僕は面子をみきわめた後、すぐに混ぜてもらうことに決めた。

男子三人、女子三人。カードのテンを切っているのはさっきたんだった。

生活委員も今のところはお仕事が明日までないらしい。

僕が来るのを見て、戸惑い加減に目をまんまるくしていたけれど、すぐにいつものやわらかい表情に戻った。僕は隣に坐った。

トランプゲームは僕も結構強い方だ。別に考えたことなんてないけれど、いつのまにか僕の方にいい札が揃ってしまい、勝手に上がってしまう。理由はわからない。トランプの神様がつかっているとし

か思えない。さつさと上がりを決めた僕は、となりのさつきたんの札を覗き込み、ちょこちょこつと助言してやつたりしていた。さつきたんの方はというと、運が向いていないらしく、なんどもジョーカーを引いてしまう。

「ずっとこうなの。調子が悪いみたい」

「でも顔に出したらだめだよ。知らん振りして、持っていないふりをしなくちゃ」

さつきたんの強みは、ジョーカーを持っていてもそれこそ『ポーカーフェイス』を保ちつつげられることだろう。僕の助言を素直に聞いて、さつきたんは三番目に上がることに成功した。

「そりゃあ、水野さん、佐川っていう強い味方がいるんだもんなあ」「そうだよ、佐川強すぎるぜ。さ、やーめたやーめた。金かけてねえのにこんなことやってたって、不毛すぎるもんね」

「俺、入ったばかりなのに、すぐにやめるなんてひどいよ。あーあ。なんのために来たんだろ」

ランプを片付ける男子学級委員に、これみよがしにいやみを言うが、誰も聞いてくれない。わかっている。僕はやたらと勝負事に強い。自慢じゃないけれど、おとひっちゃんにもランプやオセロなんかで一度も負けたことがない。総田とはまだ手合わせしたことがないが、たぶん勝てるだろう。ああいうのは気合で勝負だ。

すでに総田と僕との力関係は均衡しているか、むしろ僕の方が勝っている。

そういう相手と勝負するのは得意だ。

でもあまり、やりすぎると今のうちに、誰も相手にしてくれないという問題がある。しかたないので、僕も、チケットで引き換えてきたドーナツを開き、食べながらだべっていた。さつきたんも一緒だった。

晴れすぎた空の影が、教室の窓いっぱいに流れていた。ここに残っている連中はみな、派手に騒ぐでもなく、仲間はずれにされるで

もなく、ただ疲れて休みたくなった連中ばかりだった。他の同級生たちはすでにグラウンドで勝手に遊んでいるか、展示を見て回っているかだろう。もしくは帰っていたりして。

僕の隣で黙って聞いているさっきたんに、話を振った。

「学校祭、楽しみにしてた？」

「ううん、早く帰りたい、終わってほしいな」

正直なところだと僕も思う。まぜっかえす奴がいた。

「何言ってるのよ水野さん、明日はとうとう、フォークダンスよ。」

フォークダンスのためにみんな、燃えているって知っているでしょ」

一部、受けて笑う者あり。僕とさっきたんはきよとした顔のままだった。

「そんなに燃えるものかよ、フォークダンスってさ。なあ、佐川。たかがマイムマイムだけだろ」

正確な情報が流れてきていないらしい。生徒会サイトから得た情報によると、

「オクラホマミキサーもあるよ。あと、ジェンカとトロイカ」

ジェンカは、五人一列に並び、相手の両肩に手を置いて、右、右、左、左とステップを踏む。前飛び、後ろ飛んで、前に三回飛んで進む。分かりやすいけれども、あまり期待できない。というのがみんなの意見だ。

トロイカの方がまだましだという声も多い。参列に列を組んで真中の人が入れ替わり立ち代りする。三人で組むから、本来の目的は達せられないだろう。

両隣の人と手をつないでファイヤーを囲むマイムマイムにいたってば、もうなにを言わんか、だ。

「要するにだ、一対一で踊れる奴ってというのは、オクラホマミキサーだけってか」

学級委員が手を打って僕を指差した。

「しかも、そんなにたくさん曲があるってことは、お目当ての相手と手をつなげないうちに終わるって奴ですよ。きつと」

「生徒会も盛り上げるだけ盛り上げておいて、実は、そのところが甘いよね。佐川くん、親友の副会長さんに言っておいてよ」

「おとひっちゃんは座談会だけだよ。そんなこと言ったら俺、生きて三組の教室に戻れないよ」

ここにいる連中はみな、小学校が一緒だったから、関崎乙彦を『おとひっちゃん』と口にしても、妙に思われない。僕は目で合図をしながら話をそらした。

「女子って何が楽しみでフォークダンスに盛り上がっているんか？」

「そりゃあ、同じ学年にお目当ての人がいればさ、燃えるかもって思うけど、私ら二年の女子って、あこがれの人がほとんど三年とかじゃない」

「あ、おめえはそうなんだ」

「話逸らさないでよ。それに、同学年だけで輪を作ったとしても、五クラスみんな総当りしないでしょ。手をつなげないうちに終わっちゃうなんて、なんか淋しいよね」

さっきたんがそそ、と口を挟んだ。

「でも、当たり前たくない人も、ひそかにいるかもしれないわ」

僕とふたりの時に聞いたことのある言葉。雰囲気は弱らせたくなかった。

「それは言いつこなしだよ、さっきたん」

ひとしきりフォークダンスねたで盛り上がった。

僕にたしなめられたさっきたんはにっこり頷くと、黙って耳を傾けていた。いやな顔しないで、僕の言うことを素直に聞いてくれる。

不思議で、ちょっと怖かった。

さっきたんが、ではない。僕の口にする、言葉の力が、だった。

「そうそう、でもさ、その前に関崎副会長の命運がかかった『教師VS生徒』の座談会があるじゃない。その三組学級委員の君、緊張してない？」

いよいよ来た。僕は身構えた。

いくらここにいる連中が小学校時代からの友達同士だからといって、おとひっちゃんをかならずしもかばおうとするわけではない。

思ったとおり、学級委員は舌打ちした。

「司会がおとひっちゃんだっていうのがなあ、哀れを誘うというか」「だって企画を立てたのがおとひっちゃんなんだろ。本当だったらいかにも司会なれしていそうな総田副会長あたりに任せればよかったのについて思うけど、でも、なあ」

僕に質問を振る。

「あんな、佐川、生徒会もそこんところの人選考えてなかったのかよ。関崎のおとひっちゃんがだぜ、あがらないで、エキサイトしないで、マイク持てるかって言いたい」

「切れたら怖いのがおとひっちゃんの性格だからな。俺もそう思う」おとひっちゃんから聞いたところによると、仕切り役は関崎副会長すべてだという。各クラスの学級委員が壇上にずらっとならんで座り、各クラスの意見を読み上げる。その後先生側の意見と交換したのち、いきなり体育館で聞いている誰かから意見を募り、たまには抜き打ちで意見を請う。

この辺は僕も話しかまわらない内容だから、ぺらぺらとしゃべった。

「ふうん、おとひっちゃんの情熱が真っ赤に燃えていることは雅弘の言葉でよく、わかったよ」

「だろ、本当に情熱、そのものなんだ」

「でもなあ、自分にできることと出来ないことの見分けくらい、はつきり付けろよと俺は言いたいね」

三組学級委員は、座談会一日前になってようやく、熱く、語り始めている。こいつもちよつと勘違いしているよな、と思いつつも僕はさっきと一緒聞いていた。たまに相槌を打った。

「おとひっちゃんは偉いよ。本当に頭いいし。でもな、人前で仕切りが得意な奴じゃないよ。あいつ。しゃべりも下手だし、早口にな

るし、いきなり議論吹っかけられたら冷静でいられないし。な、雅弘。そういう奴が司会なんてやってみろ、崩壊するぜ」

「じゃあ、どうすればよかったと思う？」

いまさら聞いてもしょうがない。でも聞く。

学級委員は確かな、でも遅すぎる答えを返してくれた。

「水鳥中学にだって放送委員会っていうのがあるだろ。その誰かに、まかせちゃえばよかったんだよ」

いまさらながらどっさり出てくる活発な意見を胸の中にしまいこんだ。

があがあと、天井のスピーカーが鳴った。

耳障りにきゆうんと、マイクの悲鳴。

「本日の学校祭は、あと三十分で終了いたします。学校に残っているみなさまは、どうかお早めに展示物をごらんください。なお校内に残っている生徒のみなさんは、各教室、もしくは決められた教室に集合してください。決して、そのまま、帰らないでください」

これだって、もう遅い。

僕たちのように暇を持て余している連中でなければ、とつくに帰っているだろうに。日は翳っていき、やがて影濃く、冷たくなっていった。トランプをしまいこみ、自分の席について、大声で言葉を交わしつづけた。ひとり、ふたりと教室に戻ってくる連中もいる。だんだん、最初の五人との話題が届かなくなり、別の奴との会話が中心となり、やがて先生により中断となった。

「明日は朝八時半に集合。九時から、生徒会主催による「座談会」だ。学級委員二名は、朝の会に出なくてもいいから、真っ直ぐ体育館に集合するように。そして昼の展示が終わってからは、学校祭最後を締めくくる、フォークダンスが行われる。いいか、生徒自身の手で取り仕切る、初めてのことなんだぞ。お前らももっと、情熱を見せてみろ」

先生の方がおとひっちゃんたち生徒会の情熱に影響されているんだと思う。

だから、なんとか盛り上げてやりたいと思っているんだと思う。どうして、肝心要の生徒たちがこうまでしらけているんだと、不思議がっているだろう。

僕は、ぼんやりと聞き流しながら、さっきたんの方を見た。うんうんと頷いている。

本当にさっきたんって、「ミス校則」だよな。

似合う格好が校則どおりの格好だよな。

おとひっちゃんは別にそういうところを好きになっただけじゃないと思うけど、でも、自分の味方がこういう形でいてくれるってのは、きつと、舞い上がるほどうれしいんだろう。

帰りの会が終わると僕は、すぐに教室を出て、ひさびさに生徒会室に寄ってみた。

やっぱり明日の大仕事だ、一回くらい、おとひっちゃんに会っておきたかった。きつと修羅場だろう。僕なんかと馬鹿話する余裕なんてあるわけないだろう。だからこそ、安心して声が掛けられる。もし総田がいたとしても、せわしなくしゃべってさっさと帰るから、僕と総田との関係についてあまりとやかく言われないうだろう。

僕の考えは、はつきり言う。甘かった。

「おとひっちゃん、いるかな？」

おそるおそる覗いてみたところ、おとひっちゃんらしき人の影はなく、総田だけが背中を向けて立っている。まあいいか、と声を掛けてみた。

「総田、お前だけか？」

「んだよ。佐川、何の用だ」

ずいぶん冷たい声が帰ってきた。機嫌悪そう。これは早めに退散することに決めた。

「別に、ただ、いよいよ明日だなと思って、覗きにきたただだよ」
「たぶん誰も、しばらくこねえよ。佐川。ジューズあるから飲んで
けよ」

「喫茶店みたいなことしているね」

僕は言われるままに敷居をまたぎ、総田の側に席を取った。まだ
日差しが落ちない中、他の生徒たちがぼつりぼつりと帰っていくの
が見えた。総田の肩越しからは、カラスのたむろっているらしい大
きな木がちらちらと覗いた。があがあと、『あ』の音をにこらせた
ような声で鳴いている。

「あんな、佐川。お前、どうやって関崎を変えたんだ？」

ぬるくなつたサイダーを一本、缶のまま置いた後、総田は僕の顔
をじっと見つめながら尋ねた。

「それは言えないよ。俺だってそんなにおとひつちゃんが、協力的
な奴になつたなんて想像もしてなかったもん。多少小学校時代から、
お互いのことを知っているから、強みも弱みもつかめないわけじゃ
ないよ。でも、おとひつちゃんが楽しそうに協力してくれているん
だったら、そんなこと聞かなくなつていいじゃないか」

まだきづいていないのか、と半ばあきれ顔をしていたのかもしれ
ない。

総田は齒を食いしばつたような表情で、口を真一文字にした。

「わからないわけじゃねえよ。たぶん、ああいうことかと思当はつ
いた。でもな、関崎を隅から隅まで知っている佐川でないと、出来
ないことだつたんだろ？ なあ。やっぱり」

「どんなことだと思つた？」

直接総田の口から聞きたくて僕は問い詰めた。なんだか総田の様
子は、自信なさげに見えた。僕から目をそらすと、じつと天井を見
上げ、握りこぶしを作り、もう一度口を引き締めた。

「さっきまで、関崎と最後の詰めをやっていたんだ。たいしたこと
じゃない。あんときまでは、今までにないくらいうまく話が進んで
いたんだ。座談会の際には俺たちも椅子を出す手伝いくらいはする

とか、フォークダンスの時は水を運ぶことをするとか、いろいろとあれだけ関崎と普通に話をしたのは初めてだってくらいだった」

「ふうん、そうなんだ」

相槌を打った。

全部過去形で話しているってことは、そんないい雰囲気壊れたって証拠だ。

「あいつが純粹すぎるくらい純粹に、学校祭を成功させたいと思っていることはわかったよ。単なる規則大好き馬鹿じゃないということも。佐川が懸命に関崎のことをかばうのも、わからないわけじゃない、って思った」

「でもそれがどうして」

僕はさらに理解できず総田の顔をうかがった。ぬるいソーダは気が抜けていて、ほとんど砂糖水のような感じだった。甘ったるい。

「佐川。わかったよ」

総田はほおに笑い皺を瞬間、こしらえてつぶやいた。

「すべてをぶち壊すのは、やっぱり、女子ってところだな」

総田は読んだな。

僕にはぴんときた。

「女子、なんだ」

しくじったとばかりに舌打ちしながら、もういちど総田は上を見上げた。

「俺も油断していたよ。俺だけが気付いていれば、あとはうまくやっていけると思っててさ。のんびりとかまえていたら、あの女が全く何を考えてるんだか」

「あの女って、川上、さん？」

「そうだ、うちの会計だ」

総田を怒らせるなにかをやらかしたらしい。想像がつかない。黙って聞いていた。

了解と受け取ってくれたか総田は一気にまくし立てた。

「たぶん俺たちの雰囲気が和やかだったから、調子に乗ったんだろ
うな。ぽろつと言いやがった。『あれ、あそこに水野さんがいるよ』
ってな」

「水野さん？　うちのクラスの生活委員？」

とぼけたところ、あっさりと言いつ返された。

「わからないわけないだろう。お前が仕組んだことなんだから」
「どうしてだよ。水野さんとなに関係あるんだよ」

困った時は徹底してとぼけるのが僕の流儀だ。さらに舌打ちを二
回、総田は聞こえがしにして続けた。

「俺もだいたいそういうことじゃないかと思ってたさ。最近、生活
委員会の協力があつて助かっているとか、二年生は協力的だとか、
自慢げに話していたし、それをかこつけて、水野さんに自分から話
かけているところを見たら、そりゃ、怪しいと思うよな。三日前に
やっと俺も気付いた。馬鹿だよな。俺が馬鹿なのは、そのことを自
分の胸にしまわなかったことだよ。全く大馬鹿ものとか言い様ね
えよ。佐川、そう思うか」

「つまり、総田は、水野さんのことを、言ってしまったってことが
？　川上さんに」

「油断したよ。情けねえ」

「ちなみに、どこで？　教室で？　それとも生徒会室で？」

「そんなことは関係ないだろ！」

一瞬だが、総田の顔が一気にどす黒く染まった。

色が黒い奴の顔は、赤くならない。

「総田が油断するってことは、きつとふたりっきりの時だったんだ
ね」

僕はゆっくりとたたみかけた。ここまで言われたら聞かなくちゃ
終わらない。

「何していたかなんて聞かないけれど、きつと油断してしまいたく
なるような、雰囲気だったんだね」

「佐川、お前何を言おうとしてる！」

「何も言う気なんて、ないよ。たださ。ちょっとだけほっとしたよ」
血相変えた総田。でも僕は、ちっとも怖くなんてなかった。

言いたいこと、ここでいってやるう。

ちよつとくらい、反省してもらったっていいだろう。

「総田も、おとひっちゃんも、やっぱりおんなじなんだね。好きな子には油断しちゃうんだ」

「俺のどこがあの女を・・・！」

言いかけた総田に僕はにっこりと笑いかけた。

「大丈夫、言わないよ。ただ、おんなじことをおとひっちゃんは思っただよな。それでおとひっちゃんは、川上さんの言葉にどう反応したん？」

一番聞きたいところはそこだった。総田は頭をかきむしりながら、吐き出すようにつぶやいた。

「ぶつちぎれた。『お前らが、仕組んだのか』って、つぶやいて、シャープを叩きつけて出て行きやがった」

もうひとつ、確認しておきたいことを僕は訊ねた。

「どこにおとひっちゃん出て行っただの？」

「しらねえよ。ただ、それでもほとんどフォークダンスの実行予定はまとまったんだ。関崎の手でほとんどまとめられたようなもんだ。俺も座談会の椅子運びについての手伝い準備、手順をまとめたし。

一応、ほとんどの準備は終わった段階でよかったよ」

仕組んだか。

おとひっちゃんは単純だけど馬鹿じゃない。

これは早急におとひっちゃんを探さなくてはならない。

「総田、無事に座談会とフォークダンスは開けそうな状態なんだね。そういうことからすると」

「幸い、すべてが片付いてからだからな。しかし、佐川、俺は馬鹿だよな。おい、そう思っているだろ佐川」

僕に何度も問い掛ける総田に対して、どう答えればいいのだろう。そうだ、その通りだ。

「おとひっちゃんをとにかく探すよ。総田はこれ以上動かないでいた方がいい。せつかくここまでうまくいったんだ、絶対成功させなくちゃ」

僕は大きく生徒会室を飛び出した。

川上さんの口から漏れたということは、恐らく僕と総田がたくらんでいることまでばれている可能性がある。うっかりそれがばれてしまったら、もう手の施しようがない。

でも僕が徹底して

「そんなことないよ」

と言い放ったとするならば、なんとかなるんじゃないか。そんな気もしていた。

おとひっちゃんがいきなりそんな場所となると、どのへんだろう。思いつくところをすべて回った。図書館、職員室、技術家庭室、まさかと思うけれども体育館、グラウンド、一通り見て回ったけれどいなかった。しかたないので次は空き教室を回った。たぶん、三年と一年じゃないだろうかと思ってみたが誰もいない。あきらめかけたところ、灯台下暗し。二年三組の教室にあかりが灯っていた。だいたい闇も濃くなってきたせいだろうか。僕は無我夢中で教室に戻った。四組のおとひっちゃんが、三組にいるなんて、見られたら、大変だ。盗んでいるでないかと思われるだろう。

「おとひっちゃん、どうしたんだよ、こんなところにいたら」

「雅弘か、やっぱりいたんだ」

おとひっちゃんは教壇の上に腰掛けていた。膝を抱えて真っ正面を見つめていた。僕の顔を見てかすかに笑ったのは、たぶんばれていないから。少しほっとしたのを隠しながら僕はおとひっちゃんの隣に腰掛けた。

「さつき、生徒会室に行ったら、おとひっちゃんがどつかいっちゃんたつて聞いたから、焦ったんだよ。俺さ、おとひっちゃんが考えていることってなんとなくわかるから」

うまく言えず、息も切らしたままだった。

「やっぱし、雅弘だけなんだよな。俺の味方ってさ。雅弘、やっぱ俺は馬鹿だと思うか？ たかが学校祭に燃えている馬鹿だと思うか？」

そうは思わない。僕は首を振った。小学生みたいに子供っぽい振りをした。

「でも、みんなはそう思っていないんだよな。水鳥中学の生徒一同、みな、俺のことを物笑いにしているんだよな。分かってたよ。それくらい」

ある程度は正しく、またある程度は違う。

「おとひっちゃん、違うって。そりゃみんな、人によつては考え方が違う奴もいるかもしれないけどさ、三組の連中もみな、おとひっちゃんを知っている人たちは、がんばってほしいって言ってたよ。うん、さっきたんとかとも一緒にトランプしてたんだけど」

おとひっちゃんの顔がかすかにゆがんだ。

「小学校の頃からおとひっちゃん知っていたら、誰も誤解なんてしないよ。俺たちが知っているのは、生徒会に入る前から一生懸命にやっていたおとひっちゃんであつて、生徒会副会長って顔だけじゃないんだからさ」

「そう言ってくれるのは雅弘だけだ。俺は救いようない馬鹿だよ。最低だよ。なあにが、味方なんだよ。結局、舞い上がっていた俺が馬鹿じゃねえかよ」

どうしてなのかは聞いた方がいいだろうか。僕は迷った。

おとひっちゃんの口から『水野さん』という言葉を出させるべきか。

「舞い上がりがたくなるようなことが、なにかあつたんか？」

おとひっちゃんは、そつと周りを見渡した。僕とおとひっちゃん

以外誰もいないことを確かめた上で、

「自分の考えていることを隠せない性格だっというのは、前から親や兄貴に言われていたし分かってる。そうさ、どうしようもない単細胞さ。ひとつのことしか見えなくて周りに迷惑かける人間だっこともわかってるさ。そうだよ、総田の言うことは正しいんだよ。だから、校則改正の時だって、俺は馬鹿なことをやらかして、しくじったわけなんだ。でも、その理由を勝手に想像して、突きつけることはないよな。ひでえよ。ひどすぎる」

「いったい、おとひつちゃん、何を言われたんか？」

図星の言葉を言い出さなくて口があががする。僕は待った。

「ちくしょう、人を馬鹿にしやがって！」

「え？」

おとひつちゃんはうつむいたまま顔を挙げなかった。ひくくつづやきつづけ、息を荒々しく吐いた。

「俺があいつらよりも女好きに見えるのか？　ちくしょう。なんであんなやつらに俺だけけにされなくちゃなんねえんだよ。ちくしょう、総田の野郎、ちくしょう……」

身動きが取れず、おとひつちゃんは僕がいることすら忘れていたようだ。おとひつちゃんは両腕に顔をうずめたまま同じ言葉をつづやきつづけた。その声がだんだん、くぐもって聞こえ、鼻を激しくすすり上げる音に変わった。おとひつちゃんの、いささか錯乱した怒りの放出を、僕はただ黙って見つめていた。

泣いていないのかもしれない。涙を流していないのかもしれない。内から突き上げる悔しさが、いつしか涙に化けたただけなのかもしれない。なかった。

おとひつちゃんはその後、僕と帰った。途中までずっと無言で歩きつづけた。

なんと言えはいいかわからなかったし、それ以上に僕のしたことばれるのではないか、が怖かった。

学校祭最終日の朝、僕はおとひっちゃんを家まで迎えに行かなかった。当たり前だ。生徒会役員は朝六時前後から生徒会室に詰めているはずだった。でも、昨日の今日だ。

はたして総田とおとひっちゃんはうまくやっているのだろうか。

総田は大丈夫だろう。あいつは生徒会副会長としての顔と、ふだんの感情をばつきり分けることができる。でもおとひっちゃんは違う。あれだけ痛い思いをして、簡単に立ち直れるタイプではない。

あまり考えていると僕の方も立ち直れなくなりそうなので、あえて何も考えず二年三組の教室に向かった。三組の教室は展示に全く使われていない。自分たちの席に坐っている。

わくわくしている奴もいるのだろうけれど、やっぱり座談会が最初にあるとあって、ちょっと面倒くさそうだった。

とくに三組学級委員は体育館に姿を消していた。

校内放送が流れた後、指示に従い自分の椅子を抱えて、廊下に整列した。男女一列に並び、体育館に入場した。いつものことながら男子は前列、女子は後列。僕は前から二番目だから、かなり奥の方だった。脇に控えている学級委員の連中、生徒会役員一同の様子は一目瞭然、いい場所だ。

おとひっちゃん、どこにいるかな？

昨日のこと、やっぱりひきずっているかな。

一年から三年まで、椅子を全部運び終わり、席についたところで、校長先生からの挨拶が行われた。かなり長い。聞き流す。

その次に、水鳥中学生徒会副会長・関崎乙彦の『座談会開始にあたっての挨拶』が始まった。

無表情のまま、おとひっちゃんは脇を大股に歩いていった。手を振って合図したけれど気付かないようだった。舞台の袖には総田、

川上さん、その他の生徒会役員一同が待機していた。総田は後ろに手を組んで軽く両足を広げ、『休め』の姿勢のまま壇上を見上げていた。『悪の根源』川上女史はというと、髪を物憂げにかきあげて、体育館をぐるりと眺めていた。

壇上で紙をひろげ、目を落としたまま読み上げるおとひつちゃん。マイクに口を近づけ過ぎだ、わんわんと響いた。

「水鳥中学生徒のみなさん、本日の座談会に参加していただきまして、ありがとうございます。本日は、生徒の手による、生徒の本当に求める企画を行うということで、第一部に『生徒と教師』の本音を戦わせる座談会、第二部に『生徒たちの交流を深める』意味でのフォークダンス。二本立てで行うことになりました」

ここで息を次いだ。脇で総田が、「マイクをもっと離せ」と手で懸命に合図している。

おとひつちゃんは気付かない様子だった。集中しているのだろう。「今年は『服装規定』の改正など、僕たちにとっては大きな出来事がありました。水鳥中学の生徒が本当に求めていることは何か、それを僕達生徒会役員一同は、必死に探してきました。そのひとつが、『服装規定改正』という形で残ったことを僕は誇りに思っています。もちろん、すべてが正しいとは思いません。ほんの少しでも、先生たちに生徒の声を届けることができたのは、僕たち、水鳥中学生徒会の誇りだと思っています」

本当にそうなんだろうか？

おとひつちゃん、心にないことを言っているんじゃないだろうか。今の文章って、どう考えても、総田のことを認めているってことだよ。

服装規定の改正をやったのは総田だったし、おとひつちゃんはどちらかというと、否定派だったはずだよ。もとの制服の方がいいって。僕はおとひつちゃんの言葉の続きを待った。

「今回、先生およびたくさんの方の水鳥中学生徒のみなさんが声を上げ

てくれたおかげで、学校祭三日目を僕たち生徒自身の手で動かすことができるようになりました。その第一弾として、これから始まる『先生と生徒』による座談会が行われるわけですが、その前に「おとひっちゃん」は顔を真っ正面に向けた。この時初めて僕は、おとひっちゃんがずっと表情を隠していたのに気付いた。

無表情なんてとんでもないんだ。

この時まで、ずっと、見せないようにしてきただけなんだ。

「先生たちをお願いします。今から僕は、ここにいる生徒一同に、ひとつの質問をしたいと思います。その答えが出たとしたら、申しわけありませんがその通りにさせてやってください。どうか、絶対に、止めないでください。そして、内申書とか、そういうものにも影響させないでください」

かすかだが、机についた手がこわばっている様子だった。脇で総田が目を見開いて何かを訴えようとしている。おとひっちゃんに何かを言おうとしている。川上さんをはじめとする他の生徒会役員も口に手を当てたりしている。

椅子に坐っている連中もざわめき始めた。待ち構えている学級委員たちは食い入るようにおとひっちゃんを見つめている。

「ふつうの状態じゃねえよ、おとひっちゃん」

「雅弘、あいついったいどうしたんだよ」

両隣から僕に尋ねてくる同級生たち。

僕だって答えられたら、答えたい。

でも、読めない。今ばかりは、おとひっちゃんの考えていることが全く読めない。

わかるのは、総田にも想像のつかなかったことを昨日、やろうと決めただろうというそれだけだ。

先生たちかというと、それが思ったより落ち着いたものだった。生徒会顧問の萩野先生は他の先生たちに頷いてみせ、指を口に当てていた。黙っているという合図だろう。

ということは、すでに先生たちへの根回しも終わっているという

ことだろうか。

ざわめきがやまないまま、おとひっちゃんはマイクの真つ正面でゆっくりと発言した。

「今日、この座談会そのものに疑問がある生徒、もしくは座談会なんかに参加したくないと思っている生徒、もしくは、本当にやりたいことは、こんなことではないと、思っている生徒。今日まで何にも言わなかったけれど、本当はこんなことをやること自体が無駄だと思っている生徒。そういう生徒のみなさん。今日は僕、関崎がすべて責任を取ります。体育館から出て行くことを、許します。決して内申書とか、行動記録とか、そういうものには残らないと、先生達たちから了解は取り付けてあります」

やわらかいざわめきが、一気に煮詰まり、ぱちんとはじけた。

「おい、おとひっちゃん、何言い出したんだよ！」

「雅弘、お前知っているんだろ！ あいつ完全に頭おかしくなっちゃったんじゃないか？」

「あれだけ懸命にやってたおとひっちゃんがだぜ、いったい今になつて何を言い出したんだよ！」

僕とおとひっちゃんの仲を知っている連中が、今度は別の席にしながらも大声で訊ねてねてくる。後ろの女子たちも顔を見合わせているようすだった。前の方に座っている一年生たちは一部、「わあい！」と喜びながらはしゃいでいるのもいる。ことの重大さをきくと、わかっていないのだろう。

「あいつ、何考えているんだよ」

僕は先生たちの様子をもう一度観察。

萩野先生以外の数名は、少し戸惑った様子で口をとがらせている。でも止めようとしめない。緊張した面持ちで、生徒たちの方へ目をやっていた。

やっぱり先生たちにも了解ずみってことだろう。

おとひっちゃん、本当に何を考えているんだか。

でもまさか、本当に立ち上がって帰ってしまう奴なんていないよ

な。

やっぱりそれは、僕の考え、甘かった。

おとひっちゃんが仕掛けた爆弾の意味を僕は、理解してなんていなかった。

突然、総田が壇上に駆け上がった。おとひっちゃんの不穏な雰囲気を読み取ったのだろう。マイクの頭をおもいっきり下に折り曲げ、何かを早口に怒鳴った。僕には聞き取れなかった。受けたおとひっちゃんは、その総田をちらっと見返した後、全く聞き取れない声で言い返した。生徒会副会長同士の喧嘩。とうとう全校生徒の前で繰り広げられるのか。思わぬ見ものだばかりに、みなざわめき立った。

いつものおとひっちゃんなら、かっとなって言い返しているかもしれない。

でもここは全校生徒の面前だ、理性も働いたのだろう。

総田に軽く首を振り、手で制したまま、おとひっちゃんはマイクをもう一度口元に当てた。

「冗談を言っていると思う人もいる人多いでしょう。また、いきなりこのことでみな面くらったと思います。申しわけありません。しかし、今回の座談会を開くにあたって僕は、どうしてもこれだけは確認したかった。今日やろうとしている学校祭というのは、もしかして僕たち水鳥中学生生徒会の押し付けにすぎないのではないかと。ということ一点です。僕は去年の学校祭を経験して、内容が余りにもしらけているとか、意味のない、心に残るものではないということに絶望的な気持ちになりました。先生、いや、学校側の押し付けに過ぎない行事だと思います。もっと、水鳥中学生生徒全員の心に残るものにしたいと、それだけを考えて、学校祭三日目を生徒自主企画として、時間をもらうことになりました」

大きく息を吸う音が聞こえた。マイクは細かい音をずいぶん拾う。

「でも、よく考えてみると、それは僕の思い上がりであつたのだということが、この一ヶ月くらいでよくわかりました。今年の『服装規定』問題についてみな、同じ思いでぶつかっているのかと信じていたけれど、それは一部の生徒に過ぎないということ。そして、生徒全員が同じ思いを共有することは、難しいこと。もっと難しいのは、その本音を口にすることができない人が、ほとんどだということでした。どうしていえないか、それは簡単です。うっかり反抗したら、内申書に響くかもしれないし、もしかしたら希望の高校に進めないかもしれないというのがあるからです。正直言って、僕も、もう希望の高校に行けないだろうという覚悟はしています。生徒会顧問の萩野先生にも、再三、覚悟を問われました。ですが、今回の座談会を開く前にどうしてもこれだけは、確認しておきたかった。本当にやる気のある人、本当にこの学校祭に参加したいと思っている人。座談会を生徒会の押し付け行事だと思っている人は、どのくらいいるのか」

全校集会でこんなに静まりかえったことは、かつてない。

おとひっちゃんの声だけが響く。

隣で総田が拳骨を握り締め、今にも飛び掛りそうな目で見つめている。

「いきなり出て行くのは、椅子の運び入れもあるので大変だと思います。まず、質問したい人は手を上げてください」

後ろの方から「はい」と挙手する声。三年生だろうか。男子だった。

「では、お願いします。起立してお願いします」

振り返ると、三年の先輩らしき人ががたがた椅子を鳴らしながら立ち上がった。格好は校則どおりだった。不良っぽさのない、ごくごく普通の人という感じだった。

「今、関崎副会長がおっしゃれたことは本当でしょうか」

「本当です。今日一日に関しては、生徒会が取り仕切る形になりますので、内申書、その他の行動記録にマイナスとして残ることはあ

りません」

「そういう問題ではなくて、副会長が知りたいことというのは、今回の座談会が、生徒にどのように受け取られているかを知りたいということですね」

「その通りです」

「それを行動で示すということですね」

「その通りです」

くどいくらいに確認を取る三年生。たぶん二組の人だろう。

「それでは、今からクラスメイトに意志をそれぞれ確認します」

「ただし、クラス単位で移動ということは避けてください。あくまでも、水鳥中学の生徒ひとりひとりの意志において、決定してください」

「わかりました。では、三年二組のみなさん。僕たちははたして学祭を、どう見ているかを、この場所で表明したいと思いますが、どうでしょうか。もし、この座談会そのものに意味がないと思われる人は、今から僕と教室に戻りましょう。意味があると思っている人はここに残って結構です」

学級委員なんだろうが、それとも影の仕切り屋なのだろうか。僕には全く見当がつかない。しかしその発言がきっかけで、一人、二人と椅子をずらす音が響き渡った。三年二組だけではない、一組、五組、四組、そして二年生たちも、少しずつ列が崩れ始めた。おとひつちゃんのクラス、二年四組はさすがに誰も腰を上げない。でも僕のクラス、二年三組は後ろの方にいる連中が黙って立ち上がり、背もたれを片手で引きずりながら廊下に出て行った。

先生たちが出て行く生徒たちに声を掛けようとするのを、萩野先生はふたたび制していた。後ろの方に並んでいた三年生の席は、ほとんどが虫食い状態だった。一部坐っている人もいるようすが、ほとんどはどこかにいなくなってしまうていた。

二年生で残っているのは、二年三組、四組、五組。の半分弱。

一組と二組には生徒会役員が出ていないこともあり、あまり関心

を持っていなかったのだろう。姿はほとんどなかった。一年生だけがよくわけのわからない顔をしてうろろ歩き回っていた。でも出て行ったものは誰もいない。

おとひっちゃんはマイクを握り締めたまま、じっと見下ろしていた。総田がそのマイクを取り上げようと、ゆるやかに柄を取った。今度はおとひっちゃんも抵抗しなかった。総田はじっとおとひっちゃんの方を見つめたまま、一言だけ、たずねた。

「これで、いいのか」

マイクが声を拾った。

「俺のやったことの結果だ、悔いはない」

おとひっちゃんの答えは、椅子のぎじぎし音にかき消されそうになりながらも、僕の耳にはっきりと聞こえた。

その後始まった『先生と生徒』の座談会。

生徒会副会長・関崎乙彦の爆弾発言がきっかけで、先生と生徒との発言そのものは盛り上がったといっただろう。ひとこと言うてしまえば、司会者がほとんど不要なくらい、発言が続出したということだ。

壇上の各学級委員たちは、

「関崎副会長の言葉にもあった通り、学校祭自体に意味はあるんですか」

「生徒があれだけいなくなったということが、すべての答えではないですか」

「僕たちも本当は出て行きたかった」

と、ある意味本音を語ってくれた。すでにきっかけが、関崎乙彦副会長の一声によってできあがっていたというのもあるだろう。

結局、仕切り役にいつのまにか回っていた総田幸信生徒会副会長が、二時間みっちりまとめてくれた。

「いやあ、あれですねえ。やっぱり本日は無礼講、内申書や行動記録に響かない座談会ということですね、みんな本音がでますねえ」

軽妙なタッチでの話題づくりが得意な奴に、すべて任せたのは正解だったと、見ている僕の方も感じた。

生徒会顧問萩野先生が総括を行った後、最後に座談会責任者である関崎乙彦生徒会副会長はマイクを受け取った。ほとんど無言で様子を見守っている状態で、うっかりすると存在を忘れられそうだった。

「本日の総括は、これから十分後に、放送委員会の協力を得て、校内放送させていただきます。本日、最後まで、参加してくれた生徒のみなさん、そして僕の身勝手な意見を通してくださった萩野先生以下先生のみなさん、感謝しています。ありがとうございました」

深々と頭を下げた。他の人々が椅子を持って壇上を降りていく中、おとひつちゃんは動かずにいた。全身全霊を使い果たした表情で、ただ、席を見下ろしていた。

僕にとって、座談会の内容そのものは、もうどうでもいいことばかりだった。内容なんて、ほとんど覚えていない。心に残るものなのか、ある意味で「本音」の語り合いができたのか、そんなのは判断できない。

ただ、おとひつちゃんが成し遂げたことは。

口にしなかった生徒たちの『本音』を、体育館からの退館という行動によって、知ることができたこと。関崎乙彦副会長の一年間が、生徒会改選以外の方法で計られたこと。

……俺のやったことの結果だ、悔いはない。か。
残酷な結果だと、僕は思った。

座談会が終り、フォークダンスが始まるまでの五時間近くをどう過ごすか迷っていた。昼からは一部の有志たちによるリコーダー、ピアノ演奏会が行われるということで、関係者だけがたむろしていた。総田がこっそりと空いている時間を利用するという条件を条件に許可したらしい。おとひっちゃんの機嫌がよかった時に取り付けた約束だった。

おとひっちゃん、どうしているだろうか。

二年三組の教室に戻り、一枚残っていたチケットでドーナツを買い、さつきまで行われていた座談会の様子を思い出したりしていた。別の席でしゃべっている奴の声も聞こえた。

「ねえねえ、知ってる？ 三年生の先輩達、てつきりみんな帰ったもんだと思ってたでしょ」

「帰ったんじゃないの？」

「ううん、帰った人もいたけれど、それはただ、関心のない人ばかり。みんな教室で、先生のいない間、議論してたんだって。すごく難しいこと言い合ってた」

「ふうん、二年の連中は、ただ遊んでいいからラッキーと思っていただけみたいだけだな。夕方、フォークダンスの頃もつかい来るって」

「いやね、関崎くんの『関心ない奴は出てってもいい』発言があったでしょ。その後に、自分たちの意志でもって考えようって三年の先輩がいっぱいいて、空き教室で語り合おうって気になったみたいよ」

「信じられねえな。俺だったら、おとひっちゃん以外の奴だったら、とつくに帰ってるけどな」

小さな波紋が投げかけられたのは確かのようにだった。

先生たちがしきりに言う『情熱』。

座談会に出席するという形では残らなかったかもしれない。

『関崎副会長不信任』に近い、結果を出してしまったかもしれないかった。

僕は窓の外に見えるグラウンドを、遠目で見た。

学校祭二日間使って、夜に積まれたファイヤー用の薪が、塔のようだった。

、小さな炎が、上空に舞い上がるはずだ。

同じような炎を、いつだったかキャンプファイヤーで見たことがあった。

おとひっちゃんと小学校五年の夏、クラスのキャンプに行った時、一緒に見たことがあった。

あの時はさつきたんも一緒にいた。

まだ意識していなかっただろう、おとひっちゃんはまだ女子たちと普通に話が出来た頃だった。僕はそばで、夢中になって語るおとひっちゃんの、理科にまつわる話を聞いていた。

僕が

「ファイヤーの火って、太陽の写真に似てるよね」と言った時だった。

おとひっちゃんは、

「太陽の周りを包んでいるフレアという炎があって、日本語では『紅炎』って言うてるんだ。その炎はすごく熱くって、絶対に誰も近づけないんだ」

覚えてたの地学知識だったのだろう。周りの連中が聞いてくれるもんだと思ってしゃべりつづけていた。もっと小さい頃だったら、おとひっちゃんは物知りだと崇めてやったかもしれない。

その頃からすでに、クラスの女子たちはおとひっちゃんの博学ぶりが鼻についてきたみたいだった。

「よくこんなことばかり知ってるよね。つまんないな」

僕の方にもっと軽い話題、テレビ番組とか、おもちゃについてとかの話を振ってきた。

隣でむっとしているおとひっちゃんを、僕はなだめるように、

「ふうん、おとひっちゃん詳しいなあ」

何気なくおだてていた。それでも機嫌が直らずふくれっつらしているのに困ってしまい、僕は隣にいたさっきさんに声をかけた。

「おとひっちゃんとだったら、将来、宇宙旅行しても、迷子にならないですみそうだね。さっきたん、宇宙旅行、してみたい？」

今と変わらない、小さくまとまった顔立ちで、さっきたんは頷いた。スカートに見えるズボンっぽいものを着ていた。僕と変わらない背丈だった。

「お星さま好きだから、行きたいな」

「じゃあ、僕たちと一緒に、将来行こうよ。それこそ『紅炎』の近くまでさ。ね、おとひっちゃん」

深い意味なんて、十歳の僕にはなかった。

仲良しの女子にだったら誰にでも同じことを言っていただろう。

さっきたんはこくこくと頷き、おとひっちゃんを見てもういちど、微笑んだ。

あの時のおとひっちゃんはこういう顔をしていたのだろう。それ以上の会話をした記憶はないから、たぶん別の話題にそらしたのか、それとも言葉を返さなかったのか。あれつきり三人の間で、宇宙旅行の話は出てこなかったから、とっくの昔に忘れたものだと思っていた。

中学に入り、星座の詳しい勉強をすることになってから、さっきたんが星の知識についてものすごく詳しいことを知った。僕たちにあわせて、おとひっちゃんの話聞いていたのではなく、本当に星が好きだっただけだと思い込んだ。ひとりでもいいから宇宙旅行に行きたかったのだろうと、僕は決め付けていた。

もしかしたら。

もしかしたら、おとひっちゃん。

いっしょに、いつか宇宙旅行してくれる女子のことを。

おとひっちゃんはあの時から。

僕はさっきたんの姿を探した。

とりあえず、座談会にさっきたんはちゃんと残っていた。僕の斜め後ろでおとなしく話を聞いていた様子だった。帰り際廊下で、生活委員会の顧問に呼び止められ話をしているのを見かけた。

まだ帰ってきていないのかもしれない。

座談会についての生活委員ナリのチェックが入っているのかもしれないかった。

いないか。

しょうがないか。

まずは、声かけに行ってみるか。いつもだったら今ごろ、給食の時間だし。

最初は、総田の方に詳しい事情を聞いておきたかった。

総田が主軸となり、おとひっちゃんが手助けした形となる『水鳥中学学校祭第二部 フォークダンス』は、順調に進んでいるようだった。

計画はすでに、総田から聞いていた。

踊りは最終的に『オクラホマミキサー』と『マイムマイム』に絞り込まれたらしい。最初はみなで二列になってお目当ての人を狙って踊った後、最後の最後にマイムマイムで全員、輪になる。多くのみなさまが熱望していた『好きな人と手を握ろう』という行為は、最後の最後までチャンスを伸ばせるようになった。

時間帯は夜六時から七時半まで。まだ明るさが残っているのが気に食わないけれど、遅くなりすぎるとあぶないからしかたない。最

後は打ち上げ花火を先生と総田の二人で用意して一気に盛り上げる。今回は放送委員会、音楽部、臨時結成された応援団なども交えて、派手に打ち鳴らすと共に、秋の夜空を焼き尽くそうという趣向だ。

「これは盛りあがらねえ、わけねえな」

座談会の修羅場をなんとか乗り切った総田は、僕を見つけざま意味ありげな笑みをもらした。

生徒会室でわびしげにドーナツをかじっていた。

「すごいよ総田。よくここまで考えたよなあ」

計画書をぱらりと見せてくれた。ぎりぎりまで推敲していたんだとわかる。

「でも、あれはまずかった。俺もあいつがあそこまで、突っ走るとは思ってたかった」

「うん、座談会の爆弾発言だね。おとひっちゃんはどこ、行った？」

「一時間交代で、展示を観にいった。燃え尽きたんだろ。あれだけ叫んだらなあ」

「そっか。一時間待てば、おとひっちゃん、戻ってくるってことだよね」

僕は持ってきたドーナツを広げた。甘いチョコレート入りのを最初に食べた。

「ところで佐川、二年三組の、座談会に対する反応はどうだ？」

「うん、まあまあなんじゃないかな。うちのクラスはおとひっちゃんと同じ小学校が多いから、おおむね好意的、かなってところ」

「そうか」

総田は食べかすを机から払い、缶ジュースをすすった。あまり残っていないらしい。ずるずる音が聞こえた。

「でも、三年生は教室の中で熱く語ってたみたいだね」

「らしいな。俺も帰り際言われたよ。お前ら生徒会の、いわば信任・不信任を確認したようなもんだよなってさ。俺たちじゃねえだろう。関崎のだろう。とっつこみたかったけどな。やめといた」

「その通りなのに、どうして」

僕に、わからないのかといったげに、顔をしかめた。

「仮にだ、あれが改選で立候補者が一人だったら、普通は信任投票で一発当選だろう。でも、あの虫食い状態の席を見たдар。あの通りに投票されていたら、ぎりぎりか、もしくは過半数割れで、不信任決議だ」

そうだよな。確かにそうだよな。

「関崎は水鳥中学の無関心な連中に、行動させちまったんだ。関心がないって本音を、白状させちまったんだ。俺ならそこまでやらない。そういう本音を隠すように仕向ける。関心があるような気持ちにさせる」

それが総田のやり方だということは、僕もわかっていた。

『魔術師』かつ『教授』と呼ばれた総田ならば。

「佐川、俺、あの時、壇上から見下ろしてぞっとした。もし俺だったら、絶対に奴らを止めるよう、先生に頼むか、何か面白いことを言って立ち止まらせようとしたと思う。いや、させようとしたさ、関崎に」

「怒鳴ってたよね、マイクを曲げて」

「当たり前だ。でも、奴は冷静だった。あのまんま、ざわめいていた体育館の中がすかすかになっていくのを、黙って見ていたんだ」

総田はがくつと、芝居がかったしぐさで頭を垂れた。

「俺には、絶対に、出来ねえ」

外から見たら、学校祭三日目・副会長対決第一ラウンドは、総田の圧勝に見えただろう。

総田の個人感情を抜きにした活躍ぶりを目に焼き付けないわけにはいかない。

でも、おとひっちゃんはその代わりに総田から敗北宣言を引き出すことができたわけだ。

はたしておとひっちゃんは、総田の言葉を聞いたのだろうか。

「俺、まじで、会長でやってく自信、ねえよ。絶対こうなるって先読みしてたことが、こう見事にどんでん返しされちまったら、これから先、どうすればいいか全く見えねえよ」

ふふつと笑い、総田は付け加えた。

「佐川、じゃあ代わりに、お前が会長に立候補しないか？ サポ―トはもちろん、俺がする」

「まさか、おとひっちゃんが許すわけないだろ」
「だわな」

冗談だろう。まさか本気なんてわけがない。

あの総田が、ここで巻き返しをはからないわけがない。

でもあの時の総田は、嘘を吐いているようには見えなかった。

時間つぶしの会話をしばらく続け、おとひっちゃんが生徒会室に来るのを待っていた。なんだか太陽が照り付けてきて、秋なのに妙に暑かった。戸口側の席に戻り、残りのドーナツを食べ終えた。腹がくちくちになった。同時に足音が聞こえ、前で止まった。がらりと開いた。

「雅弘、来てたんか」

おとひっちゃんの足音だと、ふりむかなくてもわかっていた。

「待ってたよ」

「なんか、食ったのか？」

「ドーナツ全部」

僕の方を物言いたげに見つめたがすぐ、総田の方に向かっていった。いつだったかふたりの対決をこの位置で見つめていた記憶があった。八月の末だっただろうか。一ヶ月前とは違い、おとひっちゃんも総田も、声を荒げはしなかった。お互い、目で頷きあい、席を交代した。

おとひっちゃんは冷蔵庫からジュースを取り出し、すんと置いた。

「じゃあ、一時間後、たのんますわ」

「わかった」

簡単な会話だけだった。総田は僕を通りすがりにちらっと見て、

「無理を承知だ、頼む」

つぶやき、出て行った。戸を閉めたとたん、女子らしき甲高い声が聞こえた。

川上さんだろうか。待ち合わせ、していたんだろうか。

おとひっちゃんの前で会うのをやはり、ためらっていたのだろうか。

おとひっちゃんは全く反応しなかった。オレンジジュースを一気に飲み干すと、僕を手招きした。こっちに来いというのだろう。

立ち上がったけれど、僕はなんとなく、動けなかった。

動いちゃ、だめだ。

そんな風に足が決め付けたみたいだった。動けなかった。

両手を机についたまま、僕はおとひっちゃんと真つ正面に立った。

。

太陽を背に受けているおとひっちゃん表情は全く読めず、影絵のシルエットそのものに見えた。

「どうした、雅弘」

「今、誰もこないかな」

「ああ、他の生徒会連中は、みな一時からの演奏会を聴きに行ったみたいだ」

そうなんだ。

おとひっちゃん。とうとう僕にも順番がきたってことだね。思わず、歯を食いしばった。そのまま動けないままだった。

「おとひっちゃんさ、あのことは、今朝決めたんか？」

やっこの思いでこれだけ搾り出した。

「あのこと？」

僕は答えずに待った。おとひっちゃんも、とぼけるのをあきらめたのか、声を低くして答えた。

「雅弘には、言うべきかどうか、迷ったよ。けど」

「いや、それはいいんだ。おとひっちゃんが考えていたことは、それでもいいんだ。ただ、どうして、ああいうことしたんか？」

親友だから何でも話してほしいなんて、女子の仲良し同士のようなことを、求めてなんていない。僕だって、おとひっちゃんに何でも打ち明けるわけでもないのだ。それでも、親友だと思う。それが僕とおとひっちゃんのつながりだ。そういうことを聞きたいんじゃない。

僕は目立たぬようにかぶりを振った。

「おとひっちゃんは、座談会を成功させたいって、ずっと言ってたよな。本当に一生懸命、やってたよね。うちのクラスの男子も女子も、認めている奴はみんな、認めてたよ。もちろん俺だって、おとひっちゃんのこと、応援してたよ。でも、全校生徒にそのことを確認して、どうするっていうんだよ」

「答えは出てただろ」

ぶっきらぼうにおとひっちゃんは答えた。

思い出したくないし、つつかれたくないのだろう。

おとひっちゃんの中で、もう座談会は終わっている。

「ああ、出てたよね。過半数の生徒が、教室か外か、どっかにいなくなつたよね。あれ、生徒会選挙の投票だったら、副会長だって会長だって、どんな形だって不信任になつちゃうよ」

「わかってる」

「そんなにまでして、おとひっちゃんは、自分の支持数を知りたかつたんか？」

おとひっちゃんは答えなかった。僕の方を黙って見つめた。両手で缶ジュースの空き缶をぎゅっと握り締めていた。まだつぶしてはいなかった。

「そうだよな、おとひっちゃん、あれで自分がどれだけ、水鳥中学

の生徒に支持されているかを目で、確かめたかったんだよな。わかってるよ。おとひっちゃんが考えていることくらい」

僕はゆっくりと、くぐもった声で、おとひっちゃんに突きつけた。「これが生徒会引退の花道だと、勝手に思ってるんだろ！」

「何言ってるんだ雅弘！」

おとひっちゃんが立ち上がった。とんと、缶の底を机に叩きつけた。

やはりそうだ。僕がにらんでいたとおりだ。

俺の想像してたことって、やっぱり当たっていたんだ。

昨日の段階で、おとひっちゃんと総田は、今までになく和やかに話を進めていたという。川上女史の登場ですべてがおじゃんになっってしまったけれども、座談会の進め方しかり、フォークダンスの選曲およびプログラム決定しかり。ふたりの意見がうまくミックスされて、理想の形にまとまったんだと思う。座談会進行が結局総田に任されたのも、おとひっちゃんが自分の限界を見極め、預けようと決心したからだろう。フォークダンスの選曲も『トロイカ』『ジェンカ』を削るところに辿りつくには、お互いの意見が交差しただからだろう。

昨日、おとひっちゃんも総田も、お互いの良いところを、見つけたような言葉を口にしていた。

ほんの少しだけ歩み寄れたのかもしれない。

水野のさっきたんをそそのかしたのは、確かに僕だ。

僕に責任は、大いにある。

もし僕が、さっきたんにおとひっちゃんの応援を頼まなかったら、総田の計画どおり、座談会はごく普通の成功を見せ、満足げに笑うおとひっちゃんを見ることができただろう。総田もあとあと、『自分たちのおかげで』成功した旨伝えるかもしれないが、今のようないきなり決断してありえなかったはずだ。

しかし、川上女史が何気なく口にした『あそこに水野さんがいるよ』発言により、自分が舞い上がっていることを恥じたおとひつちゃんは、シャープを投げつけ逃げ出してしまったという。

総田に対して、何度も「ちくしょう」と繰り返した言葉。

やっと、歩み寄れたかもしれない相手に、やっぱり裏切られた傷。ちよつと良くしてもらったくらいで舞い上がってしまった自分への怒り。

おとひつちゃんは、生徒会副会長としての自分を、空いた椅子の数で計ったのではない。

僕は断言する。

言葉に出して、おとひつちゃんに伝えたかった。

「おとひつちゃんは副会長でない、素のおとひつちゃんそのものを、思いっきり、罰したかったんだろ！　嘘だと言ったたら、ほら、言い返してみろよ！」

廊下がいきなり静まり返った。僕の声が大きかったのだろう。でもかまわなかった。総田が聞いていようが、あとで川上女史に突っ込みされようが、僕のやったことを暴露されようが、どうでもよかった。

「もし、僕の知ってるおとひつちゃんの性格がもし崩壊してなければ、の話だけどさ『自分の内申書および行動記録がマイナス点として上げられてもかまわない。他の生徒にだけは自由な意志を表明させてやってください』って、萩野先生および、他のうるさがた先生たちに、頭を下げたんだろ。僕の推理と観察力が、総田の評価どおり『天才』並みだったとするならば、今言ったことが間違ってるなんて、全然思わないよ。おとひつちゃん」

おとひつちゃんは全く動かなかった。影絵のまま、風が髪の毛を揺らすのが見えただけだった。

「たぶん、一ヶ月前に僕に打ち明けてくれた時は、別の理由だった

んじゃないかな、と思っていたよ。きつと受験準備本気で始めようとしてるんだなって。本気で青大附高に行きたいって思っているから、未練あるくせに生徒会を引退するんだって、思ってたよ。でもさ、今日、おとひっちゃんとはちらつと、壇上で口にしていたよね。

『正直言つて、僕も、もう希望の高校に行けないだろうという覚悟はしています。生徒会顧問の萩野先生にも、再三、覚悟を問われました』って。他の奴らが立ち上がって、座談会を蹴ったことについては、内申書および行動記録に影響を及ぼさないでほしいと、おとひっちゃんは言っただし、それはたぶん守られるんじゃないだろうかと思う。でも、あの時おとひっちゃんは、『僕、関崎が責任をとります』と言っていたよね」

マイクがもしあったら、僕の方が鼻をすすり上げていただろう。息を吸う音がばんばんに響いていただろう。

「俺、確かにおとひっちゃんのこと、もつと器用だったらなあって思う時はあるよ。もつと、普通に女子としゃべれて、もつと総田みたいな奴とうまくやっていければ、きつとうまくいくだろうなあって。でもおとひっちゃんは、そうじゃなくなつて、小学校の時の友達からは認められているんだよ。それだけじゃないよ。知ってるか？ 体育館を抜け出した三年生たちが、学校に残つたまま、全員じゃないけど今後の学校について討論したんだっていう話。座談会そのものだってさ、おとひっちゃんほとんど仕切らなくても、発言、いっぱい出てた。あれはみんな、おとひっちゃんの言葉によつて、やつと動き出したってことなんだ。いいことが、悪いことが、俺にはわかんないけどさ。おとひっちゃんのことを、俺も」

息を吸い込み、思い切つて口にした。

「さっききたんだって、認めているんだよ！」

おとひっちゃんの手が、空き缶を握りつぶした。

「雅弘、まさかお前もあいつらと！」

ついにつつかれた。いつもなら逃げる。でも今の僕は逃げる気なんてさらさらなかった。不思議と涙は出なかった。いったん叫べば、

隠れた言葉がするすると手繰り寄せられて、強烈な矢に化けた。何かが僕の芯を熱く燃え立たせていた。

「違うよ、違う、俺はおとひっちゃんの親友だよ。絶対に、それだけは変わらないからね。けど、ただ」

翳っていた表情が、光の加減で一瞬はつきりと映った。

血の気の引いた、うそじゃない顔。

僕の言うことを否定できずにいる、わかりやすい表情のおとひっちゃん。

ちらりと光った目の光沢。

それにぶつけるため、僕はめいっばい、叫んでいた。

「俺はこれ以上、おとひっちゃんが逃げてくところ、見たくないよ。不信任されるのは仕方ないけど、生徒会からも、総田からも、青大附高からも逃げていくおとひっちゃんなんて、もう見たくないよ！」

不意に、僕の中の潮が引いていった。熱に浮かされたような言葉の波が収まり、僕はおとひっちゃんが表情を完全に隠したのを見た。白いシャツ姿のまま、背を向けた。窓際に手がかかった。

「そんなに、今の俺が惨めに見えるのか」

吐き捨てるような声。テーブルの向こうにかろうじて聞こえる声で僕も言い返した。

「見えるよ。おとひっちゃん」

それ以外の言葉をかけたかった。

でも、それ以外、何を言えいいのかわからずじまだった。

黒い影は全く動かず窓枠を掴み、うなだれたまま。

僕は、そのまま生徒会室を出た。

おとひっちゃんを残し、僕はひとりで展示をぼんやりと見て回っていた。仲間がいらないわけではない。たぶん二年三組に戻ったら男女なりとも誰かは遊んでくれるだろう。でも、この顔で、この形相で帰ったもんなら、何つつこまれるかわからない。

僕が間違っているとは思っていない。

嘘をついているわけでもない。

後悔してるのは、ああいう言い方で精神ぼろぼろ状態のおとひっちゃんに叩き込んで、何がしたかったのかってことくらいだった。

少しずつだけど、僕も気付いてはいた。

おとひっちゃんの様子が、中学入学当時から少しずつ変わってきたことを。

成績優秀なおとひっちゃんが、なぜ公立の水鳥中学に通っているのか。小学校時代を知らない人は不思議がるものだった。水鳥中学で二年間首席を守っているおとひっちゃんが、なぜ、青大附中に進まなかったのかと露骨に訊ねる人も多いと聞く。

落ちたからだと答えれば、またひとつ質問が増える。

なぜ、「青潟の成績優秀な小学校六年生が一度は通る関門」青潟大学附属中学入試におとひっちゃんがすべてしてしまったのか。

全くもって、ミステリーだった。

試験当日におなかを壊したわけでもない。それどころか噂に聞いたところによると、ペーパーテストでは全く非の打ち所がない得点だったという。

考えられることといえば、面接の時にありふれた答えを返してしまったらしい、くらいだともいう。小学校の先生と、おとひっちゃんの両親が青大附中に問い合わせたが、納得できる説明はなかったという。

総田がいつか話していた通り、「他人の価値観をそのまんま、鵜呑みにしてしまっただけの考えになってしまう、そういうおめでたい奴だっただけ」というのがひっかかったのかもしれない。

僕の方にもそういう噂が流れてくるくらいなのだから、当の本人おとひつちゃん知らないとは思えない。また聞いて傷つかないわけがない。総田が見抜いていることを、うつすらにしろ、おとひつちゃんが気付かないわけがない。

青大附中入試失敗に関する愚痴をこぼされたことはなかった。知っている奴らは気を遣っていたし、おとひつちゃんも言い訳めいたことを一言も言わなかった。

がむしゃらに成績にこだわり、生徒会役員に未練がないわけではなくせに引退を決意したのは、理由ひとつ。

青潟市ナンバーワンのエリート校・青潟大学附属高校合格を勝ち取るため。

三人兄弟の真中で、余裕のある家の育ちではないおとひつちゃんが、月の小遣いから将来の学費を貯めていることも僕は知っていた。

そんなおとひつちゃんが、あえて内申書にも行動記録にも響きそうな賭けをやったのは、なぜだろう。

座談会の間、そればかりを考えていた。

で、たどり着いたのが生徒会室でわめきたてた事柄というわけだ。おとひつちゃんは一切言い返さなかった。もちろん言いたいことはたくさんあるだろうし、よくぞ僕も殴られなかったものだと思う。でもだ。

そうだとでもだ。

もう座談会は終わってしまい、結果は明白となってしまう、おとひつちゃんは生徒会を逃げるように引退することを決めてしまっている。

なんとしても、あいつを生徒会に残してやりたかったのに。いや、生徒会長として、立たせてやりたかったのに。

すでにさっきたんを使った工作劇をおとひっちゃんは見抜いているだろうか。見抜いていないことを願いたい。それがばれてしまったら、僕はおとひっちゃんの親友ですら、いや友達ですらいられないかなるだろう。総田に惹かれてる自分がいる一方で、隠しつづけたのは、おとひっちゃんの親友でありつづけたかった、それだけだった。さっきたんに慕われているらしいという、未確認の直感をあえて無視したのだって、おとひっちゃんを優先したからだ。

しかしすべてが裏目に出ってしまった。

今ごろどうしているだろうか。

おとひっちゃんがひとり落ち込んでいる生徒会室に戻り、フォークダンスの準備をばたばたしているだろうか。また無責任なことを川上女史に言われて、傷ついているんじゃないだろうか。

もう友達になれないかもしれないっていうのに、まだ僕はおとひっちゃんのことを心配している。小さい頃からの仲良しだったおとひっちゃんを、僕はある意味、わかりすぎていた。だから、見る必要がないところまで観察してしまった。片思いの気持ちなんて意味不明のくせに、他人のことはよく見通せる僕の感覚がまずいのだ。

バザーで投売り状態だったドーナツを二袋まとめ買いし、僕は外に出た。外履きに取り替えるのさえ面倒だった。グラウンド隅に見えるのはしだれ柳の高い木だった。ちょうど坐りごこちいい場所だった。日陰にもなる。ひとりにもなれる。僕はそこで、しばらく時間をつぶすことにした。

計算違いだった。

日陰で居心地のいい風が吹く場所、ということになると、同じことを考えている連中がたくさんいるわけだった。よりもよって、いつもたむろっている奴らが、とっておきのしだれ柳下を占拠していた。

二年三組の連中。男女混合の二年生集団。六人くらい溜まっていた。

「よ、雅弘も混じるか？ でももうトランプはやらねえぞ」

「なんだよ、不景気な面してるよなあ。ま、こっちに来て坐れよ」

「佐川くんも一緒にジューズ飲む？」

「今ね、水野さんに、ドーナツ買い出しに行ってもらってるんだ。

今投売りやってるって情報が入ったんでね」

さっきたんが来るのか。

少し気が重かったけれど、連中はちつとも僕の様子を気にしていなかった。

今ならトランプでぼろぼろに負ける自信、あるけどな。

無理に笑顔を作り、座り込んだ。敷物をしいてあるところみると、前もって計画していたらしい。クラスの学級委員も、座談会の活躍お疲れ様、といった風にお茶を飲んでいる。

「どうした、雅弘。元気ねえなあ」

「ちよつとな。おとひつちゃんとかんかした」

それだけ言つて、ドーナツの袋を開けた。でも生徒会室ですでに三つ食べた後で、食欲はない。他の連中にやった。

「めずらしいなあ。何か？ 今朝のことを打ち明けられなかったからってか」

「そんな女子みたいなことなんて、しないよ」

ただ、と僕は続けた。

「俺、縁を切られて当然のこと、言っちゃったよ」

生徒会次期選挙のからみについては触れず、僕はいつまんでけんかの内容について説明した。小学校が同じ連中だから、青大附中入試失敗のこととか、その理由とか、基本的情報はみな持っていた。難しく説明しなくてもみな頷いてくれた。

「そうだよなあ、おとひつちゃん、自爆行為だよなあ」

「でもしょうがないよね。関崎くんは自分でそれを選んだんだもん。私なんかは、よくやったって思うけどね」

「ただなあ、おとひつちゃんは立ち直れないだろうな。総田はとも

かくとしても、いかに自分に全校生徒の支持が集まっていなかったかを、証明するようなもんだもんな」

「そしてこれからが問題よ。第二部のフォークダンスあるでしょ。ここで総田副会長がどれくらい盛り上げるか、成功させるか、がかぎじゃないかな。今の佐川くんの話からするとさ、かなりいいところまで企画が進んでいるようじゃないの？ ほら、今、総田くんたちが準備してる。関崎くんもいるよ」

パーマ頭が爆発しているから、すぐ総田だと分かる。続いてすぐ側におとひつちゃんやペットボトルを運んでいる。僕がここにいることに気付かないだろうか。気付かないでほしい。

今の僕は、「おとひつちゃん」と素直に声を掛けられない。

「佐川くんもさっさとあやまっちゃったら？」

「そうだよ、お前らが仲良くないとさ、今度の実力テストの黒バインダーが手にはいらねえよ」

「切実な問題ですな」

軽くないなす連中のありがたみが、よくわかった。

僕も目を伏せたまま何度も頷いた。

「うん、早くなんとかするよ。けど、あのままじゃあ、おとひつちゃん、狂っちまうよ」

膝を抱え、ジュースを飲みながら、僕はしばらく同じドーナツを何度も噛んでいた。飲み込むとしゃべらなくてはなくなる。少しだけ、じっと考えていたかった。

「あら、佐川くん」

さっきたんがドーナツ袋を五つばかり抱えてもどってきた。僕がいるのにびっくりしたらしい。でも、学級委員の奴がわざわざ僕の隣にスペースを作ってくれた。余計なことしなくてもむかつくるけれど、素直にさっきたんが来て、笑顔を見せるのでそのままにしておいた。

「今聞いてたのよ、佐川くんがね、関崎副会長と大げんかしたんだ

って」

「あら？」

僕の方を、心配そうに、じっと見つめてくる。

「そうなんだ。俺、馬鹿なこと言ったからさ」

隣の学級委員は、僕の代わりに説明してくれた。

「雅弘はさ、おとひっちゃんが自分で自分を罰するためにさっきの座談会みたいな真似をしたんだろって責めたらしいんだ。おとひっちゃんも図星刺されたみたいで落ち込んでしまったってことなんだほら、おとひっちゃん、青大附中落っこちてるだろ。再挑戦を賭けて、青大附高を目指しているからガリ勉してるんだと思うんだ。話に聞いたところによるとな、青大附高の試験って、普通のペーパーテスト以外にも面接があって、それで落とされることが多いんだって。内申書や行動記録なんかで少しでも行動点をよくしておきたいのが本音だよな。でも、今回のことで先生たちからは要注意人物ってことでチェックされる可能性大。それを捨ててだ。おとひっちゃんは座談会で勝負に出て玉砕。結局自分は出来そこないなんだって思い込んでしまったってこと」

あらためて説明されると、僕も本当に何を考えているのかと情けなくなった。

さっきさんはふんふん頷きながら、僕の顔と学級委員の顔を交互に見て、首をかしげた。

「関崎くんは、辛かったろうな」

「あれだけ俺がひどいこと言って傷つかなかったら、あいつ人間じゃないよ」

「佐川くんは謝りたいと思っているのね」

「おとひっちゃんを元気にしてやりたい、それだけなんだよな」

「関崎くんはずっと、味方がいないって思っているのね」

「そう。さっきさんが一生懸命、生活委員会で努力してくれたけど、どうしても伝わらなかったみたいなんだ」

本当のことは、怖くて言えない。

僕はさっきさんの表情を窺った。もしかしたら、さっきさんにも見抜かれる可能性があることに、気付いた。さっきさんは僕に多少なりとも好意をもってくれているから、なおさらまずい。親友のために自分を利用されたと知ったら、僕なら激怒する。

さっきさんはジュースをもらって一口飲んだ。ほんの口を示す程度だった。おちよぼ口で、ちよつと尖らせたまま。

「今夜のフォークダンスは、関崎くんどうするのかしら」

「下準備はすると思うけど、座談会が中心だったろ。たぶんその辺でうろろするだけだと思う」

「そうなの。それで、佐川くん」

僕にさっきさんはもう一度尋ねた。

「私たちは関崎くんの味方だって、どうすれば伝えられるのかしら。佐川くんだけじゃなくて、私とか、他のみんなとか」

次の言葉は、僕にしか聞き取れなかった。

「私に、できることがあったら、言ってね」

はつかねずみが見上げるようなまなざしで、確かにそう言った。

僕たちだけではなく、他の学年、クラス連中もグラウンドの周辺に敷物を敷いて、それぞれにだべっていた。天気もいいし、なんとなく教室でうろろするのも飽きてしまったし、ということなんだろう。中にはそれにひっぱられたのか、近所のおじさんおばさんたちの姿もあった。運動部が通らない木々の木陰は、ただいまちよつとした休憩スポットになっていた。

さっきさんは僕の返事を待っているようだった。いつもの僕だったらいくつか案を出して、さっきさんにしてもらうよう頼んだだろう。実際頭の中にはいろいろなものが出ている。

でも、俺はしくじったじゃないか。

さっきさんにこれ見よがしに、好意を示してもらう方法をやってみて、しっぺがえしを食ったじゃないか。

そう思うと、何も言えなかった。

「それにしてもなあ、ほんと雅弘はおとひっちゃんのことが好きなんだなあ」

ふたたび膝を抱えて考え込んだ僕に、ひとつ間を置いていた学級委員がぽんぽんと僕の背中をたたいた。

「そういえばさ、午前中の座談会前におとひっちゃんが発言しただろ。関心のない奴は出て行けって。まあ内申書がどうかこうとかっていうのは別としてもさあ、それって、フォークダンスにも通用しないのかね」

軽く、質問を投げかけてくれた。ほっ、とか、それいえてるとか、仲間内でほわつと声が拳がった。

「つまり何か？ フォークダンスそのものに意味を見出さない連中は、勝手に抜けてもかまわないとか？」

「そうそう、そうだよ。座談会に意味を見出さなくって、フォークダンスを楽しみにする奴もいればさ、その反対だっているわけだろ？ もしそういう奴が無理やり、流れに従って参加させられているとしたならば、それはまずいよな。自分の意志でもって、フォークダンスをボイコットすることも、許されるんじゃないかなあ。どうなん？ 雅弘、生徒会側は」

僕にはわからなかった。おとひっちゃんとはともかく、総田がそこまで考えていると判断しづらかった。

「ま、ここにいる男子はあんまし、燃えてないようだからね。女子と手をつないでわくわくするような、ときめきもないみたいだし」

「あんださんみたいに、お目当ての男子と手をつなぎたい人とはとにかく頑張って、『オクラホマミキサー』踊ってくればいいさ。でも、これだけの大人数で、一時間半、踊りつづけるのか？ 俺は疲れるから少し休みたいって奴、出てもおかしくねえよ」

「要するにだ。ボイコットまでいなくてもいいから、疲れた時に休むことくらい、許してくれよ生徒会、って言いたいだけなのね」
「それがかなり近い！」

僕は黙って聞いていた。

ここにいる連中は、たまたまおとひつちゃんと同じ小学校出身だということ、身びいきめいたものはあるだろう。また、男女問わず仲のいいグループでもあるので、フオークダンスそのものにペタペタした期待をもっていないのも、確かにあると思う。

もし仮に、この中におとひつちゃんがいてだべっていたとしたら、全く違和感なく溶け込んでいることだろう。五年生のキャンプファイヤーの夜のように、炎を見つめながら、語り合っていられるだろうに。

いつから、おとひつちゃんは、あんなってしまっただろう。

もしかして俺が追いこんだんじゃないだろうか。

総田を支持する奴は圧倒的に多いかもしれないけれど、おとひつちゃんの味方であるという連中だって、今、ちゃんとここに坐っているのに。

無意識に口からもれた。

「今の話、全部おとひつちゃんに聞かせてやりたいよ」

「え？」

さっきただけが気付いたらしい。僕の側にそっと寄り添った。

「おとひつちゃんは味方がいないって勝手に思って、それであんなことしかしたんだ。でもさ、ここにいるのはみんな、おとひつちゃんのことを分かってやってる連中だろ。俺、しつこいくらい、おとひつちゃんを評価している奴がたくさんいるって、いい続けてきたのにさ」

じつと僕を見上げ、小首を傾げて、聞いてくれた。

もし僕がさっきたんのことを、ひとりの女子として意識することができたなら。でも、それはまだ、今の僕にはできないことだった。まださっきたんは、おとひつちゃんの片思いしている女子の一人だったし、僕にとっては友達以上のなにものでもなかった。

僕への特別な感情を利用して、さんざんおとひつちゃんを舞い上がらせる計画を立てていたくせに。僕はもう何もできなくなっ

まった。

さっきさんの瞳の表情が微妙に変わったような気がする。すっと離れ、また一口、ジュースを飲んだ。

こつくりと頷いて、僕以外の連中に向かって口を開いた。

「実はね、今、生活委員会で話をしていたところなの。フォークダンスって手をつなぐでしょ。でも、いろいろなクラスでは、手をつながれたくないって言って、無視したり、小指で避けたりするところもあるって問題が出てきたの」

この前、さっきさんが僕に話してくれたことだった。

「でもみんなが楽しみにしているし、生徒会の人たちもがんばってるからってことで、あまり口には出さなかったの。でもね、フォークダンスが全校生徒の意志ってわけじゃないってこともあると思うの。いやでいやでならなくて、でも無理やり踊らなくちゃいけない人もいるかもしれないし、逃げられない人もいるかもしれないって」

「そうっか。いじめられてる子とか、大変だよねえ」

「ばい菌扱いされてる奴もいるしな」

いつか見た、凜とした声が空気を軽く、揺らした。

「そうなの。でも、今日の座談会の様子みてて思ったの。そういう人たちにも、逃げ場所が必要なんじゃないかなあって。自分たちにも参加することを選ぶ、権利があるんじゃないかなって」

向こう側の奴が、「ナイスナイスナイス」と言いながらさっきさんにジュースのおかわりを注いだ。

笑顔で受け、さっきさんはさらに続けた。

「だから、これから生徒会の人たちのところに行ってこようかなって思ってるの」

「え、水野さん、生徒会の人って、今準備している連中のどこへか？」

僕が声を出せないでいる間、学級委員がファイヤー近辺を指しな

がら叫んだ。

「うん。佐川くんの言うとおり、たぶん関崎くんは自分のしたことの意味がないんじゃないかって、落ち込んでいるんじゃないかしらでも、味方だつてたくさんいるんだつてことを、いくら口で言つてもぴんとこないんじゃないかな。だつて、佐川くんがいくら言つても、伝わらないって……」

頬を赤らめた。色白のさっきたんは、すぐにわかる。

「そのままそのまま。今日は行動記録につかねえから」

「さっきたん、がんばり！」

もう一口すすつた後、あえて僕の方を見ずさっきたんは宣言した。「私、今から生活委員長のところに行つてくる。そして、一緒に生徒会室に行つてもらつて、フォークダンス時の自由退出を許可してもらえるよう、お願いしてみるわ。できるかどうかわからないけど、関崎くんにも、はつきりと、伝わるように」

小さな拍手。さっきたんはそれを背に、すつと立ち上がった。僕の方を最後に伏せ目でちらりと見た後、校舎の方へ駆け出していった。

さっきたんはそれつきり戻つてこなかった。

二年連続の女子生活委員かつ、行動服装共に先生受けのいいさっきたんが話を持っていったら、ほとんどの委員長、先生はころりと参つてしまつたろう。

無理難題では決してない。

でも本当にさっきたんは、生徒会室に行つたのだろうか。

いつのまにかグラウンドでファイヤー準備をしていた生徒会役員は校舎に戻つていつてしまった。さっきたんが行つたとしたら、その後だろう。

あれからしばらく、ドーナツを加えたまま進路の話とか、テレビ番組のネタとかで軽く盛り上がり、あつというまに五時過ぎ近くなつた。夕暮れも少し抑え目の中、そろそろ片付ける準備をする連中

も増えた。

「どうしようか、五時半にグラウンドの各クラス待機所へ集合だよ
ね」

「水野さんの持っていた企画が通れば、敷物そのまんまにしてお
いてもいいんだけどな。場所取りとして」

「でもさっきたん遅いよ。またもめてるのかな。関崎副会長と総田
副会長あたりのことで」

結果がどうなったのかは僕も知りたかった。

さんざん僕に言いたいことをぶつけられてぼろぼろになったあと
ひっちゃん。そのあとひっちゃんのところへ、さっきたんは生活委
員会という委員会名を武器にして、訴えに行った。

もしかしたら、さっきたんは僕が何をさせたいのかを敏感に察知
してくれたのかもしれない。今回に限っては、そうしてほしいとか
そう狙ったわけではない。

さっきたんは勝手に僕の本音を読み取ってくれた。僕が、いくら
口で言っても伝わらないという悔しさを、代わりに伝えに行ってく
れた。

今度こそ、僕はひとりになりたかった。

「ちょっと、トイレ行ってくる。まだ時間あるよな」

上履きのままだし、靴も取り替えたかった。

三十分くらいだったら、まだ時間はある。

校舎に入ってから十分も立っていないのに、外の空気はだんだん青みがかつてきた。まだ光の透ける空を見上げた。展示を行っている教室では、ほとんど後片付けが終り、ごみ袋を抱えて走る生徒の姿も見受けられた。僕が上履きを外に履いてしまい、泥がついていることも、誰一人気付かないようだった。

二年三組の教室を覗いたけれども誰もいなかった。がらんとしたくせに、上の方からは片付け指示の声が聞こえた。まだいるんだろうな。生徒会室。

階段を昇ろうかどうか迷っていると、誰かが降りてくる気配がした。

ばたばたと、うるさいくらいの足音。何かの拍子で、すんと転がった。

「お前大丈夫か？ 来週大会なんだろ。無理するなよ」

おとひっちゃんの声だった。身を小さくして隠した。

「関崎先輩、すみません」

「今の話はすぐに返事なんて出さなくていいからな。無理になんて絶対に言わないからな」

「はい、来週中にはお返事します」

僕は手すりの陰に隠れ、降りてくる足音が通り過ぎるのを待っていた。丸いいがぐり頭とめがねをかけた顔、そして胸につけたバッヂ『学級』のバッヂ。生徒会室にいた時、見たことのある奴だった。そうだった。一年二組の学級委員だ。

小学校時代、おとひっちゃんの陸上部後輩だったという不器用そうな奴だった。彼は僕に気付かず玄関に向かい、すぐに見えなくなった。

確かあの時、総田に細かいところをたくさん指摘され、困り果てていたのがちょっと哀れだった。最後には階段から滑り落ちるくら

いショックを受けて、帰っていった、あいつだった。

そうか、陸上部か。来週大会があるんだ。

時間稼ぎをしたかったわけじゃない。あれから四時間以上経って頭も冷えた。僕なりに結論も出た。だからこそ、今のうちに会っておとひっちゃんにあやまりたかった。

ただ、またさっきたんが生徒会室に行ったとしたら、たぶん総田もいる前でなにかしらの問題が起こっている可能性がある。紛れ込んだら、修羅場になることは間違いない。帰ってことを面倒にしていまいそうで、僕はまだためらっていた。

「おい、佐川、こんなところでなにふらふらしてるんだよ」

階段に座り込んでいると反対方向から呼ばれた。僕の情けない格好が丸見えだった。

総田がトランシーバーを持って玄関に出るところだった。こいつも足元を見ると、外履きのまま上がっていた。まさに校則違反そのものだ。

「総田。忙しいところ聞いてごめん。今、おとひっちゃんどうしてる？」

おそるおそる僕は尋ねた。

おどおどしているように見えたらみっともないと思いつつ。

「生徒会室で待機してる。話し合いもひと段落したしな。あとは本番さ」

「他の生徒会一門は？」 「とつくの昔に降りてった。たぶん待機テントの中で音響とかなんかやってるはずだ」

「じゃあ、おとひっちゃんは何をしてるの？」

「ぎりぎりまで校内の放送委員とか、先生たちとトランシーバーで打ち合わせして、それからテントにもどるって言ってたぜ。いろいろあるんだろ」

ぼそつとつぶやいた後、思い出したように付け加えた。

「しかし、お前、最後の最後でどんでんがえしを食わせてくれた

な。さすがだぜ」

「どういうことだよ」

「詳しくは関崎か、もしくは水野さんに聞いてみるんだな。ほら、今なら関崎ひとりだけだぜ」

それ以上は何も言わず、ピースサインで二本指を立て、総田も生徒玄関の方に姿を消した。

どういうことなんだろうか。

総田の機嫌はすこぶる良かった。

最後の最後でどんでん返し？

さすがだぜって、総田にとってプラスになったことなのかな？

おとひっちゃんにまた、何か動きがあったのだろうか。

僕には全く読めなかった。今ならまだ一人で生徒会室にいるという。

もしかして、さっきたんが生活委員長をひっぱっていつて話をしたということが、少しでも前向きな動きをみせたのだろうか。総田も「詳しくは関崎か、もしくは水野さんに聞いているんだな」と言っていたことだし。

あと二十分くらいしかない。

聞くなら今だ。

腰を上げて、僕は駆け上がった。踊り場で息をつかず、一気に階段を二段とびして生徒会室に向かった。薄暗く、窓からは寒いくらいの風が勢いよく飛び込んできた。

引き戸の前に立っても、人の気配は感じられなかった。でも南京錠は外れている。僕はノックをしないでがらつと開けた。おとひっちゃんが、片手にトランシーバーを持って窓辺でなにやら通信していた。

僕の姿を見つけ、はっとかたまった。

「おとひっちゃん、俺さ」

それ以上は言えなかった。僕は背を向けたまま引き戸を閉め、す

うつともたれた。

「雅弘、こっちに来い」

有無を言わさぬ口調だった。一発くらい殴られるのは覚悟していた。おとひっちゃんを見つめたまま、おとひっちゃんの腰掛けている椅子に坐った。近づくにつれておとひっちゃんの表情はいつも通りに見えてきて、僕はほんの少しほつとした。怒っていないようだった。

「さつきはごめん。俺も言い過ぎた」

早いうちに謝っておくつもりだった。僕の方から最初に頭を下げた。

おとひっちゃんはすぐに返事をしなかった。ちらつと目で合図をした後、トランシーバーに向かい、

「それではあと五分くらいしてからもう一度連絡を入れます。以上です」

先生たちに連絡をしていたのだろう。スイッチを切った。

「もう誰も聞いていないから、話しておいていいよな」

おとひっちゃんは僕の目を、じいっと見つめ、また外のグラウンドに顔を向けた。

「雅弘、俺は生徒会長で次期改選に出るつもりは、今のところない」
つぶやきよりも、もっと確固とした声だった。

「今日の座談会だけじゃない、この一ヶ月、ずっと考えていたんだ。俺には、水鳥中学の生徒全員をひっぱっていくだけの、人望がないってわかっていた。だから、総田にどっちにしろ、会長を任せるつもりでいたんだ。でも、さ」

言葉を切って、うつむいた。

「ついさつき、総田とも話をして、向こうは向こうなりの考えで、副会長でいたいという理由が、よくわかったんだ。二番手でないと力を発揮できないっていう気持ちも。だから、こっちから案を出すことにしたんだ」

「案？ってなに？」

おとひっちゃんは目を閉じて、間を取った。そのまま続けた。

「今年の一年で一人、見所のある奴が学級委員にいるんだ。今日の座談会にも顔を出していた。俺の後輩なんだけど、すげえ不器用でしゃべるのも下手で、でも、ひたむきで一生懸命なんだ。そいつ陸上部に入っているんだけどさ、どう考えても地区大会を突破できる脚なんてしてないんだ。なのに、一番稽古熱心なのはあいつなんだよな。裏方も全部やって、それでいて周りにはにこにこしてる。いつのまにか、周りに仲間が集まってくる。どんなうるさい先輩でもあいつには協力しようって言うてくれる。すげえ、いい奴だよ」

すぐにぴんときた。　いがぐり頭、一年二組の学級委員だ。

「俺、見た事あるかもしれない」

「あいつを、来月の生徒会改選で、会長候補として出すことにしたいんだ」

うそだろ？

声が出ないくらい、驚いた。　「会長候補って、おとひっちゃん、それ本気かよ」

「総田も了解した。あとはあいつの返事待ちだ」

びゅよんと、電波の乱れる音が空からした。

校内放送が流れた。

「校内に残っている生徒のみなさんは、至急、各クラスの待機所に集合してください。なお、総田生徒副会長から、今夜のフォーケダンスに関する諸注意があります」

僕は動かぬまま、おとひっちゃんの話聞いた。あとで担任に怒鳴られるだろうが、どうでもよかった。

「奴には言っておいた。ちゃんと俺も、生徒会副会長として残るから。お前ひとりに責任を負わせるようなことはしないからってさ」
おとひっちゃんは最後の部分を、早口に消えるように、つぶやいた。
きちんと聞き取れた。

ちゃんと俺も、生徒会副会長として残るから。

「そういうこと、なんか」

「もう一年、生徒会で勝負する」

頭の中が混乱してまとまりがなくなっていた。

僕と言い合いをした後、総田となんらかの話し合いが行われ、一年生生徒会長擁立ということに話がまとまったということだろう。

全く聞いていないからあくまでも僕の想像だ。

おとひっちゃんの言葉をそのまま信じるならば。

おとひっちゃん自身はすでに、自分を生徒会長の器じゃないと決め付けている。また総田は自分が二番手でこそ輝くタイプだということを実感している。だからお互いに次期生徒会長の座を押し付けあっていたということだろう。いわば、不毛な押し付け裏工作を試み、互いに失敗していたというわけだ。

一年生会長擁立案がおとひっちゃんか、もしくは総田か、どちらの発案なのかは判断できない。総田が匂わせたことを自分が思いついたと早合点してしまった、おとひっちゃんなのかもしれない。また、何にも知らない一年生を無理やり押し込むのも不安がある。ベストの方法とは、言い切れない。

僕からすると、どうも総田の計画がはまったのではないかという気がする。

なんとしてもおとひっちゃんを、生徒会に残すための。

総田幸信最大の譲歩策だったのではないだろうか。性格の不一致や、恋愛観の違い、そういうものをとっぱらつても、おとひっちゃんを水鳥中学生徒会に欠かせない人間として認めたからこそ、できたことではないだろうか。勝手な想像だけど僕はそう思う。

おとひっちゃんの一声で、水鳥中学生徒の一部が確実に動いたのを僕は見た。

みずからの意志でもって、体育館を後にした三年生たち。

座談会の壇上で、討論に加わっていった学級委員たち。

そして、生活委員会を代表して単身、話し合いにでかけたさつき

たん。

「てことは、おとひっちゃん、副会長で次期改選に立候補するんだね」

確認する意味で、僕は訊ねた。

振りむくことなくおとひっちゃんは頷いた。

「もし俺が生徒会長になってしまったら、総田のやりかたとぶつかりあう以外方法を見つけれないけれど、あいっだったら、もとうまくやっていけると思う」

もつと何か聞きたかった。でも、すでに五分以上経過している。僕は素早く立ち上がった。

「おとひっちゃん、どうせ下に降りてくるんだろ」

「連絡関係がひと段落したら」

「じゃあ、もう一度、いくよ」

おとひっちゃんに僕は答え、もうひとつだけ質問をした。

「さっき生活委員会の人たちが生徒会室に来たって聞いたけど、あれどうなったの」

背を向けたままおとひっちゃんは、身動きひとつせず答えた。

「三十分くらい前からグラウンドの側に、大きい遠足用シートを敷いておいてもらっている。疲れた奴はそこで勝手に休めってことになってる。雅弘、どうしてそれ知ってるんだ？」

「いや、あのさ、俺もよくわかんないんだけど」

もうぼろが出てもいい、僕は覚悟を決めた。

「さっきたんが自分の意志で、生活委員長に話を持っていったんだ。僕だけじゃない、二年三組の一部連中がさっきたんの宣言を聞いてびびってた。おとひっちゃんたちに、ちゃんとやるべきことをやるって伝えるために行くって。あんなにおとなしそうな顔しているのに。すごいよな」

ゆっくりとおとひっちゃんが僕の方に向き直り静かな表情で尋ねた。

「雅弘、お前気付いてないのか」

僕は、気付いていない振りをした。

「いつたい、何にだよ」

「いや、それならいいんだ。ほら、雅弘、そろそろ整列だぞ、急げ！」

帰り際、僕は窓辺の景色をもう一度確かめた。

黒い煙がうつすらと空をかすませている。藍色の空に白いものがふんわりと浮いていた

「では、みなさんならくお待たせいたしました。本日、水鳥中学校祭第二部、友情と愛情をテーマといたしました、フォークダンスを開催させていただきます！ 今夜の司会進行は私、生徒会副会長の総田幸信が勤めさせていただきます。どうかよろしく願います」

相変わらず軽妙なりの総田だ。側でマイクがからまないよう会計の川上さんがほどこいてひっぱっている。総田のお膝元、二年五組でひゅうひゅうと声がかかる。一年あたりからも「そうだせんぱい」と甘い声援が飛ぶ。いっちゃんんだが、一部とはのりが全く違う。

「午前中はみなさん、かなり衝撃的な出だしで、みなさん退かれたんじゃないでしょうか。いや、それは生徒会一同もみなおなじです。まあそのことについては、もうひとりの生徒会副会長に後始末をお願いするとしてもです。ですが、今回の学校祭、自分の意志を自分で表明するというテーマにいつもなにか変わっていつているように感じるもの、これまた事実。ということで、生徒のみなさんにお願があります。いえいえ、火には注意しようとか、ファイヤが燃えているところに不必要に近づくとか、そのことについてはすでに、青潟東消防署長様からのお言葉を頂戴してます」

髪を直す総田。そりゃあたりまえだ。あれだけ走り回ってたら髪が乱れるだろう。

「みなさん、お気づきでしょうが、グラウンドの周りに青いシートが、ところどころ敷かれているのを变だと思った人も多んじゃないでしょうか。前代未聞です。これは、みなさんの中で、フォークダンスにはちょっと乗り気じゃない、もしくはエキサイトしすぎて脚を折った、いや痛めた方、また友情を高めるためにちよつと語り

たい、そんなみなさんのためにご用意したスーパーシートで、ございます。生活委員のみなさまから、本日、ご意見をいただきまして至急用意させていただいたんです」

僕は、昼間たむろっていた場所を振り返った。しだれ柳の下には、ちゃんと小さめながら、シートとジューズの空き瓶が転がっていた。疲れたらあそこにいこう。

「あんまり長くしゃべっていると、僕の方が引きずり降ろされると思うので、さいごに一つだけ。このフォークダンス中に誰かが火のなかに『ファイヤー！』とか叫んで飛び込んだり、原始人の踊りみたく服を脱いで仁王立ちでもない限り、今年の学校祭は情熱の色、『紅』に染まって大成功を収めた、ということになると思います。

水鳥中学生徒会の総力を結集してまとめた学校祭代三日目、みんな、狂おうぜ！」

わあっと、口笛、歓声の嵐。すでに整列状態は乱れていた。体育委員の数人がもう一度、二列にまとまるよう指示をしていた。いきなりシートに滑り込もうとする人はまだいない。言われたとおり、まずはファイヤーをぐるっと囲み、両手を広げて感覚を取った。僕の斜め前にさっきたんが位置していた。僕の方を見て、小さく頷いた。

「さすが生活委員」

「ええ」

生徒会役員がたむろするテントの中に、たぶんおとひっちゃんは待機しているのだらう。姿が見えなかった。

木々の重い陰の合間に、ちらちら覗く紅の炎が空をなめまわしていた。オクラホマミキサーが三回くりかえされ、総田の一方的DJトークが炸裂している。

「じゃあ、次は、スピードを上げていくからな！ レコード75回転バージョンでいくぜ」

前もってスピードを速めた音楽を用意していたのだらう。いきな

りステップが混乱し、少しずつ輪から離れていく連中が出てきた。脚をくじいて横になっている奴もいる。体育委員か、保健委員か、誰かがしつぷをもつて走り回っていた。輪は思いつきり乱れ、ずんずん半径は狭まっていった。中にはそれを利用して、場所をお目当ての人の近くまで移動しようとする女子の姿も見られた。

僕はというと、誰でも合わせられるので平気だった。間違つて反対側の足を出してしまったという失敗はあったけれども、気にする奴なんていない。たまには男子同士当たってげらげら笑いながら、ぐるぐると火の粉飛びそうなところまで近づいていった。さすがに先生たちが注意する。

「あまり近づくなよ、やけどするぞ！」

三十分くらい踊りつづけるとさすがに僕も疲れはてた。ちようどしだれ柳の下にはひとり、誰かが坐っている。女子らしい。

お下げ編みだ。

たぶん、さっきんだ。

ジューズ、一杯もらえるかな。

僕はそつと抜け出した。

膝を抱えて、さっきさんは空をずっと見上げていた。

秋の星座がどんなものなのかわからない。僕が見分けられるのはオリオン座とカシオペア座くらいだった。

「さっきさん、疲れてるね」

「うん、ちょっとだけ」

僕だけというわけではなかった。ほとんどのシートでは人が数人ねっころがったり、かたまったりしていた。しだれ柳の下は夜になると小さな虫が飛んできて、はらうのにうつとおしかった。

なんだか風がそよいで落ち着く。離れたくなかった。

再び『オクラホマミキサー』が流れかけた。でも、最初の二秒く

らいでレコードの針が飛んだ。かけなおしているらしい。じりじりと古いレコード特有の雑音が響いていた。

総田は落ち着いている。ちゃんと合間にトークを入れている。

「ちよっと、レコードものりきつちゃって、しっかりブレークダンスしてるもんね。まーよくあることさ！ さあて、またもや二人の世界を作るBGM、それがオクラホマミキサーってわけだけど、ちよっとマンネリかな？ じゃあ、飛び込みで行きますか。体育の授業でこれはできるよね、みんな一気にジェン力でGO！ みんな、近くの人の肩を誰でもいいから掴んで、踊っちゃおうぜ！」

炎が空の真上をほの白く照らした。猛獣の舌のようにゆらぎ、躍り上がった。

「そつえばさ、さっきたん星が好きだったんだよね」

「こつやつて星を見上げてる方が好きなのよ」

さっきたんは輝きの違う星ひとつひとつを指でなぞりながら、僕にいくつかの星座名を教えてくれた。カシオペア座、オリオン座、天の川。

「今は太陽が隠れているけれど、それは太陽の位置の問題であって、突き抜けたら、雲ひとつない青空が広がっているはずなの」

「太陽は今でも、燃えているんだね」

「そうなの。フレアはすべてのものを焼き尽くすくらい、熱く、燃えているの」

さっきたんは覚えているだろうか。

小学校五年生の時に、おとひつちゃんと一緒に話した『紅炎』のことを。

いつか、紅炎に近づくくらいまで宇宙旅行しようとおしゃべりした頃のことを。

「さっきたん、五年生の時さ」

僕がそこまで言いかけた時、さっきたんはすぐになっこりと微笑んだ。

「宇宙旅行に行こうって」

「覚えていたんだ」

「うん。関崎くんがずっと、太陽系宇宙の話とか、星座の話とかしていた時、佐川くんが一緒に行こうって言うてくれたこと」

さっきさんは天を見上げていたが、だんだんファイヤーの炎にもどしていった。

「まだ五年生の頃の話だから、忘れているでしょう。佐川くん」

「ううん、覚えてるよ」

おとひっちゃんのことを思い出させたかった。

「私、星の話が好きになったのは、あの時からなの。関崎くんの話がおもしろくて、いつか佐川くんと一緒に宇宙旅行に行けたら、いいなって、思っていたの。でも、五年生の秋以降、関崎くんも佐川くんも、星の話や太陽系の話をしてくれなくて、淋しかった。だから、自分でいろいろ勉強していたの。いつか、夢が、かなうかな、って思ってた」

「あの時から？」

口もとをきゅっと閉じて、肩をすくめて笑った。

「あの頃みたいに、関崎くんも、星や宇宙の話してくれればいいのにね」

さっきさんの表情は、もう一度僕の方に向いて、ささやき声に代わった。

「佐川くんといつか宇宙旅行、行けるくらい、物知りになりたいから」

立ち上がって生徒会テントを見渡した。

なんとなく、膝にこぼれたパン屑のようなもの、かげろうみたいな虫、くっついていているような気がした。払い落としかかった。

トランシーバーを持って走り回っている奴がいなかった、もしくは暇を持て余していないか。たいして広くないグラウンドだ。白いワイシャツ姿で様子を見ながらゆっくり歩いている姿を見つけた。

「ほら、関崎くんがいるわ」

さっきたんも見つけていたようだった。

「さっきたん、結局生徒会室で、何を話したの？」
そつと聞いた。

「シートのことを委員長に話して、すぐにOKが取れたのよ。急ごうということになって、すぐに生徒会室に向かったの。そうしたら、関崎ちゃんと総田くんが話をしていたから、思い切って言ってみたの。うちの委員長、他に用事があつたみたいなので私ひとりで」

「さっきたん、ひとりでか？」

「私を見て二人とも、かなり驚いていたわ。フォークダンス担当は総田くんだと聞いていたし、そのことについてはすぐに話を通じて、指示を出してくれることになったの。でも、関崎くん、元気がなかったから」

さっきたんは、背を向けてしゃべっているおとひっちゃんを見ながら、ささやいた。

「佐川くんごめんなさい。私、生徒会の選挙に出てほしいって言っちゃったの」

僕のように窺うように、怒っていないかを確認するようにだった。

あわせて声音を変えて答えた。

「やっぱり言っちゃったんだ」

「ごめんなさい。でも、こうしないと、関崎くんには伝わらないと思ったの」

すでにばれてしまったか！

心中、慌ててしまった。

でも、もう終わってしまったことだった。

「で、おとひっちゃんはどうか答えた？」

「びっくりしてたわ。でも、ありがとうって言ってくれたの。その後すぐに総田くんを呼び寄せて何か、話し合いをしていたから、どうなったかはわからないけれど」

最後の最後の大逆転。

僕は五メートル先に見えるおとひっちゃんの背中に、つぶやいた。
「気付いてたんだ」

僕が何をたくらんだか、どうしてこういうことをしたかってことだけじゃない。もしかしたら、さっきさんが僕のことを、そういうふうに見ているってことも気付いているのかもしれない。

でも、もしそうだったら、僕はどうすればいいんだろう。

もし、さっきさんと付き合いたいと思うのならば、僕はそれなりの言葉で返事をしただろう。

僕はただ、おとひっちゃんとさっきさんと、五年生の夏と同じように、星の話をしながらファイヤーの炎を見つめただけだった。それ以上のことなんて、今の僕には、どうでもよかった。

僕は、どうすればいままでどおり、おとひっちゃんと呼んでいられるのだろう。

おとひっちゃん、こっちむけよ。

おとひっちゃん、気付けよ。

心で念じながらじっと見つめた。

おとひっちゃん、こっちに来いよ。

僕の中で激しく声が響いた。

さっきさんは、小学校五年の時の僕たちに会いたがってるんだ。

ばかばかしいくらい夢物語の、宇宙旅行をまだ、信じているんだ。俺と一緒にいうことは、分かっている。

何を言いたいのか、わかっている。

でも、今は、おとひっちゃんと一緒にいたいんだ。

僕は坐ったまま見つめ返すさっきさんの前にしゃがみこんだ。

「あのさ、さっきさん、ひとつだけ頼んで、いいかな」

「どうしたの？」

さっきたんはとまどうふうに首をかしげた。音楽がうるさくて聞こえないから、もっと近くに寄った。ちつとも、びっくりしていないようだった。

「今から俺、おとひっちゃんを呼びたいんだ」

「関崎くん、あそこにいるからきつと、気付くわ」

「ちよつとだけ、おとひっちゃんと話してほしいんだ。さっき生徒会室で話したようなことでもいいし、ほら、今の星の話でもいいんだ。とにかく、おとひっちゃんに、ふつうの顔して、しゃべってほしいんだ」

わけは言いたくなかった。僕ができる精一杯の、想いを込めた。知らず知らず、両膝について、ぐつとさっきたんに接近していた。恥ずかしくなんて、なかった。ただ伝えたかった。

「佐川くん、それってどうして？」

「おとひっちゃんを、俺、どうしても」

深く息を吸った。一度だけ顔を伏せてみた。さっきたんの目をじつと見詰め返した。はつかねずみのような表情のさっきたんは、何かをわかってくれたみたいだった。

「おとひっちゃんを助けたいんだ。どうしても」

瞳の光が、ちらりと白く掠めたように見えた。きゅつと唇をかみ締め、さっきたんはうなづいた。

「佐川くんがしたいことなら、いいわ。言われたとおりにします」

とうとう、おとひっちゃんも足を僕たちのいるしだれ柳の方に向けた。

「いきなりであります、予定変更。人数も少なくなっちゃったことだし、次は『トロイカ』に突入だ！ みなさん、三列に並んでくださいね。真中の人だけが前に流されてしまうという、実にジプシー、でも両脇のみなさまは曲が終わるまでずっと一緒にいられるという、ナイス。グットなダンスだね。用意はいいかな？ そこ

の体育委員のみなさんもどうか、ご一緒に。では、トロイカにGO
！」

煙臭く、咳き込みそうなくらい空気が濁った。しかしまだ夜は半ば。総田の咽もまだ元気だ。ジュースを差し入れしてやりたい。

早いテンポの局にあわせて、忙しそうに人が入れ替わる。この頃になると、列がどうの、学年がどうのとかまっているひまはない。ごった煮状態のグラウンドは、完成と汗と、紅い炎のみで埋め尽くされていた。

あの中に溶け込んでいる総田だって、これから先の不安を隠している。今夜の総田はスターでいられるけれども、いつまで続くかは誰にもわからない。いつつぶされるか、そんな不安に負けたくないから、必死に走りつづける総田。ほんの一時、祭りの華やぎで先の見えない不安を覆っている。

予定変更、予定変更、予定変更。

おとひっちゃん。総田も、根っここのところは一緒なんだから。だからおとひっちゃん。

僕と目が合った時、おとひっちゃんはふたたび、凍りついたように動かなかった。口もとで何かをつぶやいているが、聞こえない。

「おとひっちゃん、こっちにこいよ！」

両手を上げて叫んだ。

「疲れただろ、ジュース飲んでいけよ」

隣のさっきたんに目で合図をし、僕はもう一度叫んだ。

さすがに人前であれだけ叫ばれると、おとひっちゃんも無視するわけにはいかなかったんだろ。急ぎ早にシートの間を縫ってやってきた。

「雅弘、なんでこんなところにいる？」

「疲れたから、ほら、飲む？」

さっきたんが紙コップに注いでくれた。そのまま渡してくれた。生ぬるくなったオレンジジュースだった。

「あ、水野さん」

答えずにさっきたんは小首をかしげた。やわらかい笑みだった。

「さっきは、どうも」

目を合わされ戸惑い、おとひっちゃんは受け取りながら少しもった。

「今さ、さっきたんと一緒に、五年生の夏、キャンプファイヤーの時のこと話してたんだ。おとひっちゃんもあの時いただろ、それであの時話したこととかいろいろ思い出して、またおとひっちゃんから星とか銀河系の話、したいねって、言ってたんだ」

さっきたんは素直に頷いている。嘘はない。僕も続けた。

「ほら、覚えてないかな。やっぱり今日のように、ファイヤーの炎が燃えていて、それをおとひっちゃん見ながら、太陽の周りで燃えているフレアについて説明してくれたよね。ええと、あれなんだっけ、日本語で……」

「『紅炎』か？」

僕があいづちを打つ前に、さっきたんがこっくりとして、そっと指を指した。

「『紅炎』よ。あの時、関崎くんが話してくれたこと、今でも全部、覚えているの」

横から覗くとさっきたんの瞳には、おとひっちゃんが映っていた。困ったように唇を噛み、どう答えていいのかわからないふうにも、目はそらせないおとひっちゃんだった。かすかに後ろでさわさわとしだれ柳が揺れる。しばらく動かないでいたおとひっちゃんはすと目をファイヤーの向こうに移し、もういちどさっきたんの方に視線を戻した。

「きつと、あんな感じなんだろうな。太陽のそばって」

「うん、熱くてすべてのものを焼き尽くしてしまうって。でもいつか、太陽の近くまで宇宙旅行できたらいいなって、夢があるの。そうなの、五年生の、あの時から」

さっきたんの声は夜空の煙にくるまれたように、かすかに響いた。

片手で紙コップを持ったまま、おとひっちゃんは息を呑んで立ちすくんでいた。

体育すわりで膝を抱えているさっきたんを、じっと見下ろしていた。

やがて、意を決したように、すうつと指を、ファイヤーに向けた。

「水野さん。それなら、もっと近くまで、行って見ようか」

「近くって？」

さっきたんには意味が通じなかったようで、おとひっちゃんも戸惑っていた。

「ぎりぎり、火の粉がかからないところまで、近づいてみようか。」

輪も小さくなっているから、たぶんめだたない」

「いいの？ 注意されない？」

「どうせそろそろ火も弱まっている。大丈夫だ。近づけるところまで、行って見よう」

生徒会副会長にあるまじき危険行為発言。

僕と目を合わせたさっきたんはにっこり頷いて立ち上がった。

僕も釣られて立ち上がった。さっきたんに聞かれないようにおとひっちゃんの顔を覗き込んで訊ねた。

「おとひっちゃん、どうしたんだ？」

「なんか、むしように、火の近くに行ってみたくなっただけなんだ」
おとひっちゃんは炎を吸い込もうとする風に深呼吸し、僕に笑いかけた。

まだ何もなかった頃のおとひっちゃんと、同じ表情だった。

軽くおとひっちゃんは僕の肩を叩きファイヤーに歩み寄って行った。芋虫のように『ジェンカ』を踊る連中の間を縫って、ファイヤーの影に立った。ちょうど生徒会テント側からは死角で、踊っている連中がすれ違う以外、目立たない場所だった。

僕はさっきたんとならんで、ついていった。振り返ったおとひっちゃんは、僕とさっきたんに横顔を見せたまま、すうつと炎を見上げた。火の粉が飛びそうなぎりぎりのラインだった。熱くて、汗が

流れそうで、ふたりの顔も橙色に染まっていた。すべてのものが焼き尽くされるような情熱。近づけないくらい熱い炎。紅く、黄色く、暖かく、明るかった。

おとひっちゃんのかすかな声が聞こえた。

「なんか、あの炎がまぶしすぎて、変になってるんだ」

あの炎か。

あれが、おとひっちゃんにはまぶしすぎたんか。

三人、フォークダンスの輪の外で、ずっと見つめた。でも僕には目を焼くようなまぶしさではなく、もっと温かくやわらかく、燃えているように見えた。すべてのものを焼き尽くすのではない。遠くに見える太陽の光、のように。

おとひっちゃんはひとり、さっきたんに何かを語り始めた。僕には聞き取れなかった。天文関係のさらに詳しい話だった。素直にうんうんと聞いているさっきたん。夢中になって十歳の頃のように語りつつけているおとひっちゃん。

僕はそつとその場を離れた。

ひとりで祭りの輝きを見つめた。

「いよいよきましたラストナンバー。これぞまさしく天下のマイムマイム！ みんな知ってるよね。あの、誰でも手をつなげば十分踊れるっていう、あのばんざい踊り。これを三発やって今夜は締めようぜ！ あ、忘れちゃいけない。ゲルマン人の大移動みたいに、あちこち突進したらこまるよーん！ そいじゃ、いくぜ！」

僕は一步、二歩、離れて二人を見つめていた。総田の叫び声も限界まで来ている。輪の中にいきなり乱入する奴もいた。踊りも入り乱れていた。シートの上でそれぞれの時を過ごす奴もたくさんいた。その中で、僕はおとひっちゃんとさっきたんが炎と夜空を指差しながら天体について語り合うようすを見守っていた。

きつとさっきたんは、僕の頼んだことを素直に実行してくれただ
けなんだろう。わかつている。どこかでまた、僕のたくらんだこと
がばれてしまうかもしれないってことを。いつか僕も、さっきたん
へなんらかの答えをださなくてはならないってことを。おとひつち
やんにいつかは、本当のことをぶちまけなくてはならないってこと
を。

さっきたんはおとひつちゃんのことを好きになるかもしれない。
おとひつちゃんはさっきたんが僕のことをどう思っているか知っ
ているかもしれない。

僕もさっきたんのことを、おとひつちゃんと同じ感覚で好きにな
れるかもしれない。

また僕も、総田の方についていろいろ裏工作するのもかもしれない。
先が見通せないのは、僕もいっしょだ。

でも、今、この時だけは。

おとひつちゃん、勝負はまだまだ、これからさ。

つぶやき、僕は、紅炎を囲む輪の中に飛び込んでいった。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6789e/>

紅炎があかるすぎる～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日15時28分発行